

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	全權委任事項

分 類 番 号	
	60-1

国立国会図書館

登録番号	
------	--

全權委任事項

第一項 新式貨幣制度裁定之事

第二項 新式貨幣鑄造、開入之事

第三項 新貨幣及兌換券發行之事

第四項 兌換局事務統轄之事

第五項 舊錢兌換及鑄造處分之事

右之通、御坐候也

明治三十四年九月二十一日

大三輪長兵衛

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	手續書 甲号

分 類 番 号	
	60-2

国立国会図書館

登 録 番 号	
------------------	--

甲辨

手續書



別紙之通り朝鮮公使ヨリ被申越候間此旨及  
通知候也

明治二十四年九月十九日

外務省

大三輪長兵衛殿

敬啓者此次<sup>故</sup>國政府為矯正錢貨制度  
將改用新式鑄造并設立新舊錢貨交  
換所擬聘

貴國大坂府會議長大三輪長兵衛委任石  
項事務矣事係

貴國人茲特佈聞祈將此意

通知大三輪氏為盼俟他日約成應呈抄  
本奉閱也專此敬具

辛卯八月十四日大朝鮮欽差辦事大臣金嘉鎮

大日本外務大臣子爵

榎本武揚閣下

今般朝鮮政府ニ於テ新式貨幣ノ制度ヲ設ケ  
ラレ新貨幣發行相成候ニ付拙者ヲ聘シ其  
事務ノ委任致度趣御省ヲ經テ該政府ヨリ  
照會相成候旨御通達相成拜儀仕候然  
ル處貨幣制度改良ノ儀ハ實ニ國家重大ノ  
件ニシテ不謬易事業ニ有之候ニ付該國公使  
ト篤ト恠議ヲ遂ゲ確ト契約相調候上ハ更ハ  
御屈仕候様致度此般御若奉申上候也

明治三十四年九月二十二日

大坂府西區北堀江通五丁目

三拾五番屋敷

大三輪長兵衛印

外務大臣子爵榎本武揚殿

敬啓今般

貴國政府、於テ錢貨制度ヲ矯正シ新式貨幣  
ヲ鑄造シ並ニ新旧錢貨交換所設立ノ爲ノ拙者  
聘シ其事務委任致度趣 敝 國外務大臣ノ午ヲ  
経テ御通達相成正ニ兼知仕リ候然ル處貨幣  
制度改良ノ儀ハ實ニ國家重大ノ件ニシテ不審  
易事業ニ有之候ニ付

貴國政府、於テ別紙事項書ノ通り滿五年間  
拙者  
ハ全權御委任相成候事、御咄候ハ貴聘

應之可申心得御座候此段及御照會候也敬具

明治三十四年九月二十二日

大三輪長兵衛印

大朝鮮欽差辦事大臣

金嘉鎮閣下

全權委任事項書

第一項 新式貨幣制度規定ノ事

第二項 新式貨幣鑄造ノ事

第三項 新貨幣及兌換券發行ノ事

第四項 新旧貨幣交換ノ事

第五項 旧錢貨滯解處分ノ事

第六項 交換局事務統轄ノ事

右之通ニ御座候也

明治三十四年九月二十二日

大三輪長兵衛印



廷筴者未簡並別紙均悉一切我政府之現擬  
聘用

貴下專為委任此六項事

僕

既奉有政府命令

幹當是事彼此議論聚臻安悵理合一遵別  
紙施行但此外細換章程嘉猷我政府再行  
確定務煩

貴下詳速西渡隨即辦理為要端此謹具

辛卯八月二十日

朝鮮欽差辦事大臣 金 嘉 鎮 印

日本大坂府會議長

大三輪長兵衛 貴下

附騰別紙六項原本

第一項 新式貨幣制度規定ノ事

第二項 新式貨幣鑄造ニ関スル事

第三項 新貨幣及兌換券發行ノ事

第四項 新旧貨幣交換ノ事

第五項 旧錢貨溶解處分ノ事

第六項 交換局事務統轄ノ事

御届

朝鮮欽差辦事大臣金嘉鎮氏より御省より経て御  
通達相成候事件に付テハ第テ御答申上置キ  
候通リ令般雙方の間ニ於テ別紙写書ノ如ク契約  
相調候に付此段御届申上候也

明治三十四年九月二十五日

大坂府西區北堀江通五丁目

三於五番屋敷

大三輪 長兵衛 (印)

外務大臣子爵榎本武揚殿

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	手續書 乙号

分 類 番 号	
	60-3

国立国会図書館

登録番号	
------	--

乙部

手續書

大三輪文書

382

御伺書

本年九月中本邦

外務大臣、御紹介ヲ以テ朝鮮政府へ聘用之儀我東京ニ於テ同國公使ト約定濟之上今般渡韓仕別紙事項五何年間委任兼諾仕候處同國王殿下ヨリ交換署會辦ノ官職可被授令旨同政府ヨリ申来矣ニ付右官職相受ケ候テ差支無之哉此既御伺仕候也

明治三十四年十二月十七日大阪府會議長大三輪長兵衛



領事杉村濬殿

委任事項六條寫書添付



委任狀

大朝鮮政府現鑄銀銅貨幣另設交換署茲聘日本人大三輪長兵衛委任左開一切事務欽奉我

大君主陛下勅旨授以交換署會辦宜其恪勤奉公仰副我

朝家聘用之至意可也

大朝鮮開國五百年十月十六日

右給

交換署會辦大三輪長兵衛

委任事項

第一項 新式貨幣制度議定事

第二項 新式貨幣鑄造參幹事

第三項 新貨幣及兌換票發行事

第四項 新旧貨幣交換事

第五項 舊錢貸調正事

唯待到新貸無碍  
通用後量宜措處

第六項 交換署事務幹當舉行事

大朝鮮內務府印

第一八號

本月十七日付ヲ以テ朝鮮政府へ聘用國王殿下  
ヨリ交換署會辦ノ官職ヲ授ケラル可キ令旨有  
之候ニ付右官職ヲ相受ケ差支ナキヤ否哉之儀  
ニ關シ御伺出之趣致了悉候右ニ付當國駐  
在本邦公使へ伺出候處別紙寫之通り回示  
有之候間右様御承知有之度候也

明治廿四年十二月十九日

領事 杉村

濬  
印

大坂府會議長

大三輪長兵衛殿

大三輪長兵衛朝鮮政府之官職ヲ受度旨  
ノ同出ニ関シ本月十七日附号外ヲ以テ御指令  
方御同出之趣了悉右ハ本官ニ於テ仮リニ承  
諾致置キ追テ本省ニ経同ノ上更ニ何分ノ  
義可相達候間其旨當人ニ御達有之度  
候也

明治三十四年十二月十九日

辦理公使 梶山 鼎

人  
梶山鼎

辦理公使

領事杉村濬殿

# 御届

去ル十七日附ヲ以テ朝鮮國王殿下ヨリ授官  
之儀ニ付伺出候處同十九日附ヲ以テ御達シ  
相成矣ニ付即チ交換署會辦ノ官職令旨  
之通御請仕矣ニ付右教旨之写相添此紙  
御届仕候也

明治三十四年十二月二十日大坂府會議長大三輪長兵衛印  
領事杉村濬殿

教旨写添付

教旨

日本人大三輪長兵衛為交換署會

辨者

大朝鮮開國五十年十一月日

別紙朝鮮政府、聘用受官、允証外務  
大臣ノ命ニ依リ及御交付候間右、對シ  
受書可被差出此飯相達候也

明治二十五年五月十三日

辦理公使 梶山 鼎

元大坂府會議長

大三輪長兵衛殿





元大坂府會議長大三輪長兵衛

朝鮮國政府ノ聘用ニ應シ同國交換署會辦ノ  
官職ヲ授ケラルタルヲ以テ帝國政府ノ允許ヲ得  
度旨京城駐劄辦理公使梶山鼎介ノ證明ヲ  
經出願候ニ付内閣ノ決議ヲ得許可ノ證トシテ  
此書ヲ附與スルモノ也

明治二十五年三月二十二日

外務大臣子爵榎本武揚

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	仮約定書草案

分 類 番 号	
	60-4

登録番号	
------	--

# 仮決定書

以般新縣政府に於て受入

幣制改訂稿に新式貨

幣制改訂決定に新式貨

の製造に交換する設置に於て

之の發行に於ては

長官の署名に於ては

長官の署名に於ては

長官の署名に於ては

長官の署名に於ては

新式貨幣條例制定

中二項

交換の設置及短期條

例の制定に於ては

中三項

新式貨幣製造簡章

十四項

交換之於新貨幣  
及之換紙幣發行事

十五項

四銀幣之發行方法  
及兌換之事

十六項

交換之資金來源  
借貸之利息  
於朝鮮政府外債  
之募集事

十七項

交換之資金來源  
及法之事

十八項

交換之資金來源  
間金權委託事

十九項

交換之資金來源  
及之換紙幣發行事  
及之換紙幣發行事  
及之換紙幣發行事

才十頃

書記官云在府廳と  
厚臣任用點綴之事

如「~~事~~順朝鮮政府令

ヨリ日令事系、於、  
長々信、素心得、此書

通作、他、記、各自  
記名調、不、也

明治三十八年九月

朝鮮國書院八月

新島東三

朝鮮館長駐劄日方館長

金七加

日本外務省西園寺公使館

大正三年七月

# 仮約定書

以般新縣政府、新々旧貨幣  
制定、矯正之新々貨幣制定  
制定之新貨幣鑄造之交  
換之設置之以下之發行  
之日、今大三輪長之請、聘之此  
事務、全權委任之、自  
聖旨之、條項、如之

## 第一項

新々貨幣條例制定、事

## 第二項

交換之設置及規則條例  
制定之、之實施、事

## 第三項

新々貨幣鑄造之關、事

## 第四項

交換之、於新貨幣及  
之換紙幣、發行、事

第五項

四國幣制之改革、以鑄造  
新幣爲一事

第六項

交換之資金、金、日、金、通貨  
之移動、及、日、金、之、國、  
際、之、難、政府、外債、之、  
募集、爲一事

第七項

交換之資金、金、之、募集、方法  
之、利、及、其、消、却、之、法、爲一事

第八項

此項幣制、之、改革、之、間、金、權、  
之、在、事

第九項

金、之、輸、出、之、情、地、位、待、遇、之、  
論、每、月、初、之、日、之、金、之、  
之、住、宅、

恒新書

少股輕解政府、於四貨幣制法ヲ矯  
 正シ新式貨幣制法ヲ定メ新貨幣ヲ  
 鑄造シ交換ヨリ設置シ以テ之ヲ發行  
 スルハ其日ハ大三輪長久保ニ於テ事實  
 上全權ヲ委任スルニ付、又其ノ協議上之契約  
 乃レ條々在リ如シ

为一条

新舊政府貨幣の制ヲ廢止更ニ新  
 制ヲ設ケ舊貨之ヲ施行セシメ  
 舊貨スルノ期限ハ  
 五年間トシ此中頂上ノ一切ノ事務  
 八年限中トシ轉出金需求ヲ其全權  
 委スル

市和衆

朝鮮政府、新四萬幣を整理、國人不  
法貨を利し、專任者、請求を悉く請  
請せしむるを、及令施行せしむる

市素

別冊新式貨幣制及條目本位  
五兩和貨の種類、式、如左定  
ト雜記金貨、大去ハ、  
カ、ハ、セ、ト、ク

功田

曲園白少需更、新韓國送都与  
 下 改松之自今他、場所、於、通定  
 下 鑄造、下、少、爲、禁、不、

第五條

四、我黨之感情、按急、謀、年、限、之、  
 交換者、於、多、新、資、幣、之、以、由、漢、格、  
 定、多、皆、以、極、多、為、不、可、上、之、



中ノ条

此引換ハ四錢貨送幣局ノ所業  
ク之ヲ鑄造シ所價ノ以テ幣ノ其以  
及交換ノ諸費ハ新貨幣發行  
ノ利益ヲ以テ政府ノ負擔スルベシ

十七ノ条

交換ノ一資金金日本通貨金  
田ノシニテ送貨通貨ノ新貨幣  
ヲ發行スルベシ  
但シ新貨幣發行ノ資金金増  
減スルモノ一トシ

十八ノ条

此資金金政府五万内日本國  
ノ新貨幣政府ノ外國債ノシテ  
集メ其ノ方法及所定規則ノ類  
金貨金貨古金貨ノ發行  
ノ地條

此交換ノ資金金其計算ノ方法ハ  
新貨幣地金貨送貨金貨ノ其以  
殘存金貨毎月間ノ計算ノ其總額  
ノ四十分一ヲ資金金ノ利息及債務  
者額トシテ之ヲ配スルベシ  
但シ新貨幣發行ノ其以  
資金金ノ利子ノ政府ノ負擔  
スルベシ

第十九條

新貨幣制が實施之後五年以内、  
舊貨幣規則に改定を期する協定  
がなされず、或は出金者の政府に  
預け置かれざる

第二十條

交換局、或は新貨幣發行後人民  
の利益を交換銀行に譲りたる

第二十一條

此の換紙幣發行條例規則に基  
て、預金時期後急に之を輸出  
し、是を以て任する

第二十二條

交換局、或は人民、或は銀行、  
費用の以て設置せしむる交換局  
亦、或は人民、或は銀行、或は  
交換局、或は人民、或は銀行、  
一任する

第二十三條

此の交換局、或は人民、或は銀行、  
或は人民、或は銀行、或は人民、  
或は人民、或は銀行、或は人民、  
或は人民、或は銀行、或は人民、

第二十四條

此の交換局、或は人民、或は銀行、  
或は人民、或は銀行、或は人民、  
或は人民、或は銀行、或は人民、  
或は人民、或は銀行、或は人民、



# 仮決定書

と般に解政府に於て貨幣  
制度ヲ矯正し新式貨幣  
制度ヲ定メ新貨幣ヲ鑄  
造し交換するヲ設置し以て之  
ヲ發行するに付日下之三輪長  
官等と陳し此事幣主権  
ヲ委任するに付即ち協定  
事項として其條件  
を決定し如之

## 中一系

- 一新式貨幣制度制定
- 一交換の設置及規則條例制定
- 一新式貨幣發行及之圖、法令條規制定
- 一交換の手続施總裁

一而貨幣兌換一切事

一交換之兌換幣發行

之事

一交換之資金金之兌換  
萬國券集及貨幣法

之事

一新貨幣鑄造之関人事

幣一切之事

一市項幣中五年間  
施全權委任事

一使用年限五年間  
相當地位待遇之分  
月と賃金と住宅と  
政府、銀行、信託  
事業、

一書記官官位、附屬を便  
且任用懸隔之事

一其條件は、五十年間  
縣政府に於て、任  
三、縣長は、任  
とし、此書二通、作  
地、此、各、自、記、載  
印、も、也

少將新羅國王殿下、政  
府、於、財、計、之、政、理、也、

大日本帝國は、大、三、輪、長、を、

一、碑、用、た、し、新、羅、國、を、

大、江、東、の、東、に、在、る、公、使、金、を、

鎮、上、向、に、於、て、望、望、た、條、を、如、

し、廿一條

一、朝鮮、國、王、殿、下、大、三、輪、長、を、

待、つ、に、彼、等、品、を、下、ラ、カ、し、待、

偶、々、以、て、高、幸、な、る、を、扱、つ、て、

し、

廿二條

一、朝鮮、國、王、殿、下、大、三、輪、長、を、

新、羅、國、王、殿、下、大、三、輪、長、を、

終、つ、ま、ふ、し、

廿三條

此、廿一、廿二、條、其、年、限、満、







# 仮決定書

以て、朝鮮政府に於て、旧貨  
幣制を矯正し、新式貨幣  
製造に定み、新貨幣を鑄造費  
行ふ、且、日本大正十三年  
此事業、金権を委任し、  
二、日本銀行に、契約を交し、  
条々を定め、如し

## 第一条

朝鮮政府は、貨幣の制を廢止  
更、新式、製造設置に以て成  
効期限を、明治三十二年トス

## 第二条

朝鮮政府は、此事業に關する一  
切の事務、舊より、日本大正十三年間、日本に轉  
出せ、其金権を委任する事

## 第三条

朝鮮政府は、旧貨幣の鑄造を  
貨幣製造に關する、日本に法令  
に金権を委任し、應じ、踏  
踏する之を、日本に委任する事

## 第四条

一、新式貨幣制及真條  
目予新式引丹法及  
率上補助金法補助金  
格類、別冊、如、及  
定、及、及、及、

中五集

一朝韓國典圖為之遠邦為  
政務之自宗地場所於通  
貨之歸還重之少及禁之

中六条

朝鮮政府 新貨幣制度

明鏡山房

印發集八支摺馬七記遺之臨泉

旧蹕惡錢ニ交換爲ニ欲ラ新  
式錢買入ルヲ相當ノ價格定  
メ引換ル爲ラ事

庚辰初秋

以鐵鑿送幣焉、詔爲諸錢

廿八条

交標可諸德其美、以錢轉沈  
 已考即之、以、折、金、新、受  
 幣、榮、行、海、府、得、平、四、子、三  
 一、利、益、中、大、以、交、年、下、之、以、

中九条

新舞政府、於新式貨幣完  
行國之貨幣、金、之、大、據、  
、金、僅、其、實、下、已、用、其、  
、

中十条

、金、金、に、武、振、五、年、内、に、要、  
、に、に、之、外、國、債、募、集、  
、募、集、の、情、形、に、法、に、  
、者、即、ち、之、幅、長、情、に、要、任、

中十一條

、金、金、に、武、振、五、年、内、に、要、  
、者、即、ち、之、幅、長、情、に、要、任、

新舞政

府、に、於、て、鑄、造、を、新、に、  
、也、を、に、に、及、に、相、仲、を、  
、種、金、に、毎、月、向、に、計、算、に、其、  
、四、分、一、に、之、を、通、直、に、  
、種、に、に、に、に、に、に、  
、中、十、二、条、  
、

中十三条

、新、式、貨、幣、制、定、に、  
、限、二、年、内、に、新、に、  
、

、新、舞、政、府、に、協、議、  
、

中十四条

、之、を、振、り、用、に、  
、

中十五条

交換を以て新貨幣を發行  
後々々其融通上之利ヲ謀  
り兌換紙幣ヲ發行せんものと

中六条

兌換紙幣發行ノ時期は  
急に金匱上之輸出を情急とし  
一任せんものと

中六条

同六条

兌換紙幣發行ノ時期は  
急に金匱上之輸出を情急とし  
一任せんものと  
兌換紙幣發行ノ時期は  
急に金匱上之輸出を情急とし  
一任せんものと  
兌換紙幣發行ノ時期は  
急に金匱上之輸出を情急とし  
一任せんものと

兌換紙幣發行ノ時期は  
急に金匱上之輸出を情急とし  
一任せんものと  
兌換紙幣發行ノ時期は  
急に金匱上之輸出を情急とし  
一任せんものと  
兌換紙幣發行ノ時期は  
急に金匱上之輸出を情急とし  
一任せんものと

# 仮決定書

以後朝鮮政府は旧貨幣  
制度を矯正し新式貨幣制度  
を定む新貨幣の鑄造に交換  
するに位置し以て之を發行せしめ  
日本方面の輸出入の便に此事  
が力に全權を委任す  
（日本銀行）  
に對する協定の上で之を爲す  
事とす如し

## 第一條

朝鮮政府は貨幣の印制を廢止  
更へ新式を制定し施行せしめ  
期限五年とす

## 第二條

朝鮮政府は此事項に關する一切  
の事務は期限五年間大臣の輔長  
に任ずる其の全權を委任す

## 第三條

朝鮮政府は新旧貨幣の整理  
に關する法令規則を專任者  
に請求し之を踏踏する之を  
發令施行せしめんとす

中四條

別冊新式貨幣制及條  
目本位補助貨ノ種類ハ  
五式、如ク指定スル種、  
量目等、大法ニシテ多量モ  
可シ

中五條

典圖~~ノ~~朝鮮國造幣局  
ヲ改稱シ自今他場所ニ於テ  
通貨ヲ鑄造スルヲ禁ム

中六條

旧錢貨ハ全國ノ民情經濟ニ  
リ年限ヲ定メ交換スルニ於テ  
新式錢貨ヲ以テ相當ノ價格  
ヲ定メ引換シラス

中七條

此ノ引換ニ關スル旧錢貨  
新式錢貨ニ時價ヲ以テ之  
ヲ賣却スルモノトス

中八條

旧錢貨鑄造ノ費却ノ損失  
並ニ之ニ關スル交換費ハ新貨  
幣發行政府ノ得益ニ由リ  
由ラズラシム

第九條

新貨幣發行、之交換、  
之、專任、爲、之、故、交換、  
、之、金、日、通、貨、或、物、  
、之、

但、發行、額、係、增加、ス、ル、見、込、

第十條

交換、と、貨、金、日、通、貨、或、  
物、之、日、本、國、之、物、  
政府、外國、債、と、之、之、  
集、又、其、集、方、法、及、増、加、  
額、之、額、之、全、權、權、任、  
大、三、輪、長、之、情、シ、ル、委、任、ス

第十一條

此、交換、と、貨、金、日、通、貨、  
及、應、答、者、日、本、國、之、報、  
等、之、新、貨、幣、地、金、代、  
不、費、引、去、殘、餘、金、  
間、計算、之、其、高、四、分、  
等、之、主、之、通、貨、之、仕、  
、之、

第十二條

之、之、計算、係、之、  
金、高、之、之、  
、之、  
但、新、貨、幣、發行、之、係、  
、之、  
、之、

中々三条

交換目

新貨幣制は完結した後五  
箇年以内の諸租別一ツ改正の場  
合に於ては、實に金貨の正  
統、新政府に協同するものと

中々四条

交換目、用二（半地所）並に、  
類々、各省、朝廷、政府、費用、  
等に設置するものと

中々五条

交換目、新貨幣發行  
後、人民の利便を以て、換紙  
幣を發行するものと

中々六条

此交換目、其の事務、  
傳へて、適任者、便に用  
點、防るものと



第十八条

之概紙幣發行條例規則  
及其發行時部ノ指示  
ハ其ノ輪長全書、是区、任不  
ルモノトス

第十九条

紙幣返却ハ其ノ輪長全書、  
記号、シテ其ノ部ノ指示  
作用ニ準テ行ハル

ハ其ノ輪長全書、  
記号、シテ其ノ部ノ指示

ハ其ノ輪長全書、  
記号、シテ其ノ部ノ指示

ハ其ノ輪長全書、  
記号、シテ其ノ部ノ指示

第二十条

ハ其ノ輪長全書、  
記号、シテ其ノ部ノ指示

廿二史劄記

以上条々、明治三十五年九月  
 既經印行其事、ヨリ同、平、日  
 以内、之、著、之、傳、行、人  
 事、之、其、初、也、書、之  
 通、書、二、通、之、作、之、双、方  
 一、通、之、究、之、有、之、池、之、正  
 之、之、之、各、自、記、之、調、也  
 新、刊、之、書、年  
 外、之、月  
 日、之、月、之、日、之、月

乾隆癸丑年

日中時義

朝鮮駐劄日本公使

五嘉鎮

司公大坂府金沢長

大三輪長壽

名称	大三輪長兵衛文書
標題	貨幣制度草案

分類 番号	
	60-5

登録 番号	
----------	--

貨幣制度草案

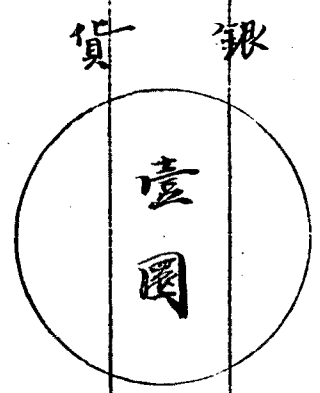
# 朝鮮國貨幣例目

一 貨幣ノ稱呼ハ圓ヲ以テ起票トシ其多寡ヲ  
論セズ都テ圓ノ原稱ニ數字ヲ加ヘテ之ヲ計算  
ス可シ但シ是圓以下ハ分(一分ノ一)ヲ以テ小數ノ計  
算ニ用ユヘシ

一 算則ハ總テ十進一位ノ法ヲ用イ一丈十ヲ合  
シテ十丈トシ十丈十ヲ併セテ百丈ト云ヒ百丈十  
(即チ千分)ヲ以テ一圓トス一圓ヨリ上十百千萬ニ至  
ルモ皆ナ百丈十ヲ合シテ伍ヲ進ム其他五丈  
五十丈五百丈ノ如キハ十數ヲ半割セシモ一

十ノ數ヲ倍スル返ニシテ圓ヨリ軌範ノ外ニ出デス  
 一丈ヨリ已下ハ別ニ鑄造ノ貨幣ナシト雖モ  
 差シ計算ヲ要スルキハ分厘毛絲忽微ヲ以  
 テ微少ノ數ヲ算スヘシ又万ヨリ已上ハ十萬  
 百萬千萬ニ至リ千萬十即チ萬々ヲ以テ一  
 億トシ大數ノ計算ヲナス可シ

同貨幣種別



但徑曲凡一寸二分四釐  
 性合銀九銅一  
 量目七匁一分七釐六毛

銀貨

五百文

但徑曲尺壹寸。四釐 量目三釐三分二釐九毫九

性含銀八銅二

銀貨

貳百文

但徑曲尺七分七釐 量目一釐三分三釐一毫七

性含銀八銅二

銀貨

百文

但徑曲尺五分八釐 量目六釐六毫五毛八五

性含銀八銅二

白銅貨

五十文

但徑曲尺 量目一釐七分

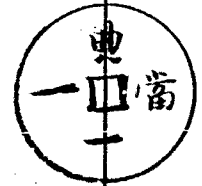
性含銀八銅二

黃銅錢

壹口一

五

黃銅錢



十圓紙幣

壹萬文

五百文紙幣

五百文

五圓紙幣

五千文

貳百文紙幣

貳百文

壹圓紙幣

壹千文

百文紙幣

壹百文



名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	大朝鮮國貨幣條例草案

分 類 番 号	
	60-6

国立国会図書館

登録番号	
------	--

十一

大朝鮮國貨幣條例草案

完

大朝鮮國
391

## 新式貨幣條例

我大朝鮮國ハ古來他邦ト貿易ノ事ナク爲ノニ貨幣

通貨

制度ニ於テ自ラ其精確ヲ欲キ通貨ハ唯ク銅鉄ノ一

種アリテ餘カニ日用ヲ辨スル而已之レカ製法ノ粗

造ナルカ故ニ貨幣ノ最モ主眼タル量目性合ノ實ヲ

失スルノミナラズ同價位ノモノニシテ良否其品質

ヲ異ニセリ是ニ於テ全國一般ノ流通ヲ欲キ或ル地

方ニ流通セラ他方ニ流通セサルモノアリ遂ニ物品

換用ノ能力ヲ失ヒ日用便利ノ途ヲ塞キ殆ント流通

實貨ノ公益ヲ絶ントス殊ニ近時ハ其官價ニ時々高

低ヲ示スカ爲ノ物價非常ニ騰貴シテ國民ハ一般ニ窮厄ニシテ痛心之レヨリ大ナルハナシ其由條ヲ尋繹スルニ全ク一定ノ價值ナク通貨ノ標準ト爲スベキ貨幣本位ノ制確立セサルカ爲メナリ

方今宇内ノ形勢ハ日ニ月ニ變々開明ノ域ニ進ミ殊ニ通商貿易ノ如キ各國亦タ相競フテ將ニ盛ナルノ時ニ當リ宜シク之ニ処スルニ速カニ新式ノ貨幣制度ヲ設ケ内ハ日用便利ノ途ヲ開キ以テ國民ノ窮厄ヲ救ヒ外ハ通商貿易ノ衝ニ當リ以テ各國ト其競争ノ間ニ相對セサル可カラサルハ我大朝鮮國政府ノ

責任ニシテ將タ國家焦眉ノ急務タリ爰ニ於テ我政  
府速カニ之ニ處スルノ策ヲ講シ以テ一國政府ノ責  
任ヲ完カウシメシメ爲メ國費多端ノ際莫大ナル費用  
ヲ厭ハズ更ニ造幣局ヲ興シ交換局ヲ設ケ廣ク宇內  
各國ノ貨幣制度ヲ察知シ最モ精良ナル器械ヲ購入  
シ金銀性合ノ量目ヨリ以テ割合等差及ヒ鑄造ノ方  
法ニ至ル迄詳カニ普通ノ制ヲ以較商量シ宜シク其  
中ヲ取り確實精義ナル新式貨幣ヲ鑄造シ交換局ニ  
於テ之レヲ發行シ以テ全國一般ノ流通ヲ資ケシメ  
ントス旧錢ハ漸次之ヲ交換改鑄シ以テ貨幣ハ天下

萬民ノ通寶タルヘキ實ヲ舉ケ上ハ一國政府ノ職分  
ヲ盡シ下ハ國民保護ノ責任ヲ完フセントス國民宜  
シク其意ヲ體シ各々其務ヲ勉勵シテ天賦ノ職ヲ尽  
スヘシ茲ニ其大意ヲ示シ候也テ新式貨幣ノ真形ヲ  
摹シ其量目品位表ヲ添附シテ普ク大朝鮮國一般  
ヘ頒布令達スルモノ也

## 新式錢貨例目

一 新錢貨ノ稱呼ハ兩ヲ以テ起票トシ其多寡ヲ論セ  
ス惣テ兩ノ原稱ニ數字ヲ加ヘ之ヲ計算スヘシ但  
兩以下ハ錢（一分兩一ノ）分（一分錢一ノ）トヲ以テ少  
數ノ計算ニ用ユヘシ

一 算則ハ惣テ十進一位ノ法ヲ用ユ一分十ヲ合シテ  
一錢トシ一錢十ヲ以テ一兩トス一兩ヨリ上十百  
千萬ニ至ルモ皆十數ヲ合シテ一位ヲ進ム其他

算法ハ固ヨリ矢輒範ノ外ニ出ラス

一分以下ハ別ニ通用ノ錢貨ナシト雖モ若シ計算ヲ要スルトキハ厘毛絲微鐵ヲ以テ微少ノ數ヲ計算スヘシ又萬ヨリ以上ハ十萬百萬千萬ニ至リ千萬十即ケ萬々ヲ以テ一億トシ大數ノ計算ヲ爲スヘシ

一新式錢貨ト旧錢貨（當五錢）トノ價格割合ハ旧

錢貨一枚ヲ以テ一分ノ位トス一兩五兩及ヒ他ノ補助貨ニ於ケルモ同様ノ割合タルヘシ



# 新錢貨定價

十分為一錢  
十錢為一兩

## 本品銀貨

表



裏



徑曲尺一寸二分四厘  
重七錢一分七厘六毛  
調令 銀九 銅一

## 通用銀貨

表



裏



徑曲尺七分四厘  
重一錢四分三厘五毛二  
調合 銀八 銅二

## 補助白銅貨

表



裏



徑曲尺六分八厘  
重一錢二分四厘二毛

## 補助銅貨

表



裏



徑曲尺九分二厘  
重一錢八分九厘七毛五

## 新式錢貨通用制限

一 通用銀貨一兩ヲ以テ原貨ト定メ總テ内國一般公私ノ支払ヒニ用ヰ其高ニ制限アルヲナシ

原貨トハ流通錢貨ノ主本ニシテ通用ノ際制限ヲ立テス他ノ錢貨ノ標準トス

一 補助ノ白銅貨(ニ錢五分)ハ原貨ノ補助貨ニシテ一口ノ払方ニ一千兩ノ高ヲ限ルヘシ

一 補助ノ銅貨(五分)モ前同様ノ補助ニシテ一口ノ払方ニ二百兩ノ高ヲ限ルヘシ

一補助ノ旧銭（當五銭）モ一口ノ松方ニ一百兩ノ高

ヲ限ルヘシ

補助トハ本位銭貨ノ補助ニシテ制度ニヨリテ  
融通ヲ資クルモノナリ故ニ通用ノ際之レヲ制  
限ヲ設ケテ交通ノ規定トス

一五兩銀貨ハ海關稅其他外國人ヨリ納メタル諸稅  
及ニ朝鮮人外國人ト通商ノ取引ニ用ヒ又之ヲ内  
地ノ諸稅納方等其他公私一般ノ松方ニモ用ヒ其  
高ニ制限アルヲナシ

一通用ノ制限ハ元來貨幣ニ原本補助トノ別アル所

以ノ理ニ基キ制定セシモノナレハ人々取引ノ節  
此ノ制限ニ照準シ若シ之ニ超ユレハ誰ニテモ請  
取渡ヲ拒ムノ道理アルヘシト雖モ私ノ取引ニ付  
便宜ノ爲ノ請取渡シナスハ全ク相互ノ都合ニ從  
フモノナレバ其制限ニ拘ハラス勝手次第ニ交通  
スヘシ

## 罰則

一大朝鮮國通貨ハ京城造幣局(旧典圖局)ノ外他ノ場所  
ニ於テ鑄造スルヲ禁ス若シ偽造スル者ハ律ヲ按

ル  
シ  
ニ徴治ス犯罪者ヲ告訴スル者賞金ヲ優給スヘシ  
一新銀貨ヲ銷燬スル者ハ偽造ノ例ニ照シ治罪ス犯  
罪者ヲ告訴スル者ハ一律ニ賞金ヲ給與スヘシ

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	新式貨幣條例

分 類 番 号	
	60-7

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

新式貨幣制度

第何

大正文庫

397

我大朝鮮國ハ古來他邦ト通商貿易ノ事ナリ爲シ貨幣

ノ制度ニ於テ自ラ其精確ヲ缺キ唯タ通貨ハ銅錢ノ一種アリテ

僅カニ日用ヲ弁スル而已之レハ制法ノ粗造ナルカ故ニ貨幣ノ最モ主

眼タル量目性合ノ実ヲ失スルノミナラズ同價位ノ者ニシテ良否其

品質ヲ異ニセリ是ニ於テ全國一般ノ流通ヲ缺キ或ハ地方ニ流通シ

シテ他地方ニ流通セリモアリ遂ニ諸品搜用ノ能力ヲ失ヒ日用便利ノ

途ヲ塞キ殆レト流通宝貨ノ益ヲ絶ニトス殊ニ近時ハ其官便ニ時

時高低ヲ示スカ為メ物貨汎常ニ騰貴シテ國民ハ一般ニ窮厄ニ

シテ痛心是レヨリ大ナルナシ其由録ヲヨ尋譯スルニ全ク一定ノ價位

ナリ通貨ノ標準ト為スル貨幣本位ノ制確立セリル者ナリ



方人々宇内ノ形勢ハ日月ノ變々南明ノ域進ミ殊ニ通商貿易ノ

如キ各四亦相競テヲ將ニ盛ナラントスルノ時ニ當リ宜シク之ニ処スルニ速カ

ニ新式ノ貨幣制度ヲ設ケ内ニ日用便利ノ途ヲ開キ以テ國民ノ窮

厄ヲ救ヒ外ニ通商貿易ノ衝ニ當リ以テ各國ト其競争ノ間ニ相對

セリハ可カラズハ我大朝鮮國政府ノ責任ニシテ亦國家存眉ノ急務

ナリ茲に於て我政府は速かに之を処スル策ヲ講シ以テ一國政府ノ責  
任ヲ全カシメシカ爲メ四葉多端ノ條莫大ナル費用ヲ賦リて更に造

幣所ヲ興シ交換局ヲ設ケ庶テ宇内各國ノ貨幣制度ヲ參照シ

最も精良ナル器械ヲ購入シ金銀性合ノ量目ヨリ以テ割合等シ差

及ヒ鑄造ノ方法に至ル迄詳ラカニ普通ノ制ヲ比較度量し宜シク女

中ヲ取り確實精美なる新式貨幣ヲ鑄造し兌換商券發行也

兌換商券於此發行

以  
今手圓一般ノ流通ヲ資ケシメトス旧錢ハ漸次之ヲ交換改鑄シ以テ兌換

幣ハ天下万民ノ通宝タルメキ実ヲ望メ上ニ國政府ノ職分ヲ尽シ

下ニ國民保護ノ責任ヲ完フセリトス國民宜シク其意ヲ体シ各々更

務ヲ勉勵シテ天賦ノ職ヲ尽スベシ茲ニ其大意ヲ示シ併ニ新式

貨幣ノ直ニ形ヲ摹シ其重月品位表ヲ添付シテ普ナク大朝鮮國  
一般へ頒布令達スルモノ也

## 新式錢貨例目

一新錢貨、福呼ハ兩ヲ以テ起票トシ其多寡ヲ論セス總テ兩

ノ原額ニ數字ヲ加シ之ヲ計算スヘシ但兩以下ハ錢(一兩ノ十分一)分(一錢ノ十分一)

(一錢ノ十分一)トヲ以テ少數ノ計算ニ用ユヘシ

一算則ハ總テ十進一位ノ法ヲ用ヒ一分十ヲ合シテ一錢トシ一錢十ヲ以テ一兩トス一兩ヨリ上十百千萬ニ至ルモ皆十數ヲ合シテ一位ヲ進ム其他算法ハ固ヨリ此軌範ノ外ニ出ラス

一分以下ハ別ニ通用ノ錢貨ナシト雖モ若シ計算ヲ要スルハ厘毛絲微纖ヲ以テ微少ノ數ヲ計算スヘシ又萬ヨリ以上ハ十萬百萬千萬ニ至リ千萬十即ケ萬々ヲ以テ一億トシ大數ノ計算ヲ爲スヘシ

一新式錢貨ト旧錢貨(當五錢ト葉錢ト)トノ價格割合ハ旧錢貨一

枚ヲ以テ一分ノ位トス一兩五兩及ヒ他ノ補助貨ニ於ケルモ同様

割合タルハニ

新銀貨定價  
十兩為一兩

平銀貨

五兩

徑四尺一寸二分四厘

重

七兩一分七厘五毫

調合 銀九銅一

通用銀貨

一兩

徑四尺七分四厘

重

一兩一分七厘五毫

調合

銀八銅二

補助銀貨

五兩

徑四尺六分八厘

重

一兩二分七厘二毫

補助銀貨

五兩

徑四尺九分五厘

重

一兩八分九厘七毫五

# 新式鐵貨通用制限

一 通用銀錢一兩ヲ以テ原貨ト定メ總テ内國一般公私ノ支拂ニ用ヒ其高ニ制限スルヲナシ

原貨トハ流通鐵貨ノ主本ニシテ通用實際制限ヲ受ケズ他ノ鐵貨ノ標準トス

一 補助ノ白銅貨(ニ毫五分)ハ原貨ノ補助貨ニシテ一口ノ松方ニ五兩ニ高ヲ限ルヘシ

一 補助ノ銅貨(半錢)モ亦同様ノ補助ニシテ一口ノ松方ニ五兩ニ高ヲ限ルヘシ

一 補助ノ白鐵(當五錢)モ一口ノ松方ニ五兩ニ高ヲ限ルヘシ

補助トハ本位鐵貨ノ補助ニシテ制度ニヨリテ融通ヲ資スルモノナリ故ニ通用實際之レカ制限ヲ設ケテ交通ノ規定トス

一 越前銀貨ハ海關稅其他外國人ヨリ納付タル諸稅及ヒ朝鮮人

外國人ト通商ノ取引ニ用ヒ又之レヲ内地ノ諸稅納方等其其他公私一般ノ拂方ニモ用ヒ其高ニ制限アルナシ

一 通用ノ制限ハ元來貨幣ニ原本補助ト別アル所以ノ理ニ基キ制定セシモノナレバ人々取引ノ節其ノ制限ニ照テ準シ若シ之ニ超ハ誰レニテモ請取渡シヲ拒ムノ道理アルヘシト雖モ私ノ取引ニ付キ便宜ノ爲ノ請取渡シナスハ金ク相互ノ都合ニ從フ筈ナレバ其制限ニ抱ハラス勝手次第ニ交通スヘシ

### 罰則

一 大朝鮮國通貨ハ京城造幣局(旧典)、外他ノ場所ニ於テ鑄造スルヲ禁ス若シ偽造スル者ハ律ヲ按シ徵治ス犯罪者ヲ告訴スル者賞金五ヲ優給スベシ

一 新銀貨ヲ銷燬スル者ハ偽造ノ例ニ照シ治罪ス犯罪者ヲ告訴



スル者ハ一律ニ賞金ヲ給與スベシ

右之條々規定遵守スベキモノ也

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	新式貨幣制度規定 / 大 薙

分 類 番 号	
	60-82 ✓

国立国会図書館

登録番号	
------	--

# 新式貨幣制度規定ノ大意

我大朝鮮國ハ往古ヨリ他邦貿易ノ事ナク自ラ貨幣

ノ制<sup>自</sup>完<sup>金</sup>備<sup>テ</sup>古來僅ニ銅貨錢一種ヲ以テ其用ヲ弁セ

リ又其制法モ精密ナラ<sup>不</sup>混<sup>金</sup>雜<sup>カ</sup>敗<sup>ル</sup>其貨<sup>カ</sup>由<sup>ル</sup>也

亦通寶貨幣ノ眼目タシ量目性合ノ実ヲ失シ其正否

ヲ弁知スヘカ<sup>ル</sup>モノ夥<sup>シ</sup>ク遂<sup>ニ</sup>物品換用ノ能<sup>力</sup>ヲ失

ヒ流通寶貨ノ公益殆<sup>ト</sup>絶ヘシトス痛歎ノ至リナリ

殊<sup>ニ</sup>近來其官價<sup>（西洋ミナ）</sup>時々高低<sup>ヨリ</sup>ト有<sup>ル</sup>物化貝

非<sup>レ</sup>幣<sup>ニ</sup>騰貴シ國民一般ニ<sup>害</sup>厄<sup>ニ</sup>シテ國害<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>ヨリ

甚<sup>シ</sup>キナレ<sup>ル</sup>今其起因ヲ尋繹<sup>セ</sup>ト<sup>キ</sup>官價一

定ノ制通貨ノ標準スヘキモノナク本位補助法貨ノ制  
 定則々貨幣制度ノ確立セシメ依<sup>リ</sup>テ<sup>ス</sup>方今宇内  
 ノ形勢ハ驟々平トシテ開明ノ域ニ進ミ通商貿易  
 ノ道<sup>路</sup>以テ盛ナルノ時ニ當<sup>リ</sup>改良新式ノ制度ヲ設ケ  
 流通ノ道ヲ開キ富國ノ基礎ヲ立ツ。是レ政府ヲ  
 ルモノ、責任ニシテ蓋シ國家焦眉ノ急務<sup>タレバナリ</sup>  
 我<sup>レ</sup>ハ國王殿下<sup>ニ</sup>深<sup>ク</sup>國民ノ疾苦ヲ救<sup>フ</sup>  
 済セ<sup>ル</sup>國員國多端ノ難<sup>ヲ</sup>莫大ノ怪<sup>ヲ</sup>  
 造幣局ヲ設ケ交換局ヲ興シ精良ノ器械ヲ備

元<sup>ノ</sup>奉<sup>ル</sup>

工部局字内各國貨幣ノ直理ヲ案知シ金銀  
ノ性合量目ヨリ割合等差鑄造ノ方法ニ至ル迄  
詳ニ普通ノ制ヲ比較商量シ以テ確實ニ精密ナ  
ル新式通宝貨幣ヲ鑄造シ在来ノ錢貨ハ至当  
ノ官價ニ改定シ一般流通ヲ資ル其鑄造ノ額ヲ  
増ス從ヒ漸々新<sup>代</sup>錢ヲ交換<sup>スル</sup>以來ノ錢貨ハ  
悉ク改鑄シ<sup>品類</sup>一定ニ歸セシメ貨幣<sup>天下</sup>  
ヲ統一通宝タルニ主キ政府ノ職分ヲ盡シ災  
幣流通ノ直理ヲ失<sup>ズ</sup>偏ニ富民保護ノ責任ヲ  
負フスルアリ人民タルモノ亦能ク整理ヲ會得シ各

其野々安んじ天賦ノ職ヲ盡スルヘシ爰ニ其大意ヲ  
掲示シ俟ビテ新式貨幣ノ直ニ致ラザルヲ冀シ其量同  
品位表及ニ条例規則ヲ添附シ普ク四内一般ニ  
頒布諭告スルモ也

月 日 大朝鮮政府

分類 番号	
	61, 1~6

登録 番号	
----------	--

意見書

新貨幣發行額數總預算  
新貨幣發行額數期別預算  
發行貨幣分排方按  
新貨幣發行損益總預算  
新貨幣發行每期損益預算



# 新貨幣發行額數總豫算

貨幣種別 發行額

發行箇數

五兩銀貨 壹千五百萬兩 參百萬箇

日本圓貨換算 參百萬圓

一兩銀貨 壹千五百萬兩 壹千五百萬箇

日本圓貨換算 參百萬圓

小計 參千萬兩 壹千八百萬箇  
六百萬圓

五分<sup>二毫</sup>白銅貨 七百萬兩 貳千八百萬箇

日本圓貨換算 壹百四十萬圓

五分銅貨 貳百九拾七萬兩 五千九百四拾萬箇

是通貨換算 五拾九萬四千圓

一分銅貨 參萬兩 參百萬箇

是通貨換算 六千圓

小計 壹千萬兩 九千四拾萬箇  
貳百萬圓

都令計 四千萬兩 壹億。八百四拾萬箇  
八百萬圓

新貨幣發行額數總豫算

大正三輪文書

377

發行貨幣分排方按

發行貨幣分排方按

總發行額

五兩銀貨 壹千五百萬兩

日本通貨換算

參百萬圓

壹兩銀貨 壹千五百萬兩

同

參百萬圓

補助貨 壹千萬兩

同

貳百萬圓

計 四千萬兩

同

八百萬圓

內

一照準于交換署條例第一條第二條及兌換條例所規定發行額

五兩銀貨 壹千四百拾萬兩

同

貳百八拾貳萬圓

壹兩銀貨 壹千四百拾萬兩

同

貳百八拾貳萬圓

補助債貳百參拾萬兩

同 四拾六萬圓

小計參千。五拾萬兩

同 六百拾萬圓

一舊銅貨交換準備額

五兩銀貨 四拾萬兩

同 八萬圓

五兩銀貨 四拾萬兩

同 八萬圓

補助債 七百貳拾萬兩

同 壹百四拾四萬圓

小計八百萬兩

同 壹百六拾萬圓

一諸經費準備額

五兩銀貨 五拾萬兩

同 拾萬圓

五兩銀貨 五拾萬兩

同 拾萬圓

補助貨 五拾萬兩 同 拾萬圓

小計 壹百五拾萬兩 同 叁拾萬圓

都合計 四千萬兩 同 八百萬圓

新貨幣發行額數期別豫算

大三編文書

378



第壹期新貨幣發行額數豫昇

種別

發行額

發行箇數

五兩銀貨

壹百五拾萬兩

叁拾萬箇

足貨換昇

叁拾萬圓

一兩銀貨

壹百五拾萬兩

壹百五拾萬箇

足貨換昇

叁拾萬圓

叁百萬兩

壹百八拾萬箇

小計

六拾萬圓

五分<sup>二</sup>白銅貨

四拾四萬八千兩

壹百七拾九萬貳千箇

足貨換昇

八萬九千六百圓

五分銅貨 拾九萬。八拾兩 參百八拾萬千六百箇

足貨換算 三萬八千。拾六圓

一分黃銅貨 壹千九百貳拾兩 拾九萬貳千箇

足貨換算 三百八拾四圓

小計 六拾四萬兩 五百七拾八萬五千六百箇  
拾貳萬八千圓

都合計 參百六拾四萬兩 七百五拾八萬五千六百箇  
七拾貳萬八千圓

某貳期新貨幣發行額數豫算

種別

發行額

發行箇數

五兩銀貨 壹百五十萬兩

三十萬箇

日本貨換算

三十萬圓

一兩銀貨 壹百五十萬兩

壹百五十萬箇

日本貨換算

三十萬圓

小計

三百萬兩

壹百八十萬箇

六十萬圓

五分銅貨

五十萬四千兩

貳百。壹萬六千箇

日本貨換算

拾萬。八百圓

五分銅貨 貳拾壹萬三千八百四拾兩 四百貳拾七萬六千八百箇

日本貨換算 四萬貳千七百六拾八圓

一分銅貨 貳千六百六拾兩 貳拾壹萬六千箇

日本貨換算 四百三拾貳圓

小計 七拾貳萬兩 六百五拾萬八千八百箇

拾四萬四千圓

三百七拾貳萬兩 八百參拾萬八千八百箇

都合計

七拾四萬四千圓

第三期新貨幣發行額數豫算

種別

發行額

發行箇數

五兩銀貨 壹百五十萬兩

三十萬箇

日本貨換算

三十萬圓

一兩銀貨 壹百五十萬兩

壹百五十萬箇

日本貨換算

三十萬圓

參百萬兩

壹百八拾萬箇

小計

六拾萬圓

五分白銅貨

五拾六萬兩

貳百貳拾四萬箇

日本貨換算

拾壹萬貳千圓

五分銅貨 貳拾參萬七千六百兩 四百七拾五萬貳千箇

日永貨換算 四萬七千五百貳拾圓

一分黃銅貨 貳千四百兩 貳拾四萬箇

日永貨換算 四百八拾圓

小計 八拾萬兩 七百貳拾參萬貳千箇

拾六萬圓

參百八拾萬兩 九百參拾萬貳千箇

都合計 七拾六萬圓

第四期新貨幣發行額數彙算

種類

發行額

發行箇數

五兩銀貨

壹百五十萬兩

三十萬箇

足貨換算

三十萬圓

一兩銀貨

壹百五十萬兩

壹百五十萬箇

足貨換算

三十萬圓

參百萬兩

壹百八十萬箇

小計

六拾萬圓

<sup>二錢</sup>五分白銅貨

六拾壹萬六千兩

貳百四拾六萬四千箇

足貨換算

拾貳萬三千貳百圓

五分銅貨 貳拾六萬千三百六拾兩 五百貳拾貳萬七千貳百箇

日本貨換算 五萬貳千貳百七拾貳圓

一分黃銅貨 貳千六百四拾兩 貳拾六萬四千箇

日本貨換算 五百貳拾八圓

八拾八萬兩 七百九拾五萬五千貳百箇

小計 拾七萬六千圓

三百八拾八萬兩 九百七拾五萬五千貳百箇

都合計 七拾七萬六千圓



第五期新貨幣發行額數豫算

種別

發行額

發行圓數

五兩銀貨

壹百五十萬兩

三十萬圓

日金貨換算

三十萬圓

一兩銀貨

壹百五十萬兩

壹百五十萬圓

日金貨換算

三十萬圓

參百萬兩

壹百八拾萬圓

小計

六拾萬圓

參分白銅貨

六拾七萬貳千兩

貳百六拾八萬八千圓

日本貨換算

拾三萬四千四百圓

五分銅貨 貳拾八萬五千百貳拾兩 五百七拾萬貳千四百箇

日承貨換算 五萬七千。貳拾四圓

一分黃銅貨 貳千八百八拾兩 貳拾八萬八千箇

日承貨換算 五百七拾六圓

小計 九拾六萬兩 八百六拾七萬八千四百箇  
拾九萬貳千圓

都合計 參百九拾六萬兩 壹千。四拾七萬八千四百箇  
七拾九萬貳千圓

第六期新貨幣發行額數豫算

種別	發行額	發行箇數
五兩銀貨	壹百五十萬兩	三拾萬箇
日本貨換算	三拾萬圓	
一兩銀貨	壹百五十萬兩	壹百五十萬箇
日本貨換算	三拾萬圓	
小計	參百萬兩	壹百八拾萬箇
	六拾萬圓	
五分銅貨	七拾貳萬八千兩	貳百九拾壹萬貳千箇
日本貨換算	拾四萬五千六百圓	

五分銅貨 參拾萬八千八百八拾兩 六百拾七萬七千六百兩

果貨換算 六萬千七百七拾六圓

一分黃銅貨 參千一百貳拾兩 參拾壹萬貳千圓

果貨換算 六百貳拾四圓

小計 壹百〇四萬兩 九百四拾萬千六百圓

貳拾萬八千圓

都合計 四百〇四萬兩 壹千一百貳拾萬千六百圓

八拾萬八千圓

第七期新貨幣發行額數豫算

種別

發行額

發行箇數

五兩銀貨

壹百五十萬兩

三十萬箇

銀貨換算

三十萬圓

一兩銀貨

壹百五十萬兩

壹百五十萬箇

日本貨換算

三十萬圓

參百萬兩

壹百八十萬箇

小計

六十萬圓

銅貨

七拾八萬四千兩

三百拾參萬六千箇

日本貨換算

拾五萬六千八百圓

五分銅貨 三拾三萬貳千六百四拾兩 六百六拾五萬貳千八百箇

銀貨換算 六萬六千五百貳拾八圓

一分黃銅貨 三千三百六拾兩 三拾三萬六千箇

銀貨換算 六百七拾貳圓

### 小計

壹百拾貳萬兩

壹千。拾貳萬四千八百箇

貳拾貳萬四千圓

### 都合計

四百拾貳萬兩

壹千一百九拾貳萬四千八百箇

八拾貳萬四千圓

第八期新貨幣發行額數豫算

種別

發行額

發行箇數

五兩銀貨

壹百五十萬兩

三十萬箇

日貨換算

三十萬圓

一兩銀貨

壹百五十萬兩

壹百五十萬箇

日貨換算

三十萬圓

參百萬兩

壹百八拾萬箇

小計

六拾萬圓

日貨換算

八拾四萬兩

三百三拾六萬箇

日貨換算

拾六萬八千圓

五分銅貨 三拾五萬六千四百兩 七百拾貳萬八千箇

日本貨換算 七萬千貳百八拾圓

一分黃銅貨 三千六百兩 三拾六萬箇

日本貨換算 七百貳拾圓

小計 壹百貳拾萬兩 壹千八拾四萬八千箇  
貳拾四萬圓

都合計 四百貳拾萬兩 壹千貳百六拾四萬八千箇  
八拾四萬圓



第九期新貨幣發行額數豫算

種別

發行額

發行箇數

五兩銀貨

壹百五拾萬兩

三拾萬箇

銀貨換算

三拾萬圓

一兩銀貨

壹百五拾萬兩

壹百五拾萬箇

銀貨換算

三拾萬圓

小計

三百萬兩

壹百八拾萬箇

六拾萬圓

五分白銅貨

八拾九萬六千兩

三百五拾八萬四千箇

銀貨換算

拾七萬九千貳百圓

五分銅貨 三拾八萬。百六拾兩 七百六拾萬三千貳百兩

日承貨換算 七萬六千。三拾貳圓

一分黃銅貨 三千八百四拾兩 三拾八萬四千兩

果貨換算 七百六拾八圓

### 小計

壹百貳拾八萬兩 壹千百五拾七萬千貳百兩  
貳拾五萬六千圓

### 都合計

四百貳拾八萬兩 壹千三百三拾七萬千貳百兩  
八拾五萬六千圓

第十期新貨幣發行額數豫算

種別

發行額

發行箇數

五兩銀貨

壹百五十萬兩

三十萬箇

銀貨換算

三十萬圓

一兩銀貨

壹百五十萬兩

壹百五十萬箇

銀貨換算

三十萬圓

三百萬兩

壹百八十萬箇

小計

六拾萬圓

二兩白銅貨

九拾五萬貳千兩

三百八拾萬八千箇

銀貨換算

拾九萬。四百圓

五分銅貨 四拾萬三千九百貳拾兩 八百。七萬八千四百箇

日成貨換算 八萬。七百八拾四圓

一分黃銅貨 四千。八拾兩 四拾萬八千箇

日成貨換算 八百拾六圓

小計 壹百三拾六萬兩 壹千貳百貳拾九萬四千四百箇

貳拾七萬貳千圓

四百三拾六萬兩 壹千四百。九萬四千四百箇

都令計 八拾七萬貳千圓

新貨幣發行損益總豫算

大正三輪文書

379

# 新貨幣發行損益總豫算

貨幣種別 發行額

地金代價

損利

五兩銀貨 壹千五百萬兩 千五百拾五萬兩 損拾五萬兩

三百萬圓 三百。三萬圓 損三萬圓

一兩銀貨 壹千五百萬兩 千三百拾七萬五千兩 利壹百拾貳萬五千兩

三百萬圓 貳百七拾七萬五千圓 利貳拾貳萬五千圓

小計 叁千萬兩 貳千九百貳萬零兩 利九拾七萬五千兩

六百萬圓 壹百拾萬五千圓 利拾九萬五千圓

<sup>二錢五分</sup>銅貨 七百萬兩 七拾七萬兩 利六百貳拾叁萬兩

壹百四拾萬圓 拾五萬四千圓 利壹百貳拾四萬六千圓

五分銅貨 貳百九拾七萬兩 百拾五萬。八百七拾萬兩 利壹百八拾壹萬九千貳拾五兩

五拾九萬四千圓 貳拾參萬。百七拾五圓 利三拾六萬三千八百貳拾五圓

一分黃銅貨 參萬兩 貳萬五千百貳拾萬兩 利四千八百七拾五兩

六千圓 五千。貳拾五圓 利九百七拾五圓

老千萬兩 覓拾壹萬六千兩 利八百。五萬四千兩

小計 貳百萬圓 三拾八萬九千貳百圓 利壹百六拾壹萬。八百圓

都合計 四千萬兩 參十九拾七萬壹千兩 利九百。貳萬九千兩

八百萬圓 六百拾九萬四千貳百圓 利壹百八拾。萬五千八百圓

內減

諸經費準備額 壹百五拾萬兩 參拾萬圓

正叔利七百五拾貳萬九千兩  
陸百五拾萬五千八百圓



新貨幣發行每期損益豫算

大正三編文書

380

第壹期新貨幣發行損益豫算

種別 發行額 地金代價 損利

高銀貨 壹百五十萬兩 壹百五十萬五千兩 損 壹萬五千兩

參拾萬圓 三拾萬三千圓 損 三千圓

一兩銀貨 壹百五十萬兩 壹百五十萬五千兩 利 拾壹萬貳千五百兩

參拾萬圓 貳拾七萬七千五百圓 利 貳萬貳千五百圓

三百萬兩 貳百九十萬貳千五百兩 利 九萬七千五百兩

小計

六拾萬圓 五拾八萬。五百圓 利 壹萬九千五百圓

<sup>二兩</sup>銅貨 四拾四萬八千兩 四萬九千貳百八拾兩 利 參拾九萬八千七百貳拾兩

八萬九千六百圓 九千八百五拾六圓 利 七萬九千七百四拾四圓

分銅貨 拾九萬。八拾兩 七萬三千六百五拾六兩 利 拾壹萬六千四百貳拾四兩  
參萬八千。拾六圓 壹萬四千七百五拾壹兩 利 貳萬三千貳百八拾四圓八拾錢  
分黃銅貨 千九百貳拾兩 千六百。八兩 利 三百拾貳兩

參百八拾四圓 參百貳拾壹兩六拾錢 利 六拾貳圓四拾錢

小計 六拾四萬兩 拾貳萬零五百四拾兩 利 五拾壹萬五千四百五拾六兩

拾貳萬八千圓 貳萬四千九百八拾錢 利 拾萬三千九拾壹兩貳拾錢

都合計 參百六拾四萬兩 參百。貳萬七千零四兩 利 六拾壹萬貳千九百五拾六兩

七拾貳萬八千圓 六拾萬五千四百。八拾錢 利 拾貳萬貳千五百九拾壹兩貳拾錢

內減

諸經費準備額 拾五萬兩 參萬圓

扣減正收利四拾六萬貳千九百五拾六兩

日本通貨換算九萬貳千五百九拾壹圓貳拾錢

第貳期新貨幣發行損益豫昇

種別	發行額	地金代價	損利
----	-----	------	----

金銀貨	壹百五十萬兩	壹百五十萬五千兩	損壹萬五千兩
-----	--------	----------	--------

參拾萬圓	三拾萬三千圓	損三千圓
------	--------	------

一兩銀貨	壹百五十萬兩	壹百三十萬七千五百兩	利拾壹萬貳千五百兩
------	--------	------------	-----------

參拾萬圓	貳拾七萬七千五百圓	利貳萬貳千五百圓
------	-----------	----------

參百萬兩	貳百九拾萬貳千五百兩	利九萬七千五百兩
------	------------	----------

小計

六拾萬圓	五拾八萬。五百圓	利壹萬九千五百圓
------	----------	----------

<sup>二錢五分</sup> 白銅貨	五拾萬四千兩	五萬五千四百四拾兩	利四拾四萬八千五百六拾兩
---------------------	--------	-----------	--------------

拾萬。八百圓	壹萬壹千。八拾八圓	利八萬九千七百拾貳圓
--------	-----------	------------

五分銅貨貳拾壹萬三千八百兩八萬貳千八百六拾三兩 利拾參萬。九百七拾七兩

四萬貳千七百六拾四兩壹萬六千五百七拾貳兩四拾貳兩 利貳萬六千九百九拾五兩四拾貳兩

二分黃銅貨貳千六百六拾兩 壹千八百。九兩 利三百五拾壹兩

四百三拾貳兩 三百六拾壹兩八拾貳兩 利七拾圓貳拾貳兩

七拾貳萬兩 拾四萬。百拾貳兩 利五拾七萬九千八百八拾八兩

小計 拾四萬四千圓 貳萬八千。貳拾貳兩四拾貳兩 利拾壹萬五千九百七拾七兩六拾貳兩

參百七拾貳萬兩 參百。四萬貳千六百拾兩 利六拾七萬七千參百八拾八兩

都合計 七拾四萬四圓 六拾萬八千五百七拾貳兩四拾貳兩 利拾參萬五千四百七拾七兩六拾貳兩

內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓

加減正收利五拾貳萬七千叁百八拾八兩

日本通貨換算拾萬五千四百七拾七圓六拾錢

第三期新貨幣發行損益豫算

種別	發行額	地金代價	損利
----	-----	------	----

五兩銀貨	壹百五拾萬兩	壹百五拾萬五千兩	損 壹萬五千兩
------	--------	----------	---------

參拾萬圓	參拾萬三千圓	損 三千圓
------	--------	-------

一兩銀貨	壹百五拾萬兩	壹百三拾萬七千五百兩	利 拾壹萬貳千五百兩
------	--------	------------	------------

參拾萬圓	貳拾七萬七千五百圓	利 貳萬貳千五百圓
------	-----------	-----------

參百萬兩	貳百九拾萬貳千五百兩	利 九萬七千五百兩
------	------------	-----------

小計	六拾萬圓	五拾八萬五千圓	利 壹萬九千五百圓
----	------	---------	-----------

五分 <sup>二匁</sup> 白銅貨	五拾六萬兩	六萬壹千六百兩	利 四拾九萬八千四百兩
----------------------	-------	---------	-------------

拾壹萬貳千圓	壹萬貳千三百貳拾圓	利 九萬九千六百八拾圓
--------	-----------	-------------



五方銅貨貳拾三萬七千六百兩九萬貳千。七拾兩 利拾四萬五千五百三拾兩

四萬七千五百貳拾四兩九萬八千四百拾圓 利貳萬九千一百。六圓

二分黃銅貨貳千四百兩 貳千。拾兩 利三百九拾兩

四百八拾圓 四百。貳圓 利七拾八圓

小計 八拾萬兩 拾萬五千六百八拾兩 利六拾四萬四千三百貳拾兩

拾六萬圓 三萬七千一百三拾六圓 利拾貳萬八千八百六拾四圓

都合計 參百八拾萬兩 參百。五萬八千一百八拾兩 利七拾四萬八千八百貳拾兩

七拾六萬圓 六拾七萬一千六百三拾六圓 利拾四萬八千三百六拾四圓

內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓

加減正收利五拾九萬陸千八百貳拾兩

日本通債換算拾壹萬八千叁百六拾四圓

第四期新貨幣發行損益豫算

種別	發行額	地金代價	損利
----	-----	------	----

五兩銀貨	壹百五拾萬兩	壹百五拾壹萬五千兩	損壹萬五千兩
------	--------	-----------	--------

參拾萬圓	三拾萬三千圓	損三千圓
------	--------	------

一兩銀貨	壹百五拾萬兩	壹百三拾萬七千五百兩	利拾壹萬貳千五百兩
------	--------	------------	-----------

參拾萬圓	貳拾七萬七千五百圓	利貳萬貳千五百圓
------	-----------	----------

參百萬兩	貳百九拾萬貳千五百兩	利九萬七千五百兩
------	------------	----------

小計

六拾萬圓	五拾八萬。五百圓	利壹萬九千五百圓
------	----------	----------

五兩銀貨	六拾壹萬六千兩	六萬七千七百六拾兩	利五拾四萬八千貳百四拾兩
------	---------	-----------	--------------

拾貳萬三千貳百圓	壹萬三千五百五拾貳圓	利拾萬九千六百四拾八圓
----------	------------	-------------

五分銅貨貳拾六萬三千三百六拾兩拾萬千貳百七拾七兩 利拾六萬。八拾三兩

萬貳千貳百七拾貳兩貳萬。貳百五拾四兩貳錢利三萬貳千。拾六兩六拾錢

二分黃銅貨貳千六百四拾兩貳千貳百拾壹兩 利四百貳拾九兩

五百貳拾八兩四百四拾貳兩貳拾錢利八拾五兩八拾錢

### 小計

八拾八萬兩 拾七萬千貳百四拾八兩 利七拾萬八千七百五拾貳兩

拾七萬六千圓 參萬四千貳百四拾九兩六拾錢利拾四萬壹千七百五拾四兩四拾錢

### 都合計

參百八拾八萬兩 參百七萬三千七百零八兩 利八拾萬六千貳百五拾貳兩

七拾七萬六千圓 六拾壹萬四千七百零九兩六拾錢利拾六萬千貳百五拾圓四拾錢

### 內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓

加減正枚利六拾五萬六千貳百五拾貳兩

日本通貨換算拾參萬壹千貳百五拾圓四拾錢

第五期新貨幣發行損益豫算

種別	發行額	地金代價	損利
----	-----	------	----

五兩銀貨	壹百五十萬兩	壹百五十萬五千兩	損 壹萬五千兩
------	--------	----------	---------

參拾萬圓	參拾萬三千圓	損 三千圓
------	--------	-------

一兩銀貨	壹百五十萬兩	壹百三十萬七千五百兩	利 拾壹萬貳千五百兩
------	--------	------------	------------

參拾萬圓	貳拾七萬七千五百圓	利 貳萬貳千五百圓
------	-----------	-----------

參百萬兩	貳百九拾萬貳千五百兩	利 九萬七千五百兩
------	------------	-----------

小計

六拾萬圓	五拾八萬。五百圓	利 壹萬九千五百圓
------	----------	-----------

參百萬銅貨	六拾七萬貳千兩	七萬三千九百貳拾兩	利 五拾九萬八千。八拾兩
-------	---------	-----------	--------------

拾參萬四千四百圓	壹萬零七百八拾四圓	利 拾壹萬九千六百拾六圓
----------	-----------	--------------

五分銅貨 貳拾八萬五千貳拾兩拾毫萬。四百八拾四兩利拾七萬四千六百三拾六兩

五萬七千。貳拾四圓貳萬貳千。九拾六兩八拾毫利參萬四千九百貳拾七兩貳拾毫

一分黃銅貨 貳千八百八拾兩貳千六百拾貳兩利四百六拾八兩

五百七拾六圓四百八拾貳兩四拾毫利九拾參圓六拾毫

九拾六萬兩 拾萬六千八百拾六兩利七拾七萬三千八百八拾四兩

### 小計

拾九萬貳千圓參萬七千三百六拾兩貳利拾五萬四千六百三拾六兩八拾毫

參百九拾六萬兩參百八萬九千三百拾六兩利八拾七萬。六百八拾四兩

### 都計

七拾九萬貳千圓六拾毫萬七千六百六拾兩貳利拾七萬四千六百三拾六兩八拾毫

### 內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓

加減正收利七拾貳萬。六百八拾四兩

日本通貨換算拾四萬四千壹百叁拾六圓八拾錢



第六期新貨幣發行損益豫算

種別 發行額

地金代價

損利

五兩銀貨 壹百五十萬兩 壹百五十萬五千兩 損 壹萬五千兩

參拾萬圓 參拾萬三千圓 損 三千圓

一兩銀貨 壹百五十萬兩 壹百三十萬七千五百兩 利 拾壹萬貳千五百兩

參拾萬圓 貳拾七萬七千五百圓 利 貳萬貳千五百圓

參百萬兩 貳百九拾萬貳千五百兩 利 九萬七千五百兩

小計 六拾萬圓 五拾八萬。五百圓 利 壹萬九千五百圓

參白銅貨 七拾貳萬八千兩 八萬。八拾兩 利 六拾四萬七千九百貳拾兩

拾四萬五千六百圓 壹萬六千。拾六圓 利 拾貳萬九千五百八拾四圓

五分銅貨參拾萬八千八百八拾兩拾壹萬九千六百九拾壹兩利拾八萬九千八百八拾九兩

六萬二千七百七拾六圓貳萬三千九百三拾四錢利參萬七千八百參拾兩八錢

二分銅貨參千一百貳拾兩貳千六百拾參兩利五百〇七兩

六百貳拾四圓五百貳拾貳圓六拾錢利壹百〇壹圓四拾錢

壹百〇四萬兩貳拾萬貳千三百拾兩利八拾參萬七千六百拾六兩

小計

貳拾萬八千圓四萬四百七拾六圓八拾錢利拾六萬七千五百貳拾兩

四百〇四萬兩參拾萬零六百拾四兩利九拾參萬五千一百拾六兩

合計

八拾萬八千圓六拾貳萬九百三拾四圓八錢利拾八萬七千貳拾參兩八錢

內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓

減正收利七拾八萬五千壹百拾六兩

日本通貨換算拾五萬七千。貳拾參圓貳拾錢

第七期新貨幣發行損益豫算

種別

發行額

地金代價

損利

五兩銀貨 壹百五拾萬兩 壹百五拾壹萬五千兩 損 壹萬五千兩

參拾萬圓 參拾萬參千圓 損 參千圓

一兩銀貨 壹百五拾萬兩 壹百三拾萬七千壹兩 利 拾壹萬貳千五百兩

參拾萬圓 貳拾七萬七千五百圓 利 貳萬貳千五百圓

參百萬兩 貳百九拾萬貳千五百兩 利 九萬七千五百兩

小計

六拾萬圓 五拾八萬。五百圓 利 壹萬九千五百圓

<sup>三</sup>兩<sup>五</sup>白銅貨 七拾八萬四千兩 八萬六千貳百四拾兩 利 六拾九萬七千七百六拾兩

拾五萬六千八百圓 壹萬七千貳百四拾圓 利 拾參萬九千五百五拾貳圓

五方銅貨三拾三萬貳千六百零拾貳萬千八百九拾兩 利貳拾萬三千七百四拾貳兩

六萬六千五百貳拾八圓 貳萬五千七百七拾九圓 利四萬。七百四拾八圓四拾貳

分黃銅貨三千三百六拾兩 貳千八百拾四兩 利五百四拾六兩

六百七拾貳圓 五百六拾貳圓八拾貳利 壹百。九圓貳拾貳

壹百拾貳萬兩 貳拾壹萬七千五百貳兩 利九拾萬貳千四百八兩

小計 貳拾貳萬四千圓 四萬三千五百九拾四圓四拾貳利 拾八萬。四百。九圓六拾貳

都合計 四百拾貳萬兩 三百拾貳萬。四百零貳兩 利九拾九萬九千五百四拾八兩

八拾貳萬四千圓 六拾貳萬四千。九拾四圓四拾貳利 拾九萬九千九百。九圓六拾貳

內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓

加減正收利八拾四萬九千五百四拾八兩

日本通貨換算拾六萬九千九百。九圓六拾錢

第八期新貨幣發行損益豫算

種別	發行額	地金代價	損利
----	-----	------	----

五兩銀貨	壹百五十萬兩	壹百五十萬兩	損壹萬五千兩
------	--------	--------	--------

參拾萬圓	參拾萬三千圓	損參千圓
------	--------	------

一兩銀貨	壹百五十萬兩	壹百三十萬七千五百兩	利拾壹萬貳千五百兩
------	--------	------------	-----------

參拾萬圓	貳拾七萬七千五百圓	利貳萬貳千五百圓
------	-----------	----------

參百萬兩	貳百九拾萬貳千五百兩	利九萬七千五百兩
------	------------	----------

小計

六拾萬圓	五拾八萬。五百圓	利壹萬九千五百圓
------	----------	----------

五兩銀貨	八拾四萬兩	九萬貳千四百兩	利七拾四萬七千六百兩
------	-------	---------	------------

拾六萬八千圓	壹萬八千四百八拾圓	利拾四萬九千五百貳拾圓
--------	-----------	-------------

五方銅貨三拾萬六千四百兩 拾參萬八千五百五兩 利貳拾陸萬八千貳百九拾五兩

七萬千貳百八拾兩 貳萬七千六百貳拾陸兩 利四萬三千六百五拾九圓

二分黃銅貨參千六百兩 三千。拾五兩 利五百八拾五兩

七百貳拾圓 六百。參圓 利陸百拾七圓

陸百貳拾萬兩 貳拾參萬三千五百貳拾兩 利九拾六萬六千四百八拾兩

小計 貳拾四萬圓 四萬六千七百。四圓 利拾九萬三千貳百九拾六圓

都令計 四百貳拾萬兩 參百拾參萬六千。貳拾兩 利陸百。六萬三千九百八拾兩

八拾四萬圓 六拾貳萬七千貳百。四兩 利貳拾陸萬貳千七百九拾六圓

內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓



加減正收利九拾壹萬叁千九百八拾兩

日本通貨換算拾八萬貳千七百九拾六圓

第九期新貨幣發行損益豫算

種別	發行額	地金代價	損利
----	-----	------	----

五兩銀貨	壹百五拾萬兩	壹百五拾壹萬五千兩	損壹萬五千兩
------	--------	-----------	--------

參拾萬圓	參拾萬三千圓	損參千圓
------	--------	------

一兩銀貨	壹百五拾萬兩	壹百五拾萬七千五百兩	利拾壹萬貳千五百兩
------	--------	------------	-----------

參拾萬圓	貳拾七萬七千五百圓	利貳萬貳千五百圓
------	-----------	----------

參百萬兩	貳百九拾萬貳千五百兩	利九萬七千五百兩
------	------------	----------

小計	六拾萬圓	五拾八萬。五百圓	利壹萬九千五百圓
----	------	----------	----------

五兩銀貨	八拾九萬六千兩	九萬八千五百六拾兩	利七拾九萬七千四百六拾兩
------	---------	-----------	--------------

拾七萬九千貳百圓	壹萬九千七百拾貳圓	利拾五萬九千四百八拾八圓
----------	-----------	--------------

五分銅貨三拾八萬。百六拾兩拾四萬七千三百拾貳兩利貳拾三萬貳千八百零八兩

七萬六千。參拾貳兩貳萬九千四百六拾貳兩四拾貳利四萬六千五百六拾九兩六拾貳

五分銅貨參千八百四拾兩參千貳百拾六兩利六百貳拾四兩

七百六拾八圓六百四拾三兩貳拾貳利壹百貳拾四兩八拾貳

壹百貳拾八萬兩貳拾四萬九千八百拾兩利壹百參萬。九百拾貳兩

### 小計

貳拾五萬六千四四拾貳萬九千八百拾七兩貳拾貳利貳拾萬六千八百拾貳兩四拾貳

### 都合計

四百貳拾八萬兩參百拾五萬千五百拾兩利壹百拾貳萬八千四百拾貳兩

八拾五萬六千四四拾貳萬參萬。三百拾七兩貳拾貳利貳拾貳萬五千六百拾貳兩四拾貳

### 內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓

加減正收利九拾七萬八千四百拾貳兩

日本通貨總算拾九萬五千六百八拾貳圓四拾錢

第拾期新貨幣發行損益豫算

種別	發行額	地金代價	損利
----	-----	------	----

五兩銀貨	壹百五拾萬兩	壹百五拾壹萬五千兩	損壹萬五千兩
------	--------	-----------	--------

參拾萬圓	參拾萬三千圓	損參千圓
------	--------	------

一兩銀貨	壹百五拾萬兩	壹百三十八萬七千五百兩	利拾壹萬貳千五百兩
------	--------	-------------	-----------

參拾萬圓	貳拾七萬七千五百圓	利貳萬貳千五百圓
------	-----------	----------

參百萬兩	貳百九拾萬貳千五百兩	利九萬七千五百兩
------	------------	----------

小計

六拾萬圓	五拾八萬。五百圓	利壹萬九千五百圓
------	----------	----------

參分銅貨	九拾五萬貳千兩	拾萬四千七百貳拾兩	利八拾四萬七千貳百八拾兩
------	---------	-----------	--------------

拾九萬。四百圓	貳萬。九百四拾四圓	利拾六萬九千四拾六圓
---------	-----------	------------

五分銅貨四拾萬三千九百貳拾兩拾五萬六千五百拾九兩利貳拾四萬七千四百壹兩

八萬。七百八拾四圓參萬千三百。前八錢利四萬九千四百八拾圓貳拾錢

五分黃銅貨四千。八拾兩三千四百拾七兩利六百六拾三兩

八百拾六圓六百八拾三四拾錢利壹百參拾貳圓六拾錢

壹百參拾六萬兩貳拾六萬四千六百參拾兩利壹百。九萬五千三百四拾兩

小計

貳拾七萬貳千圓五萬貳千三百三拾兩利貳拾壹萬九千六百八拾錢

都令計

四百參拾六萬兩參百拾六萬七千五百參拾兩利壹百拾九萬貳千八百四拾兩

八拾七萬貳千圓六拾參萬三千四百三拾兩利貳拾參萬八千五百六拾八圓

內減

諸經費準備額拾五萬兩參萬圓

加減正收利毫百。四萬貳千八百四拾四兩

日本通貨總算貳拾萬八千五百六拾八圓八拾錢

# 意見書



## 意見書

貨幣ハ貿易ノ尺度也尺度一定セズニハ何レ由ラカ貨物ノ  
價值ヲ比較シ又タ其差額ヲ計算スルヲ得シヤ而シテ之ヲ  
一定スルモノハ則チ貨幣制度ニシテ此制度ノ制定ハ實ニ國  
家大權ノ一焉長兵漸熟貴國ノ幣政ヲ察スルニ  
未タ以テ其制度ノ確立シタルモノアリト云フヲ得ヌ何ナレバ  
貝呼シテ通貨トスルハ往古ヨリ流通シタル銅錢ト近年  
鑄造シタル當五ト稱スルモノニシテ同種類中品質純  
雜ノ差アリ量目輕重ノ異アリ形狀ニ大小ノ別アリテ爲シ  
一ト稱スルモノ或ハ二ト稱シ五ト名クルモノモ或ハ一ト

ノ値ヲ有スルニ過キサルモノアリ眞正ナル通貨タルノ信用  
ハ日ニ月ニ墮落シテ其極貿易ノ尺度タル本質ヲ  
喪失シ恰モ他ノ貨物ト同一視セラルノ觀ヲ呈スルヲ見  
レバ也夫レ貨幣ニシテ然ル如ク標準本位ナカラレカ一銅  
塊ハ何故ニ之レヲ五文ト呼ビ又タ何故ニ之レヲ五文ト稱スルヤ進  
デ十文百文千文ト唱ルモ皆ナ是レ空位ヲ以テ空位ヲ積  
算スルニ異ナラズ貨物ノ價值遂ニ較ス可ラズ貿易ノ差  
額遂ニ計シ難ス可カラサルニ至ラニ通商不便亦タ之レヨリ大  
ナル無ク富國ノ策強兵ノ術遂ニ講ス可カラサル也  
方今在界ニ國ヲ建テ政府ノ体面ヲ存スルモノ莫ク多

少精粗ノ差アリト雖モ未タ曾テ定メ貨幣制度ナ  
キモノアラズ廣ク政米各國ノ貨幣ヲ案スルニ其起票  
ノ如キハ各國共ニ古來ノ習慣ヲ襲用スルアリテ互同ノ  
算法ニヨルヲ得スト其モ其補助貨ヲ以テ本位ニ進ム  
ノ方法ニ至ラハ各一定ノ標準アリテ未タ其軌範ヲ脱  
シタルモノアルヲ見ズ之ニ加フルニ是等各國ニ在ラハ尚其  
運轉融通ノ道ヲシテ円滑流畅ナラシメンカ爲メ紙幣  
發行ノ制ヲ布キ以テ民間ノ起業ヲ資クル等其國以  
便益ヲ興フルモノ實ニ鮮クナラサル也人或ハ清國ノ自  
テ幣改メテ確立セタムト論スルモノアリ然リト雖モ清國

於テハ古來一定ノ幣制顯然トシテ自ラ備ルモノアリ其方  
法ノ如ク銀量十文自ラ以テ標準トシ之ヲ一兩ト稱シ而  
シテ其義則モ亦十進一位ノ法ニヨリ一兩ヨリ十文百文  
進ニテ千文ニ至リ之ヲ一兩ニ換フ蓋シ銀量ニヨリ本  
位ヲ定ムルモノニシテ積ニテ何十萬兩ニ至ルモ皆ナ一位  
ヲ以テ進ムク尚ホ其大數ヲ換用スルニ標銀幣銀  
兩ノ制アリテ大ニ根拠標準ノ確定シタルモノ見  
ル殊ニ手形流通ノ慣習盛ニ民間ニ行ヒ公私ノ融通  
甚ク便ナリ以テ其制度ノ完備セルヲ知ル（モ各國ノ  
幣制實ニ此ノ如ク獨リ貴國ニ至ラハ未ダ其制度

ノ確立セルモノアルヲ見ズ古來國勢ノ久シキ鎖國ノ時  
代或ハ尚ホ内國ノ用度ヲ達シ得キモ今ヤ各國港ヲ開  
キ遠ク内外ノ商舶ヲ通シ競ツテ貿易ノ盛大ヲ企  
圖スルノ時代ニ方リテ貨幣ノ制度實ニ一日モ忽諸國  
ノ可カラズ若シ之ヲ忽諸國付セシカ貿易ノ度日ニ益ハ  
盛大ナルニ從ヒ其差額計算ノ尺度タル貨幣ノ性質  
モ亦タ日ニ益ミ且完全ナル性質ヲ具備セリテ款ニ  
爰ニ自然淘汰ノ理ニ因リ遂ニ不完全ノ貨幣ハ貨  
幣タルノ本質ヲ喪失シ他ノ貨物ト同一視セリ學ニ  
貿易ノ目的物タルニ過キサルに至ルニモ爰ニ於テカ各國

ノ貨幣爭フヲ内國ニ流入シ主客顛倒國氏爲メ貨  
易差額ノ標準ニ遂ニ自國幾千萬ノ財産ハ外國  
貨幣ニ因テ計量セラル甚シク至ラハ文ノ謂所國家  
大權ノ一タニ幣制ノ權ヲ舉ゲ不知不識ノ間ニ外國政  
府ノ有ニ歸シ自國ノ富ニ常ニ外國ノ幣制ニ依テ輕重  
セラル、至ラニ國氏財産ノ安固何ニ依テ之レヲ保護シ  
國家經濟ノ基礎何ニ由テ之ヲ鞏固ナラシムルヲ得  
ンヤ貴國ノ形勢今將ニ其域ニ沈淪セリトスルノ傾向アリ  
今更ニシテ救ハヌレハ國家ノ安危實ニ云フニ忍ヒサル  
モノアラントス豈ニ戒慎セサル可ケンヤ而レテ之レヲ一

定セトスルノ策先ハ貨幣ノ真理ト各國ノ貨幣トヲ  
察知シ加フルニ地金ノ富貧量目ノ輕重形狀ノ大小混和  
ノ調合鑄造ノ法方等詳細普通ノ制ヲ以較高量  
ニ最モ精密ナル貨幣ヲ鑄造シテ又ノ空位ヲ以テ流  
通セシメタル旧來通貨ノ粗惡ナルモノト漸次之レヲ又  
換ニ以テ貴國真正ノ通貨タル實ヲ示スル基礎ヲ  
ル制度ヲ確立スルニアリ

ハテヤ貴國改良鑄錢ノ舉アリ長岳銑ヲ聘シテ其  
發行事務ヲ總裁セシメト擬ス長岳銑 需カニ惟ニ  
貴國ノ舉タル甚タ善シ矣而シテ其新鑄孔錢

聖位ヲ以テ空位ヲ爲スルニ過キサルニ勝テ歎ス

ノ如キモノ之レヲ曰来ノ惡鉄ニ比シテ頗ル改良進歩ノ  
實ヲ望ムガ更ニ遺憾ナキモノ、如シ獨リ奈何也貨  
幣制度来リ確立セズ從テ本位準據スベキナシ新  
鐵義ヲ盡シ善ヲ極ムト爲モ之ヲ發行スルニ莫リテ遂

ニヤ故ニ貴國ノ財政ヲ整理セト歎セハハスヤ先ノ貨  
幣制度ヲ確立セサル可カラズ幣改一タヒ確立シ而  
後内外貿易ノ隆昌國氏財産ノ安固國家経  
済ノ整頓得テ庶幾スベキ也則テ区々ノ意見ヲ  
州ニ具新式貨幣例目草案ヲ末尾ニ附シ以テ



爰覽ニ供スト云爾

明治二十四年八月二十五日

大三輪長兵衛

新式錢貨例目書ニ之ヲ省キ爰ニ定價表而シテ添附ス

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	新錢貨定價

分 類 番 号	
	61-73

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

# 新錢貨定價

十分為一錢  
十錢為一兩

本品銀貨

表



裏



徑曲尺一寸二分四厘  
重七錢一分七厘六毛  
調合銀九銅一

通用銀貨

表



裏



徑曲尺七分四厘  
重一錢四分三厘五毛二  
調合銀八銅二

補助白銅貨

表



裏



徑曲尺六分八厘  
重一錢二分四厘二毛

補助銅貨

表



裏



徑曲尺九分二厘  
重一錢八分九厘七毛五

# 新錢貨定價

十分為一錢  
十錢為一兩

本品銀貨

表



裏



徑曲尺一寸二分四厘  
重七錢一分七厘六毛  
調合銀九銅一

通用銀貨

表



裏



徑曲尺七分四厘  
重一錢四分三厘五毛二  
調合銀八銅二

補助白銅貨

表



裏



徑曲尺六分八厘  
重一錢二分四厘二毛

補助銅貨

表



裏



徑曲尺九分二厘  
重一錢八分九厘七毛五

補助黃銅貨

表



裏



徑曲尺七分七厘  
重八分九厘四毛

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	交換局定款

分 類 番 号	
	62- /

国立国会図書館

登録番号	
------	--

市平

交換局定額

大輪文

392

開國五十年卯 月 日法令交換局条例に據り定款  
ヲ設クルト左ノ如シ

## 交換局定款

### 第一章

### 交換局組織ノ事

第一条 交換局ハ朝鮮四通用ノ鉄貨ヲ發行シテ、  
義務ヲ負擔ス

但換票ヲ發行スルヲアルヘシ

第二条 交換局ハ本局ヲ京城ニ置クニ各開港場及ニ  
其他必要ナル地方ニ支局ヲ設立シ又ハ確實ナル銀  
行及人會社（カルレス・オシテス）ト締約スルヲ得又爲

智方ヲ人年スルイアルニ

第三条 通用銀貨種類及發行額ニ如シ

本位五兩銀貨

伍百萬兩

通用兩銀貨

一千萬兩

補助銀貨至白銅貨

一千七百五十萬兩

補助銀貨銅貨

七百五十萬兩

通計四千萬兩

右各種類ノ權額券

第四条 此ノ銀貨地金、交換局總裁ニ於テ發行ノ

都合ニ依リ其種類ヲ定メ順次造幣局ニ送付ス



ルモノトス

## 第二章

資本金及債却及積立金事

### 第五条

文部局資本金は通貨一百五十万兩（日本金）

（二十五万兩ナリ）ト定ムル金額ヲ以テ運轉資本金トシ日本國大坂ニ

於テ之ヲ更債スルモノトス

但運轉ノ都合ニ依リ資本金ヲ増加スルコトニ

第六条 資本金更債及債却方法ハ政府ト債權

者ト間ニ取決シタル条約義務ヲ履行スルモノトス

第七条 純益金之ヲ市面ニ積立資本金更債

債却ノ資ニ備エ幣情ノ上ニ更ニ常規ヲ設ケ公利

公益、事ノ限リ總裁見込ニ以テ貸借ヲ爲ス  
得ヘシ

第八条 条例第九条第十條通り他人賣買貸借ハ  
一切禁制スルヘシ

### 第三章

第九条 毎年五月三十日迄於テ請取事務  
ヲ調査整備シテ之ヲ監督官ニ報告スルヘシ

第十条 事務章程及職任免黜陟昇降  
別ニ内規ヲ設テ總裁ヲ於テ實施スルヘシ

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	交換局條例

分 類 番 号	
	62-2j

国立国会図書館

登録番号	
------	--

和  
平

交換局條例

大三輪文庫  
393

# 交換局條例

交換局條例左ノ通り制定ス

## 交換局條例

### 第一條

交換局ハ朝鮮國通用ノ錢貨ヲ發行シタル義務ヲ負擔ス

但換西幣ヲ發行スルハ可シ

### 第二條

交換局ハ本局ヲ京城ニ置クヘシ各開港場及其他必要ナル地方ニ支局ヲ設立シテ確實ナル銀行及ヒ會

社（コレスオシテス）ト締約スルヲ得又ハ協方金  
ルヲ得ヘシ

### 第三條

交換局ノ資本金ハ通貨一百廿五万兩（日本金二十五  
ト定メ之ヲ運轉資本金トシ日本國大使ニ於テ之ヲ負  
債スルモノナク

但運轉上ノ都合ニ依リ其資本金ヲ増額スルカ  
ルヘシ

### 第四條

資本負債償却方法ハ政府ト債權者ト間ニ於

テ取替ヒタル条約義務ヲ履行スルモノトス

第五條

發行錢貨ノ地金買入方法ハ政府ト地金賣主トノ間  
ニ取替ヒタル条約ヲ履行スルモノトス

第六條

交換局ニ於テ種類ノ通貨及ヒ兌換率ヲ發行ス

本品銀貨

五兩

通用銀貨

一兩

補助白銅貨

二匁五等

補助銅貨

一匁

旧銅錢（當錢）一分

各種兌換券

第七條

兌換局は通貨豫定發行額外全國紙幣及び金  
融に從ひ總裁の意見に於て發行高を増額スルヲ得  
ヘシ

第八條

兌換券の發行は融通上必要なる限り滿準備法  
則に依り總裁の意見に於て發行スルニ

第九條



交換局の銀貨地金及び砂金、銀地金、外地物  
品を賣買スルヲ指ス

第十八条

交換局は前二条第三項及び旧条規定外の金銭  
一切貸借ヲ禁ズ

但し本会員使債即ちより果て規定ヲ得ルハ別ニ  
是ノ旨ヲ貸借方法ヲ請フルヲ可シ

第十九条

交換局は總裁一人副總裁一人理事五名以下監  
理人

第十二条

總裁副總裁は任期五年とし總裁は兼任副總裁は兼任せず

第十三条

監督官一名を置き諸般事務を監督するものとす  
但官守及び任期は

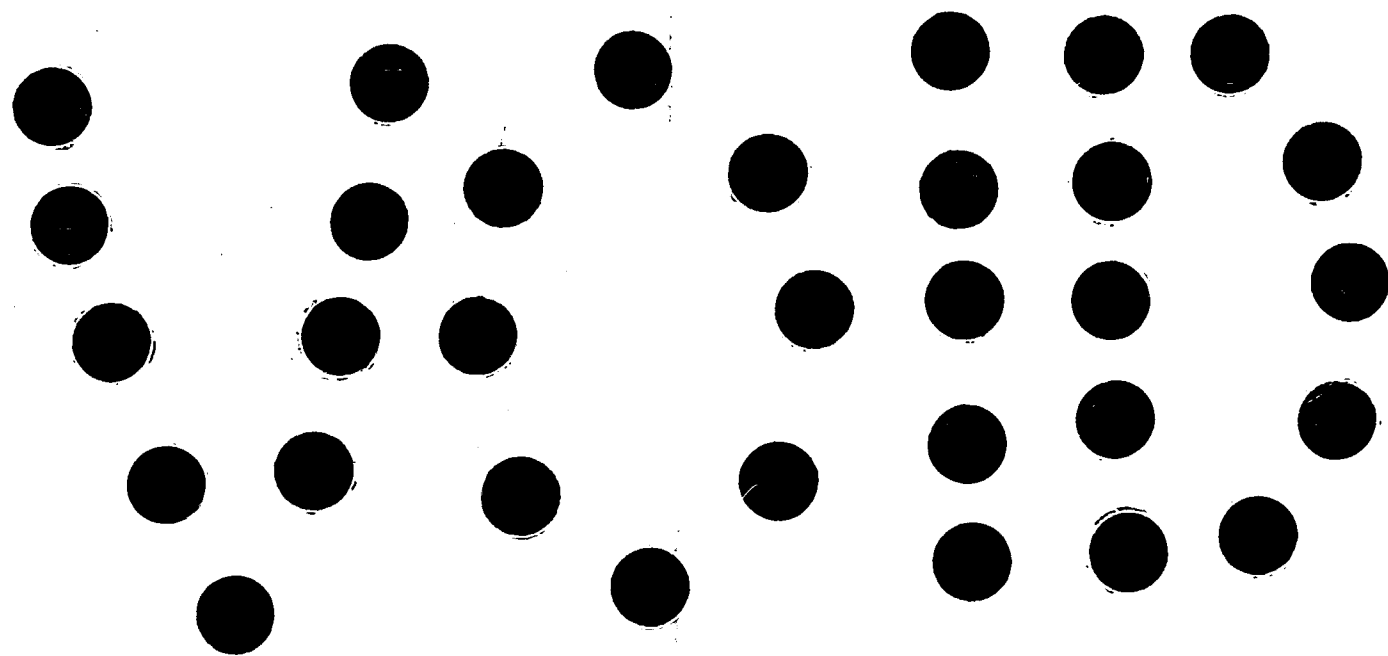
第十四条

公換局の事務例に基き定款を作り之を  
遵守するものとす

和

和平

交換局章程



茲制定交換局章程條例開列左

交換局章程條例

第一條

交換局為朝鮮國通用貨錢之所負擔下條

所開列義務

但倘為換票發行

第二條

交換局京城置本局各開港場其他必要箇處

設支局或銀行會社可信憑者為締約人余為替

辦理

第三條

交換局原資為通貨一百五十萬圓即日本通貨式

拾五萬因於日本國大阪借款是為運轉原資

但運轉的便宜增減原資

第四條

原資借款償却法應踐行政府及債權者間所締結條約

第五條

發行貨鈔地金購買法應踐行政府及地金賣主間所締結條約

第六條

交換商所發行通貨及換票種類開列下

本位銀貨 五兩

通用銀貨 一兩

補助銀貨 二錢五分

補助銅貨 五分

舊銅錢 舊五文 一分

上各種換票

### 第七條

交換局通貨發行豫定額之外全國民度及融通  
狀況倘要額則任總裁意見便宜施行

### 第八條

發行換票以融通的便宜則於滿準備法一任總裁  
意見施行

### 第九條

交換局除錢貨地金砂金及金銀地金之外他物品  
賣買為嚴禁

### 第十條

交換局於第二條第三條第四條規定之外不許金  
錢貸借

但自資借款債却之後為以利益為更設條規

為貸借便宜施行可也

第十條

交換局總裁一人副總裁一人理事五人綜理事務

第十二條

總裁及副總裁五年為任期總裁是堂上副總裁

是為堂下

第十三條

監督官一人監督諸般事務

第十四條

俱無官等及任期

交換局應準據本條例及華商制定款而遵守

守之

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	開支贈款辦法

分 類 番 号	
	63-1

登録 番号	
----------	--



開支贈款辦法

大三翰文書

396

## 開支贈款辦法

此項贈款係因嚮來朝鮮國財政紊亂艱絀已經今欲為之整頓培固根基起見由日中國政府特行贈送者也朝鮮國政府理宜克體其意用之叔興裨益國家事業鞏固王室財計以及于永遠併立國家度支根基以期無負美意為要今開列辦法於左

一將贈款全數三百萬元均分之其一半即一百五十萬元歸之

王室一半一百五十萬元歸之政府但於收到後一為務杜濫支糜銷一為豫防

民間財政失序先在日本中國將此款寄存妥實可靠之銀行勿嫌行息甚少每遇有緊要用項方得隨時抽支

### 王室用款

一全額一百五十萬元內抽出一百萬元

交附政府

用銀行存票過付亦無妨礙

與政府支出之

款歸併為一以充京城仁川間修造

鐵路資本

但修造鐵路一概事宜詳載于政府用款內

既將其屬

王室之一百萬元交附政府購在政府

與其所領一百五十萬元歸併為一

以此作為基金准其發行紙幣但由

交附該款之日起每年由政府行五

分利息納之

王室至鐵路開業之日為止

倘於鐵路開業後其利益配當金不到五分則應由政府補足為五分納之

王室至得交納利益配當金五分之一日為限此項一百萬元利息每年可得五萬元即將此款積儲每年歸入王室財產基金外其如何辦法須預行切實考定為要至剩餘五十萬元應歸入

王室財產且從殖利之法妥為儲存但

必須慎擇切實妥靠之法為要稽之  
既往近於十數年之間政府購抄紙  
機器或火輪船以及設機器局若  
或類此製造所所支款項為數良非  
尠少而至今未嘗獲一毫之利併其  
資本亦屬子虛前轍可監故如此刺  
款先於日本購置五分或六分利附  
公債証書其每年所獲利息二萬五  
千元與前開應得五萬元利息一併  
歸入

王室財產切勿輕易支銷但現在應行  
裁汰

宮內府浮冗官貲或宮女等其情有不  
得已者酌與恩恤金或年金以示體  
恤則不得不由此項開銷

政府用款

一全額一百五十萬元內抽出一百萬元  
與

王室交到之一百萬元併歸為一即用  
此款充作京城仁川間修造鐵路之  
款現查修造鐵路所需與架設漢江  
橋梁之費一併估計為二百餘萬元  
至

王室支出資本即如前段所開每年由

政府算付五分利息。迄錢路開業之後，其由營業所獲利益，在政府兼保照數付清，不得利薄。有所欠，帶修造此項錢路，係屬政府管業，故在政府設臨時錢路建築局舉長於理財官負一名，作為長官，併由日本國延聘嫻熟技藝之技師、長會計長各一名，俾其輔佐而擔此重任。之負必須予以全權專責辦理，不得由政府若局外之人稍涉牽制，以致債事。其餘分掌緊要事務，其為首之一二名，須由日本國選聘適任之技術員，以期事

# 業克成

一發行紙幣事宜以

王室政府備充修造鐵路之二百萬元  
以及政府所剩五十萬元作為基中  
可由政府發行兌換紙幣其應發數  
目於本款二百五十萬元准增百分  
之二十五以抵三百一十二萬五千  
元為率限按照鑄造貨幣之數逐漸  
發行紙幣至額滿為限但有願以紙  
幣兌換銀貨者隨到隨換以昭大信  
當開辦修造缺道之時發行紙幣正  
屬暢通時機故其紙幣貨幣各項比



例務當細心恪守最為緊要  
刷印紙幣事宜方今政府欲自行購  
置必需各項機器一則需款浩繁以  
現在財政情形斷難籌措一則欲備  
齊工場機器約需周年餘方可成就  
故其彫刻刷印等事莫如與日本國  
印刷局訂約為便但至其紙性可用  
朝鮮國自造上好之物於抄紙之時  
參用藥物之足以為秘密符号者若  
或抄出字樣花樣且由日本印成送  
到後在度支部蓋用精密部印以及  
大臣印則足以防範贗造之弊若或

酌量時宜由度支部遣派官員到日本印刷局眼同從事亦無不可至如行使紙幣之法所有修造鐵路工匠夫役工資以及在國內應購各項物件價值均以紙幣支交其由日本購辦物件價值可與度支部所存之本紙幣兌換開支

紙幣果能暢行靈便則可照豫先籌定將三百一十二萬五千元儘數發行如此則除開銷修造鐵路需款外尚可剩餘一百一十二萬五千元即以此充作墊補來年度歲計不敷則

優可支持三四個月蓋因朝鮮國前  
年度歲入概於第二年三四月方得  
收清為常故能維時開年三四個月  
間則彌補來年度歲計亦有所恃庶  
幾無甚艱絀

一初設機關銀行事宜於發行紙幣之前  
由政府曉諭殷實富戶招集股份開  
設三十萬元以上資本之銀行併制  
定嚴緊修例藉杜冒濫之弊又由度  
支部為之監察其銀行總董董事等  
人由股份主撰舉經度支大臣兼認  
方准其執事併須由日本國延聘銀

行顧問一名以及延備嫻熟行務及  
計纂之日亦人各一名以司冊簿會  
計

此項銀行股份須限定日期招徠但  
股份之數集至五萬元以上則雖在  
限以內亦可准其開行營業

招徠股份均用銀貨銀塊若或砂金  
金塊其屬金銀地者先行分晰按照  
成色價值併扣除鑄造規費以及運  
送費照銀貨換算

此項銀行在京城設立本行俟至行  
務就緒時酌宜在仁川釜山元山以

及開城平壤大邱公州全州原州咸

興隨時擇要分設支行若分支所

在日  
本之

析出  
張所

系辦兌換政府所發紙幣又辦理

政府徵收稅項以及各項匯款等事  
由度支部按照所發紙幣之若干分  
豫先撥給銀貨以充兌換政府所發  
紙幣之基金如其兌換基金應如何  
撥交以及所換紙幣應如何辦理之  
處須宜另定章程辦法

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	專任狀

分 類 番 号	
	63-2

国立国会図書館

登録番号	
------	--

專任狀

今此自

大朝鮮政府設立貨幣交換所方行貨幣交換律令 汝奉此命監查新造貨幣價值與日本均一毫無陞降以利國便民無碍通用之意為準的成立交換所設行規模條例之事專任於汝必須適宜設定可也政府當相保護卽為施行事報酬之儀從錢貨製表出之數其資本及鑄造費除減之餘以利益十分之三無違分給事

自交換施行日限一個年

大朝鮮開國四百九十八年十一月初三日

右給

大日本大坂市北區岩井町

内藤乾三

大朝鮮内務府

印



# 貨幣交換法令

第一款 貨幣交換者自廟堂設立交換所  
發布貨幣法令後自與國局新造貨幣  
以為交換之準備發行換票而貨與換票  
從其處願出給事

第二款 此換票勿論全國何處租稅及其他公私  
貸借受授之際無碍通用可也

第三款 交換所金銀銅地金遺金之外他物品勿  
為買賣且不得貸借事

第四款 交換所於日清英米德法俄伊各國新  
聞一七收取每日金銀正價揭示事

第五款 凡金銀持來于交換所若有願賣

之人錢貨與搜票間從其所願卽為交搜事  
第六款以搜票欲搜錢貨者取扱事務中  
勿論何時隨意搜給事

第七款此搜票為贗身造描改者處嚴刑事

## 內務府

# 完約

第一條 交搜所資本主搜票貨幣及金銀地金并管理其出納之節公明適宜整理事示于主任官可也

第二條 交搜所殖金者滿期之前自政府勿為入用而若有緊要處不得已入用之時限利益金十分之一入用而此外不可命令于交搜所也勿為超過此制限堅持嚴禁事

第三條 王國金銀地金依礦法自礦務局採掘收聚輸送于交搜所以搜票錢貨等交搜可也

第四條 政府管理部內之金銀地金隨其所存

惣文附交換所以換票及錢貨收換出給事

右完約成給

大日本大阪市北區岩井町

内藤乾三

大朝鮮開國四百九十八年十月初五日

内務府

專任狀

今此自

大朝鮮政府設立貨幣交換所方行貨幣  
交換律令 汝奉此命監查新造貨幣價值  
與日本均一毫無陞降以利國便民無碍通用之  
意為準的成之交換所設行規換條例之事專  
任於汝必須適宜設定可也政府當相保護即為  
施行事

報酬之儀從錢貨製表出之數其資本及鑄造費  
除減之餘以利益十分之三無違分給事

自交換施行日限一箇年

大朝鮮國國曆九年十一月初三日

右給

大日本大坂市北區岩井町

内藤乾之

大朝鮮内務府

印

## 貨幣交換法令

第一款 貨幣交換者自廟堂設立交換所發布貨幣法令後自由圓局新造貨幣以為交換之準備發行搜票而貨幣與搜票從其處領出從事

第二款 此搜票勿論全國向處租稅及其他公私貸借受授之際無碍通用可也

第三款 交換所金銀銅地金潰金之外其他物品勿為買賣且不得貸借事

第四款 交換所於日清英米德法俄伊各國新

聞下收取每日金銀正價揭示事

第五款 凡金銀持來于文搜所若有願賣之人  
錢貨與搜票間從其所願即為文搜事

第六款 以搜票款搜錢貨者取投事務中勿論  
何時隨意搜給事

第七款 此搜票為履歷迭描改者處嚴刑事

內務府



# 完約

第一條 文搜所資本主搜票貨幣及金銀地金并管理其出納之節公明適更整理行事示于主任官可也

第二條 文搜所殖金者滿斯之前自政府勿為入用而若有緊要處不得已入用之時限利益金十分之一入用而此外不可命令于文搜所也勿為起過此制限堅持嚴禁事

第三條 全國金銀地金依礦法自礦務局採掘收聚輸送于文搜所以搜票錢貨幣等文搜

可也

第四條 政府管理部內之金銀地金隨其所有  
物交附交換所以複票及錢貨收換出給事  
右完約成後

大日本大坂市北區岩井町

內藤乾三

大朝鮮開國四百九十八年十月初五日

內務府

一

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	日本政府に對する歎願書

分 類 番 号	
	63-3

国立国会図書館

登録番号	
------	--

不肖長官衛

誠恐頓首謹テ書ヲ外務大藏兩大臣閣下ノ左ニ

呈シ奉歎願候 不肖長官衛

儀ハ曩日ニ外務大臣閣下ノ所照會

ヲ蒙リ朝鮮國王殿下ノ招聘ニ應シ我政府、所允可ヲ經テ國交

換署會辦ノ官職ヲ受ケ該貨幣制度議定及貨紙幣發行ノ全

權ヲ委任相成就職罷在候處今般貨幣資金調達其他貨幣

鑄造ニ係ル要件ヲ以テ我國ヘ派遣ノ命ヲ受ケ遂ニ兩省ノ御

允可ヲ得テ貨幣極印器械讓受ケ銀地製造等ハ既ニ曉平大阪造

幣局ニ於テ着手相成事業上此至便至幸ヲ與ヘラレ候儀全國

ノ為ニ只簡奉拝謝候然レニ全國ニ於ケル典國局即ケ造幣局ハ最モ

不完全ニシテ今回譲リ受ケタル畧械等ヲ握付能ハサルハ勿論地勢、  
如キモ亦不便ニシテ到底用ヘキ者、無之依テ更ニ仁川府、近傍  
ニ地ヲトシ移轉建設ノ計畫、有之候度豫テ函閣下ニ於テモ  
御了知被為在矣通リ、同國政府ノ貧弱ニシテ而モ財政ノ紊亂  
ナル其費ヲ支出スルノ途無之をモ些少ノ額ニモ有之候得者貨  
幣資金ノ爲ニ我國ニ於テ募集シタル外債中ニ於テ繰出シ得ル  
ヘキモ何分其豫算ハ充分ノ節減ヲ以テ尚ホ五萬圓ヲ要スル事ニ決  
定候得者強ニト備感忤殊ニ折角我國ヲ讓受ケタル畧械等ニシテ  
握付方不完全ナルニ於テハ必スヤ事業上ニ於テ惡結果ヲ来タシ爲ニ  
其畧械粗送等ノ点ニ誤認仕矣事モアラン歟ト苦慮且ツ遺憾ノ

極々望候也。モ今固全國王殿下カ此重任ヲ不肖長兵衛ニ委托相成  
候者ハ全ク我國政府ヲ信スル餘ニ出ダタルハ勿論ノ儀ニ候得者  
不肖長兵衛カ其微力ヲ顧ミス而カモ老年ニシテ其招聘ニ應シタル  
者ハ全ク私利私營ノ為ノニ無之深ク東洋ノ形勢時情ニ感スル  
所有之殊ニ同國ハ我國ト唇齒ノ間ニモ有之候得者其身命ト  
財産ヲ投シ以テ彼ノ國ノ進歩ヲ助ケ努力竊カニ我國ニ尽シ  
少カ國恩ノ萬一ヲ報セント欲スル外他事無之候是ヲ以テ不肖  
長兵衛カ為ス所ノ事柄ハ其成敗何レモ皆我國ノ体面ニ關  
スル事ナレハ獨リ自ラ戦々競々憂慮罷在候次第ニ此望候  
茲ニ不肖長兵衛カ及候處ニ據レハ去ル明治十一年中我政府ヨリ

全國政府、橫濱正金銀行、名義ヲ以テ御貸共相成候金員  
ハ年賦トシテ其後年々元利金返納致展今後一兩年ヲ以テ  
完納ノ趣有ハ此際全國カ貧弱ニシテ國費多端ノ折柄膏テ  
貨幣制度ヲ確立シ相誦候義舉御賛成ノ康ヲ以テ全金  
額ハ殆ノヨリ無利息ノ計算ニ據リ元金而已完納所用餘被  
成下今固精算ノ上若シ不足金有之候得者最早少額ノ  
事トモ相心得候得者一時返納仕今日以後可相納金員ヲ  
以テ前條典國局建設ノ費ニ充テ申度若シ奉答ニ法許可  
被成下候上ハ實ニ彼ノ國民カ欣喜其厚意ニ感スヘキハ勿論  
我國ノ隣邦ニ親愛ヲ廣ク其國光ヲ輝スヘク然ル時ハ全局ハ

全ク我國政府ヨリ興ヘタルト一般ノ儀ニ莫得者全建築ハ日本  
ノ厚意ヲ記念トシテ永リ後世ニ示シ降テ不肖長兵衛ニ於テモ  
其面目ヲ施シ可申ハ勿論一層全國政府ノ信用ヲ厚クシ事  
業ノ上ニ於テ非常ノ便利ヲ得ル而已ナラズ將來西國ノ間ニ於テ  
謀ル所亦裨益ヲ蒙ル不尠儀ニ由望候何幸萬般ノ事情  
由洞察被成下特別ノ由詮議ヲ以テ右願意由聽許相成  
候上ハ全國政府ノ幸福ハ素ヨリ不肖長兵衛ニ於テモ望外ノ  
大慶ニ由望候誠惶誠恐奉歎願候也



名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	複本宛大三輪長兵衛書簡写

分 類 番 号	
	63-4

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

今般朝鮮政府、於テ新式貨幣ノ制度相設ケル  
新貨幣ヲ行相成候、付拙者ヲ聘シ其事務ヲ委  
任致度趣御省ヲ經テ該政府ヨリ照會有之候  
旨御通達、相成拝承仕候然ル處貨幣制度  
改良之儀、實、國家重大ノ件、シテ不容易事  
業、有之候、付別紙事項書ノ通滿五ヶ年間拙  
者、全權委任相成候事、御坐候ハ、承諾仕候  
心得、御坐候間下御午數該國公使、御照會  
被成下度奉願上候也

明治三十二年九月二十一日

大坂西區北堀江通五丁目

三十五番屋敷住

大三輪 長兵衛

外勢大臣子爵 榎本武揚殿

今般朝鮮政府、於テ新式貨幣、制度相設ケラレ  
新貨幣発行相成候、付拙者ヲ聘ニ其事務  
委任致度趣御省ヲ經テ該政府ヨリ照會有  
之候旨御通達、相成拝承仕候然ハ舊貨幣  
制度改良之儀者實、國家重大之件、シテ  
不容易事業、有之候、付別紙事項書之通  
滿廿年間拙者、全權委任相成候事、御坐候  
ハ、承送仕候心得、御坐候間乍御手數該國  
公使、御照會被成下度奉願上候也

明治三十四年九月二十一日

大坂西區北堀江通五丁目

三十五番屋敷住

大三輪長兵衛

外務大臣子爵榎本武揚殿

名称	大三輪長兵衛文書
標題	榎本宛 在東京朝鮮国辦理公使書簡写

分類 番号	
	63-53

登録 番号	
----------	--

以書簡啓上候陳者令般弊國政府：於  
舊來ノ貨幣制度ヲ改正シテ更ニ本位ヲ  
定メ以テ新貨幣ヲ鑄造發行シ又貨幣  
交換所ヲ設立シ以テ新舊貨幣ヲ交換致  
度候ニ付テハ之ヲ統理セシムガ為メ貴國大  
坂市民大ニ輪長兵衛ヲ聘用シ之ニ關ス  
一切ノ全權ヲ委任致度候間右本人一御照  
會相成様致度忝ニ本人待遇俸給等ノ  
儀ハ然ラ當令弊國ニ雇入候勲國人  
ヨリ御下ノ命令ニ依リ御照會ヲ得貴意候

敬具

明治三十四年

月 日

在東京朝鮮國公使館  
辦理公使

外務大臣子爵榎本武揚殿

閣下



名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	京釜鐵道發起人委員會通知書

分 類 番 号	
	64-1

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

三千五百元  
此乃仁人  
神福童  
抄生

証書  
經呈以  
銀  
示  
結  
惠付如  
中

解  
身  
上



[illegible]

事之要者必以爲之  
此其所以印刻之通  
其意者必以爲之

事之要者必以爲之

事之要者必以爲之

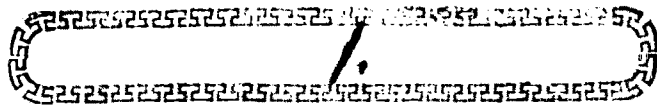
明治

年

十月

五

日



按時未嘗無過也當此之候蓋可無難於有上之德哉  
 居而如本學九月合東城之秋多事故現理者作之未  
 清產乾長江中其民因地利而中其年之豐饒則年  
 多事若計其事作上之有以難之極則之豐饒則  
 事之有難也上論年之有難也中其年之豐饒則年  
 以有而也上之有也

癸丑年十月 日 東城學堂書

張作之

王昌

王昌

明治 年 月 日

大正十一年

中野村

大正十一年

竹田

大正十一年

大正十一年

大正十一年

大正十一年

大正十一年

大正十一年

此通記を以て聖書を以てしん

日





大三輪長女衛樓

榻下

謹啓昨斗式日東京金鐵道合  
合書二別席寫書之通二願  
書之談工外務省之退步四直候  
間左様舞了承以下度此段  
神通知申上候早之教具

尾崎三良  
竹内福

明治  
年十月十三日

松山市校

張氏之於陳氏也。性之思之。清操之。每  
 幸。大。家。所。陳。陳。之。別。第。一。道。之。委。  
 員。諸。氏。之。道。之。事。之。事。之。事。之。事。  
 皆。其。心。之。事。之。事。之。事。之。事。之。事。  
 以。出。陳。氏。不。止。其。事。之。事。之。事。之。事。  
 事。之。事。之。事。之。事。之。事。之。事。之。事。  
 事。之。事。之。事。之。事。之。事。之。事。之。事。  
 事。之。事。之。事。之。事。之。事。之。事。之。事。

明治二十一年十月六日

東京明治三十九年九月九日

東京市京橋區銀座二丁目十五番地

# 大三輪長兵衛

御下

謹啓 秋迄お作は心金は多分お就  
后より事々此大受ては事柄此今四角  
疎通條路調中 福より因家より人  
一又受て心者下差より力より方より心  
少上は事と洋より車調元陳より車調元  
元事者成るも事者人より大坂五倍心  
姓名に事より大坂より上より大坂より  
事より上より大坂より上より大坂より

東京明治

年九月廿二日

東京市京橋區銀座二丁目十五番地

に譲りて及未辨にし者ありしを

の持主よりいふに未辨に是若執中

法中にてハ未辨に是若執中

シヨル中在法中ハ未辨に是若執中

中在法中ハ未辨に是若執中

中在法中ハ未辨に是若執中

中在法中ハ未辨に是若執中

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	京釜鐵道發起人之内 大阪在住者名簿

分 類 番 号	
	64-2

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

東京明治

年

月

日

東京市京橋區銀座二丁目十五番地

東京鐵道株式會社  
右取仕任者

釀金領收濟

北區幸町通三丁目五番地

河部 辰吉郎

西區幸町通三丁目六番地

富田 九子

釀金領收濟

西區幸町通三丁目五番地

木名 伊助

釀金領收濟

西區北堀江通三丁目八番地

森本 清吉郎

釀金領收濟

東京 明治

年

月

日

東京市京橋區銀座二丁目十五番地

南運艮苦付所世番郎

洲上吉上乃志

南運末去橋通三目番郎

濱田辰之助

西江江祖小通三目吉上乃志

小倉 幸

西江江祖小通三目吉上乃志

吉賀國左衛門

西江江祖小通三目吉上乃志

永井田 佐七



東京明治

年

月

日

東京市京橋區錦座二丁目十五番地

釀金領收濟

西三河 西三河 西三河 西三河

庄 庄 庄 庄

西三河 西三河 西三河 西三河

釀金領收濟

西三河 西三河 西三河 西三河

西三河 西三河 西三河 西三河

西三河 西三河 西三河 西三河

西三河 西三河 西三河 西三河

釀金領收濟

西三河 西三河 西三河 西三河

西三河 西三河 西三河 西三河

西三河 西三河 西三河 西三河

身 印 泥

年

月

日

東京市市橋區銀座二十丁目十五番地

北區事務所東京市市橋區銀座二十丁目十五番地

今井 多七

西成郡踏田村幸田江野高部

羽田 市花

子已土佐地通一日土高部

友平 清兵衛

右之通 山 上



名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	京釜鐵道株式会社定款草案

分 類 番 号	
	64-3

登録番号	
------	--

京釜鐵道株式會社定款

京釜鐵道株式會社定款草案

第一章 總 則

第一條 本會社ハ京釜鐵道株式會社ト稱  
シ韓國政府トノ合同條約ニ依リ日本  
政府ノ命令ヲ遵奉シテ設立スルモノ  
トス

第二條 本會社ノ責任ハ株主ノ引受ケ  
ル株式ノ金額ヲ以テ限度トス

第三條 本會社ハ本社ヲ東京市ニ置キ營

業所ヲ韓國京城ニ置ク但時宜ニ依リ  
韓國釜山其他必要ノ場所ニ出張所ヲ  
設クルコトアルベシ

第四條 本會社ハ韓國京城ヲ起點トシ水  
源屯浦公州永同大邱等ノ都市ヲ經テ  
同國釜山ニ至ル間ニ鐵道ヲ敷設シ交  
通運輸ノ業ヲ營ムヲ以テ目的トス

第五條 本會社ノ資本金ハ貳千五百萬圓  
トス但シ最初先五百萬圓ニ當ル株式  
ヲ募集シ漸次必要ニ應ジ増募スルモ

ノトス

第六條 本會社ハ存立期間ヲ豫定セズ

第七條 本會社ノ公告ハ本社所在地ニ於

テ所轄裁判所ノ採用スル新聞紙ヲ以

テスヘシ

## 第二章 株式

第八條 本會社ノ株式ハ一株ヲ金五拾圓

トシ最初總株數ヲ拾萬株トシ漸次増

加シテ五拾萬株トナス

第九條 本會社、株式ハ總テ記名トナシ

其種類ヲ一株券拾株券百株券ノ三種

トス

第十條 各發起人及各贊助員ノ支出シタ

ル創業費ハ株式申込ノ場合ニ於テハ  
証込金ニ充當スベシ

第十一條 株主ハ株式申込ノ際証込金ト

シテ一株ニ付金貳圓ヲ拂込ムヘシ但

此証込金ハ第一回株金拂込ノ際其拂

込金ニ充當スルモノトス



第十二條 株金拂込ハ一株ニ付第一回ヲ  
金五圓トシ第二回以下ハ事業ノ必要  
ニ應シ重役會議ニ於テ其拂込金額及  
期限ヲ定メ少ナクトモ六十日前ニ各  
株主ニ通知スヘシ但一株拂込金ハ毎  
回金五圓ヨリ多カラサルモノトス

第十三條 株主若シ株金拂込ノ期日ヲ怠  
リタルトキハ百円ニ付一日金四銭ノ  
割ヲ以テ延滞利息ヲ徴收ス

第十四條 第一回拂込金期日後六十日ヲ

經テ其拂込ヲ為サ、ル片ハ三十日以  
内ニ拂込ムヘキ催告狀ヲ發シ期限ニ  
至リ仍ホ拂込ヲ為サ、ル片ハ承会社  
ノ株主タル權利ヲ放棄シタルモノト  
シ先キニ拂込タル証拠金ヲ沒收スベ  
シ

第十五條 第二回以後株金拂込期日後六

十日ヲ經テ拂込ヲ為サ、ルトキハ三  
十日以内ニ拂込ムヘキ催告狀ヲ發シ  
期限ニ至リ仍ホ拂込ヲ為サ、ルトキ

ハ其旨ヲ株主ニ通知シテ未拂込株式  
ヲ公賣ニ付シ其代金中ヨリ催告ヲ爲  
シタル拂込金并ニ第十三條ノ延滞利  
息及之ニ関スル一切ノ費用ヲ扣除シ  
餘剩アルハ之ヲ還付シ不足アルト  
キハ追徴スヘシ

第十六條 株式ヲ賣買譲與スルハ本会  
社所定ノ書式ニ依リ双方連署ノ書面  
ヲ以テ株式ノ書替ヲ請求スヘシ但株  
主死亡シ相續人ヨリ書換ヲ請求スル

場合ニ於テハ戸籍吏ノ証明書ヲ添付  
スヘシ戸籍吏アヲサル中ハ親族若ク  
ハ本會社ニ於テ適當ト認メタル二名  
以上ノ保証人連署スベシ

第十七條 株式ヲ水火盜難等ニ因リ亡失  
毀損シ又ハ氏名ヲ變更シタル中ハ其  
理由ヲ詳記シタル書面ヲ添へ株式ノ  
再渡又ハ更正ヲ請求スヘシ其亡失ニ  
對シテハ別ニ定ムル所ノ規定ニ依リ  
テ廣告ノ上三週間ヲ經サレハ請求ノ

株式ヲ請取ルルヲ得ス之ヲ要スル費  
用ハ本人ヨリ徴収スヘシ但株式ヲ亡  
失シ再渡ヲ請フ時ハ二名以上ノ保証  
人ヲ要シ氏名ヲ変更シタル時ハ戸籍  
吏ノ証明書ヲ要ス戸籍吏アラサル時  
ハ前條ノ例ニ同シ

第十八條 株主ノ名義書替更及ニ新株  
券ノ交付ニ付テハ別ニ定ムル所ノ規  
定ニ依リ相当ノ手数料ヲ徴収スヘシ

第十九條 本會社定式總會ノ前三十日ヨ

リ多カラサル期間ヲ定メ株式ノ書換  
ヲ停<sup>止</sup>スベシ

### 第三章 株主

第二十條 各株主ハ株主總會ニ出席シテ  
其所有株式ニ應ジ發言投票ノ權ヲ有  
ス

第二十一條 株主カ未成年者瘋癲白痴者  
禁治産者又ハ法人ナル中ハ其株主ノ  
有スル權利ハ被選舉權ヲ除ク外法

定代理人之ヲ行フ但其証ヲ具シ豫メ  
届出置クモノニ限ル

第二十二條 株主又ハ法定代理人ハ株式  
取得ノ時其住所氏名及印鑑ヲ本社ニ  
届出<sup>ツ</sup>ヘシ但改印又ハ住所身分ニ異  
動ヲ生シタル中モ亦全シ

第二十三條 株金拂込ノ期日ヲ過クルモ  
未タ拂込<sup>ツ</sup>ラサル株主ハ其未払込  
ノ株数ニ対シ總會ノ議決權ヲ停止ス

## 第四章 總會

第二十四條 株主總會ハ定時及臨時ノ二種ニ別テ定時總會ハ毎年二月八月ノ兩度臨時總會ハ取締役又ハ監査役ノ必要ト思量スル時及總株主ノ十分ノ一以上ニシテ總株數ノ十分ノ一以上ニ當ル株主ヨリ会社ノ利害ニ関シ其事項ヲ舉ケテ請求アリタル時ハ取締役會長之ヲ招集スヘシ但總會ハ議題外ノ事項ヲ議スルコトヲ得ス



第二十五條 總會ノ日時及場所ハ取締役  
會長之ヲ定メ少ナクモ十四日以前ニ  
株主ニ通知スヘシ但至急ヲ要スル場  
合ニ於テハ其時日ヲ短縮スルコト  
アルヘシ

第二十六條 總會ノ議長ハ取締役會長之  
ヲ行フ但株主ノ請求ニ依リ招集シ  
タル場合ニ於テハ臨時ニ議長ヲ選舉ス  
ルコトアルヘシ

第二十七條 株主カ總會ニ出席スルコト

能ハサル中ハ本會社ノ株主ニ限り代  
理ヲ委託スルコトヲ得

第二十八條 總會ノ議長ハ自己所有ノ議  
決權ヲ行使スルコトヲ妨ケス

第二十九條 總會ハ出席株主議決權ノ過  
半数ニ依リ議決ヲ為ス但社債ヲ起シ  
又ハ定款ヲ變更シ及任意ノ解散ヲ為  
スニ付テハ総株主ノ半数以上ニシテ  
総株數ノ半数以上ニ當ル株主出席ス  
ルニアラザレハ議決ヲ為スコトヲ得

ス

本條ノ場合ニ於テハ委任狀ヲ以テ代理ヲ托シタルモノヲモ加算スルモノトス

第三十條 前條但書ノ場合ニ於テ出席株主定数ニ滿タサルトキハ其總會ニ於テ假決議ヲ爲シ再ビ總會ヲ招集スヘシ  
第二總會ノ通知ニハ第一總會ノ決議ヲ詳記シ  
第二總會ニ於テ出席株主決議權ノ多数ヲ以テ第一總會ノ決議

ヲ認可シタル中ハ之ヲ有効トナスヘ  
キ旨ヲ明告スベシ

第三十一條 議長ハ總會ノ決議ヲ議事録  
ニ登記シ取締役監査役ト共ニ署名捺  
印シテ保存スヘシ

### 第五章 重役

第三十二條 本會社ノ重役ハ左ノ如シ

取締役 十名以内  
内取締役會長 一名

常務取締役 三名以内

監査役 五名以内

第三十三條 取締役監査役ハ本會社ノ株式百株以上ヲ所有シ現ニ之ヲ收得シタル後六ヶ月ヲ経タル株主中ヨリ株主總會ニ於テ之ヲ選舉シ逋信大臣ノ認可ヲ経テ就任スルモトス但最初ノ選舉ニ於テハ六ヶ月ノ制限ヲ要セス

第三十四條 取締役會長及常務取締役ハ

取締役ノ互選ヲ以テ之ニ任スルモノ

トス

第三十五條 取締役監査役ノ報酬ハ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ定ム

第三十六條 取締役ノ任期ハ三ヶ年監査役ノ任期ハ一ヶ年トシ満期改選ノ際再選スルコトヲ得

第三十七條 取締役ハ其在任中所有ノ株式百株ヲ監査役ニ預ケ置クヘシ但此担保株ハ退任スルモ總會ニ於テ其在

任中取扱事務ノ承認ヲ與ヘタル後ニ  
ヤラサレハ之ヲ返付セス

第三十八條 重役中缺負ヲ生シタルキハ  
臨時株主總會ヲ開キ補缺選舉ヲ行ヒ  
前任者ノ残任期間其職ニ就カレム但  
其留任重役ノ数カ法律ノ規定ニ依リ  
サル以上ハ重役會ノ決議ニ依リ次ノ  
總會迄補缺選舉ヲ延期スルコトヲ得  
第三十九條 取締役會長ハ重役會及取締  
役會ノ議長ト爲リ之ヲ整理ス會長事

故ルル中ハ會長ノ指名スル取締役之  
ヲ代理ス

第四十條 常務取締役ハ取締役會ノ決議  
ニ依リ本社一切ノ業務ヲ執行ス

第四十一條 取締役ハ每事業年度ノ終リ

ニ於テ計算ヲ閉鎖シ其年度末ノ現況

ニ依リ損益計算書財産目録貸借対照

表事業報告會及利益配当案ヲ作り株

主總會ニ提出スル為メ一週間以前ニ

監査役ニ提出シ其検査ヲ受クベシ



第四十二條 取締役會ハ定款及總會ノ決議録ヲ本店及營業所ニ備ヘ置キ且株主名簿及社債原簿ヲ本店ニ備ヘ置クヘシ

第四十三條 取締役ハ本社營業上必要ナル事項ニシテ定款ニ規定ナキモノ及株主總會ノ決議ヲ要セサルモノニ付テハ之ヲ規則ヲ制定スルコトヲ得

第四十四條 監査役ハ取締役ノ事務執行上法律命令定款及重役會議並ニ株主

總會ノ決議ニ適合スルヤ否ヤヲ監視  
ニ其他事務執行上過失若クハ不正ノ  
有無ヲ検査ニ且帳簿諸報告書及配當  
金分配業ヲ検査ニ其正確ナルコトヲ  
保証スヘシ

第四十五條 監査役ハ會社ノ為メニ必要  
又ハ有益ト認マル時ハ株主總會ヲ招  
集スルコトヲ得

第四十六條 監査役ハ何時ニモ取締役  
ニ對シテ營業ノ報告ヲ求メ又ハ會社

ノ業務及會社財産ノ狀況ヲ調査スル  
コトヲ得

## 第六章 重役會及取締役會

第四十七條 重役會ハ取締役及監査役ヲ  
以テ組織シ毎月一回集會ス但會長ノ  
請求ニ依リ臨時集會スルコトアルハ  
シ

第四十八條 重役會ハ會長議長トナリ本  
社ノ諸規則ヲ制定改廢シ又ハ重要ナ

ル事件ヲ議決スルモノトス但監査役  
ハ議決ノ數ニ加ハラサルモノトス

第四十九條 取締役會ハ會長隨時之ヲ招  
集スルモノトス

## 第七章 會計

第五十條 本會社ノ會計ハ一ケ年ヲ二期  
ニ分チ毎年一月ヨリ六月迄ヲ前半季  
トシ七月ヨリ十二月迄ヲ後半季トシ  
每期総益金ヨリ一切ノ諸経費及損失

ヲ扣除ニ其残金ヲ以テ純益金トシ其  
配當案ヲ具ヘ株主總會ノ議決ヲ経テ  
定ムルモノトス

第五十一條 株主配當金ハ其計算期ノ六  
月十二月末日ノ現在株主ニ拂渡スモ  
ノトス

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	京釜鐵道株式會社 設立補助條件

分 類 番 号	
	64-4

登録番号	
------	--

乙卯

京釜鐵道會社發起人

男爵 澁澤 榮一

外六名

明治三十三年九月出願京釜鐵道株式會社補助ノ  
件ハ左ノ通り心得ヘシ

第一條 其社ハ明治三十一年八月付ヲ以テ韓國政府  
ヨリ得タル京釜鐵道敷設條件ニ基キ韓國京城釜  
山間ニ鐵道ヲ敷設シ運輸ノ業ヲ營ムルヲ以テ目的トスヘシ  
其社ノ線路ハ京城若ハ其附近ニ於テ京仁鐵道ノ線路  
ニ接續シ釜山ニ於テ海岸ニ達シ海陸運輸ノ連結ニ必  
要ナル設備ヲ爲スヘシ旅客ノ宿泊食事及貨物貯藏  
ノ用ニ供スル設備ヲ必要トスル停車場ニ於テハ之ヲ設

備ヨナス（シ）

第二條 其社資本總額ハ貳千五百萬トス

第三條 發起人總員ハ少クとも第一回募集額ニ對スル株金、十分、ニヨリ受（シ）

第四條 其社設立登記、日ヨリ起算シ十五箇年間に運輸開始前ニ在リテハ拂込株金（額面ヲ起スル拂込金額ヲ除ク）ニ對シ一箇年六分、利子ヲ下附シ運輸開始（一部、開始亦同シ）、後其社利益一箇年六分ニ達セザルトキハ政府ハ之ニ達スル迄其不足ヲ補給ス（シ）

利子補給額ハ如何ナル場合ト雖モ株金拂込總額（額面ヲ起スル拂込金額ヲ除ク）ノ年六分ニ相當スル金額ヲ限度トス

第五條 補給利子ハ其社設立登記前、株金拂込額



ニ對シテハ、設立登記ノ日ヨリ其登記後、拂込額ニ對シ  
テハ其拂込登記ノ翌月ヨリ之ヲ下付ス

第六條 第四條ニ於テハ其社ノ利益ヲ計算スル場合ニ  
法定ノ準備積立金ヲ控除シテ之ヲ計算ス

社債ノ利子ハ營業費中ニ之ヲ算入セス

第七條 其社ノ社債ヲ發行シタルトキハ其拂込登記ノ  
翌月ヨリ其社ノ社債ニ付シタル利子ト同一割合ヲ以テ  
政府ヨリ利子ヲ補給ス但シ其補給額ハ現社債ノ  
額面ニ對シ年六厘ニ相當スル金額ヲ限ラヌ

利子ヲ補給スヘキ社債ハ鐵道竣工期限迄ニ發行シ  
タルモノニ限ル但シ抵利借替ノ場合ハ此限ニ在ラズ利

子補給期限ハ社債拂込登記ノ日ヨリ起算シ十五箇  
年トス但シ前項但書ノ場合ニ於ケル借替社債ニ對ス

ル  
利子補給期限元社債利子補給年月ヲ通算シ  
ラ十五箇年トス

第八條 政府カ利子ヲ補給スヘキ株屋及社債ノ后シテ  
 千五百萬圓ヲ限度トス

第九條 其社、拂込株金（額面ヲ超スル拂込金額ヲ除ク）ニ  
對シ、利益一箇年六分ヲ超過スルトキハ、其超過ノ金額、社  
債ノ利子ニ之ヲ充當ス（此場合、於テハ第七條ニ依リ政  
府ヨリ補給スヘキ金額、該充當額ヲ抵除シテ之ヲ下  
附ス）

第十條 其社毎年度拂込ルキ株屋及募集スル社債屋稼算、社債發行、償額又ハ其最抵償額及社債、利率ヲ定メ稼政府、認可ヲ受ルヘシ

第十一條 第九條、依リ利益ヲ社債、利子ニ充當シ因リ



文、決算並一般事業、實現ヲ政府ニ報告スヘシ

第十五條 其社重役、任命ニ政府、認可ヲ受ヘシ

第十六條 其社ニ政府、許可ヲ受ルニ非サシ、鐵道敷

設權差ニ營業權ヲ他ニ移轉シ營業ノ管理委託

ヲ爲シ鐵道及附屬物件ヲ讓渡シ償付シ若シ之ヲ

質、抵當トシテ負債ヲ爲スコトヲ得ス

第十七條 其社ニ兵亂一揆、避難者及其救護ニ要ス

ル人員、物件又ハ凶年ニ於ケル食料品、沙害、時期

ニ他、輸送ニ先ケ之ヲ輸送スヘシ

前項、運賃並移住民、出嫁人夫、運賃ニ特別ニ

割引ヲ命スルコトアルヘシ

第十八條 政府ニ沙害ト認ルトキハ帝國、鐵道及私

設鐵道株式會社ニ實施スル法令、規定ヲ其

社ニ適用ス

前項、場合ニ於テハ政府ハ豫メ適用スヘキ法令ノ條  
項ヲ其社ニ示達ス

第十九條 其社ニ於テ本命令書ニ違反スルトキハ政府ハ  
利子ノ補給ヲ停止シ又ハ廢止スルコトアルヘシ

第二十條 本命令書中利子補給ニ関スル條項ハ帝  
國議會層、協議ヲ經テ確定スルモノトス

本命令書承諾ス上ニ請書ヲ提出スヘシ

明治三十三年九月二十七日

逕信大臣子爵 若川顯正

大藏大臣伯爵 松方正義

外務大臣子爵青木周藏

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	京釜鐵道合同=庚子願

分 類 番 号	
	64-5

登 録 番 号	
------------------	--

京釜鐵道會同之願

今般韓國京城ニ於テ京釜鐵道會社設立ノ代理ト  
韓國政府ノ代理人ト契約調印セル京釜鐵道會同條約  
書我公使ヲ經由シテ到着シタル旨ヲ以テ御渡ニ相成候ニ付  
舊ト檢閱致候處韓國政府ノ公認ニ必要ナル統理衙門ノ  
蓋印無之然ハ慶去ル明治十八年九月外務省告示第九号  
ヲ以テ凡ソ朝鮮國官民ニ於テ今後同國政府及各官署ノ名  
或ハ其委任ヲ奉シタル旨ヲ以テ我國人民ト約條ヲ訂立スルコ  
ト該國統理衙門ヨリ蓋印セルヲガレバ約ト見做シ朝鮮政府  
ニ於テ之ヲ公認セザル旨公文ヲ以テ該國政府ヨリ通知アリタル  
旨ヲ公布セラレタリ尤モ今般ノ約定書ハ我公使ト彼ノ國政府ト  
數回照會ノ上今回締結シタルモノナレハ今更形式ノ欠点ヲ以テ



之ヲ否認スルカ如キ不道理ハ不可有之儀ト存候ヘ共歲月ヲ  
経ルルニ時勢變遷官吏交迭シタル後ニ於テ此形式ノ交点  
ヲ以テ彼是故障ヲ生スル様ニハ折角ノ尽力モ水泡ニ帰ス  
ルノ憾ナシトモ雖年一兩此際該條約書ニ韓國統理衙門  
ノ蓋印ヲ押捺セシメ且毎紙ノ縫目ニ縫印ヲ為サシムル方他  
日ノ紛議ヲ豫防スル為メニ必要ト存候間何卒其旨ヲ以テ  
韓國駐在我公使ヘ御訓令相成度依而京金鐵道會同書  
下先返上此段奉願上候也

明治卅五年十月十二日

京金鐵道會同書代

竹内 綱  
尾崎 三良

外務大臣伯爵大隈重信殿

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	日韓議定書草案

分 類 番 号	
	65, 1-6

登 録 番 号	
------------------	--

江戶十七年二月  
公使銀案議定書  
寫



大三輪長兵衛

# 議定書

概要

第一條 西帝國ハ恒久不易ノ親交ヲ保持  
シ東洋ノ平和ヲ確立スル爲メ韓國ハ  
日本ニ信賴シ專ラ其助言ヲ受ケ内治  
外交ヲ改良スル事

第二條 大日本帝國政府ハ大韓國帝室ノ安  
全康寧ヲ保証スル事

第三條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ獨立  
及領土ヲ確實ニ保全スル事

第四條 第三國ノ侵害若クハ内亂ニ當リ大  
日本帝國政府ハ臨機必要ノ措置ヲ取  
ル事

以上各條ノ成立ニ由リテ大日本帝國政府ハ

第五條 此條約ニ違反スル 協約ヲ第三國ト

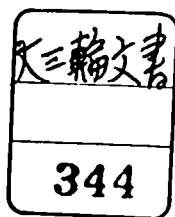
結ハザル事

第六條 未備ノ條項ハ追テ議定スル事

公使館

初案

光緒三十三年十二月九日





大三輪長兵衛



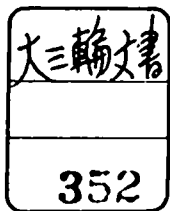
大韓帝國外部大臣은大日本帝國代表者外安商  
去年左開案件을議定한事

一日韓兩國國際上의障礙을嚴重히措處한情誼  
을完全히疏通한事

一東亞大局平和의關한去年萬一時變의際當한이년日  
韓兩國의誠實한友誼互互相提携한去年安寧秩  
序을永久히維持한事

一未備細目은外部大臣과日本國代表者間의隨機  
妥定한事

大  
三  
孫  
長  
無  
漸  
停  
必  
見  
去



二月十四日

書

朱家大子

# 議定書 概要

オーストリア帝國ニ恒久不異ノ親

交ヲ保持シ東洋ノ平和ヲ確立ス

カチ神國ハ其ノ信託シテ其ノ時

至リ東洋ノ内情が交リ改良スル

オーストリア帝國は其ノ神國

帝出ノ安全ヲ守リテ其ノ時

オーストリア帝國は其ノ神國

帝國ハ其ノ神國ハ其ノ神國

又事」

大正五年。日本。信。其。由。記。あり

大正。五年。四月。二十。日。押。安。ノ。指

多。少。ノ。年」

大正。五年。四月。二十。日。押。安。ノ。指

同。下。信。入。サ。レ。年」

大正。五年。四月。二十。日。押。安。ノ。指

又事」

大正。五年。四月。二十。日。押。安。ノ。指

大正。五年。四月。二十。日。押。安。ノ。指

大正。五年。四月。二十。日。押。安。ノ。指

大正。五年。四月。二十。日。押。安。ノ。指

こころほ、神所へまかす

きしとくし、わきまを

成夜に、公使に

あつたふら、大に

あつたふら、大に

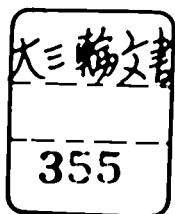
二月十四日

あつたふら

大孫長吉

光緒二十七年二月  
別途議定書

寫





大三輪長兵衛



# 議定書

一大日本政府也現今其國土內川  
流寓立大韓國亡命者是斷行  
措置言是快諾也其重者也  
竄配于臺灣島僻之地也東  
縛其自由也其餘也從輕重  
也即大韓政府意見是徵也  
後此是措處也

右議定言是証據也外本文武  
張是作成也其是也大韓  
王政府也保為也其是也大  
日本政府也保為也

三十七年一月五日

劉我來書  
上使館記事  
按入

大三輪文書

356

之石室山房

書畫記

# 譯言書

大日本政府、欲其其土内、  
流寓之民、大韓王立政府  
對之處分ヲ決定スルヲ快諾  
シ其重キ者ハ之ヲ臺灣<sup>島</sup>僻隅  
ノ地ニ配シテ其自由ヲ束縛シ  
以下至輕重、皆ハ大韓王政府  
ノ意見ヲ徴シテ之ヲ處分スル  
事

右譯言ニシテ其土内、大韓王立政府  
作成之其其通ハ大韓王政府ニ係  
其其通ハ大日本政府之ヲ係スル  
者也

壬戌年正月十日  
書類入

帝國政府ハ如何に場合ニ於テ

其國土ヨリ流寓スル邦國亡命ト

シ他國ナルヲ擔保シ且ツ又

其難重ニ從ヒテ之ヲ救フナリ

所ニ其重ナルハ邊境偶地ニ  
寡

能ク其自由ヲ束縛スル也

## 議定書

大日本政府ハ現今其國土内ニ流寓スル所ノ  
大韓國亡命者ニ對シ處分ヲ決行スルヲ  
快諾シ其重キ者ハ之ヲ臺灣島僻隅ノ地ニ  
竄配シテ其自由ヲ束縛シ以下其輕重ニ從ヒ  
大韓國政府ノ意見ヲ徵シテ之ヲ處分スル事  
右議定シタル証トシテ本書貳通ヲ作成シ其壹通ハ  
大韓國政府ニ保留シ其壹通ハ大日本政府之レヲ  
保留スル者也

大韓帝國代表者外安南  
支那左開事件은 豫言之한事

一 日韓支<sub>나</sub>係上에 障得은 重要의 措置支<sub>나</sub>  
情勢은 完全에 流通한事

一 東亞大和平에 關支<sub>나</sub>支<sub>나</sub>一時變의 豫言  
支<sub>나</sub>日韓支<sub>나</sub>의 豫言은 豫言은 互相控據  
支<sub>나</sub>支<sub>나</sub>秩序은 永久에 維持한事

一 未後細目은 外務大臣 外日本支<sub>나</sub>代表者間  
에 隨樣安定한事

安寧秩序은 永久에 維持한事

一 未後細目은 外務大臣 外日本代表者間  
隨樣安定한事

支<sub>나</sub>代表者ト

事

支<sub>나</sub>支<sub>나</sub> 措置シテ

支<sub>나</sub>支<sub>나</sub> 豫言シテ

互相控據シテ



# 議定書

大韓帝室和親大臣ハ大日本帝室代表者ト  
妥協シテ左開案件ヲ議定スル事――

一 日韓両帝室ノ係上ノ障碍ヲ盡重ニ排除シテ  
情誼ヲ完全ニ疏通スル事――

一 東亞大局ヲ平和ニ圖シテ第一時要ニ協定スルハ  
日韓両帝室ノ利益ナル情誼ヲ互相提携シテ  
治安秩序ヲ永久ニ維持スル事――

一 末級細目ハ和親大臣ト日本代表者間ニ  
随様妥定スル事――

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	日韓同盟議定書原案逐次五種 公使館案 大三輪案 妥定案

分 類	
番 号	
号	65-73

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

自  
以  
年  
十  
二  
月  
渡  
時  
至  
正  
法  
復  
秘  
密  
文  
書

必要方

大三歸文書

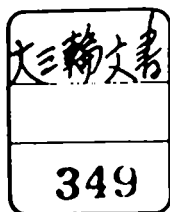
350

大  
之  
備

公使館

初案

辛巳年  
正月  
初一日



公使銀案

木平論案

安定案

日韓同盟議定書原案逐次五種

明治三十四年十二月九日 始

明治三十七年二月九日 署所結了

第

案

(公使館初案)

以江上王軍士所立之案  
其案起于前案

議定書

大韓帝國外務大臣ハ大日本帝國代表者ト  
妥商シテ左開案件ヲ議定スル事

一日韓軍至々降上ノ障礙ヲ最重ニ撤廢  
シテ情誼ヲ完全ニ疏通スル事

一東亞大局平和ニ関シテ第一時變ニ際南  
スレハ日韓両軍力減縮ナル情誼ヲ互相提  
携シテ治安秩序ヲ永久ニ維持スル事  
一未備細目ハ外務大臣ト日本代表者間

随機安定スル事



# 策

其書（大正）

（昭和）

第一 日韓同盟ノ基礎ニ成ルル事項

第一 大韓帝國ノ獨立ヲ永世ニ保全スルヲ

目的トシテ日韓兩國帝國主義ノ同盟ヲ要スル事

第二 日韓兩國帝國主義ノ防備共ニ目的ヲ以テ

必要ナル事

第三 日韓兩國帝國主義ノ經濟共通ノ目的ヲ以テ

同盟ヲ要スル事

第四 大日本帝國主義ノ大韓帝國ノ獨立ヲ扶植シ

大韓帝國皇室ノ永世安寧隆盛ヲ圖謀

大事業

第五 東三條ノ目的又達スル爲メ大韓帝國ニ  
自ラ陸海軍備ヲ擴張スルノ外必要ノ  
境遇ニ於テハ大日本帝國ニ其兵力ヲ以テ  
大韓帝國ノ防備ニ任スル事

第六 東三條ノ目的ヲ遂行スル力爲メ大日本  
帝國ハ必要ノ資金ヲ大韓帝國ニ供  
與スル事

第七 經濟共通ニ伴フ交通機關ノ完備ハ  
日韓支帝國共同ノ方法ヲ設ケ此ヲ

實行スル事

別途條項

一 大日本帝國政府ハ現今其主土内、流寓  
スル所ノ大韓帝國亡命者、對シ處分ヲ  
決定スルヲ決諾シ其重キ者ハ之ヲ臺  
灣島僻隅ノ地ニ安置シテ其自由ヲ束縛  
シ以下其輕重ニ從ヒ大韓帝國政府ノ  
意見ヲ徵シテ之ヲ處分スル事

# 第三案

(公使館再案)

明治二十七年二月十日

## 議定書

第一条 友邦主權恒久不易ノ親交ヲ保持  
シ東洋ノ平和ヲ確立スル爲メ神聖ニ  
日本、信賴シ專ラ其助言ヲ受ケ内治  
外交ヲ改良スル事

第二条 大日本帝國政府ハ大韓帝國皇室  
ノ安全康寧ヲ保証スル事

第三条 大日本帝國政府ハ大韓帝國主權  
及領土ヲ確實ニ保全スル事

第四条 第三国ノ侵害若クハ内亂ニ當リ

大日本帝國政府ハ臨機必要ノ措置ヲ

取ル事

第五条 此條約ニ違反スル協約ヲ才ニ五ト

結ハサル事

第六条 未備ノ條項ニ追テ議定スル事

第四案

(修正案)

明治三十七年二月十七日

議定書

才一条 日韓両帝王ハ恒久不易ノ親交ヲ保  
持シ東洋ノ平和ヲ確立スル爲メ大韓帝王  
ハ大日本帝王政府ヲ確信シ施政改善ヲ圖シ  
大日本帝王政府ノ忠告及助力ヲ用ユル事  
才二条 大日本帝王政府ハ大韓帝王皇室  
安全康寧ナラシムル事  
才三条 大日本帝王政府ハ大韓帝王ノ獨立及  
領土ヲ確實ニ保全スル事

才四条 才之五ノ侵害者ハ内亂ノ苗リ大日本  
帝國政府ハ臨機必要ノ措置ヲ取り軍路上  
必要ノ地点ヲ隨機收用スルヲ得ル事  
才五条 此條約ニ違反スル悞約ヲ才之五ニ結  
ハサル事

才六条 未備ノ條項ハ追テ議定スル事

# 第五案

(新協定書)

大日本帝國政府と大韓帝國政府との協定書

## 議定書

大日本帝國皇帝陛下、特命全權公使林  
權助及大韓帝國皇帝陛下、特命全權公使陸  
署理陸軍參將李址鎔、各相商し委任し  
受ける條項を協定す

第一条 日韓両帝國の間、恒久的不易の親交を  
保持し、東洋の平和を確立スル爲メ、大韓帝  
國、大日本帝國政府の確信、施設、改  
善、關し、其忠告を答ル、事、不



第二章 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ皇室  
ヲ確實ニ保護シ以テ安全康寧ナク  
シムル事

第三章 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ君主  
及領土保全ヲ確實ニ保證スル事

第四章 第三國ハ侵害シヨリ免ルハ内亂ヲ  
爲メ大韓帝國ノ皇室ノ安寧或ハ領土ヲ

保全シ危險ナル場合ハ大日本帝國政府ハ

速ニ臨機必要ノ措置ヲ取ルベシ而レテ大韓

帝國政府ハ右大日本帝國政府ノ行動ヲ容易

ナラシムル爲メ便宜ヲ興フル事

大日本帝國政府ハ前項ノ目的ヲ達スル爲メ  
軍略上必要ノ地点ヲ臨機収用スル丁ヲ得ル  
事

第五條 兩國政府ハ相互ノ承諾ヲ經スレテ  
後來本協約ノ趣意ニ違背スヘキ協約ヲ

第三國トノ間 訂立スルヲ得サル事

第六條 本協約ニ關聯スル未悉ノ細條ハ大  
日本帝國代表者ト大韓帝國外部大臣  
トノ間ニ臨時協定スル事

明治三十七年二月二十二日

特命金權公使 林權助

光武癸未二月二十二日

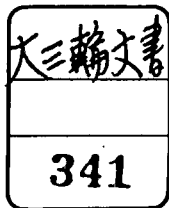
外部大臣臨時署理木下 鎔

名称	大三輪長兵衛文書
標題	日韓同盟ノ基礎ト成ル可キ 条件等

分類 番号	
	66-1

登録 番号	
----------	--

日韓同盟基礎成立の条件



已爲締約各國에對호야嚴正中立之聲明호야尚未歸  
正호리此條約호는今日果諾則各友邦호는欺호리호는  
況永世獨立호는圖謀호는國家의基礎에關호는事件  
이야輕率호는不能議論호는云云

添附條項

大日本는 如何호境遇이라도 現今大日本에  
流寓호大韓國亡命者를 任用하니 호호를 盟  
誓호호뿐더러 推道를 設호고 談亡命者를 措  
處호호모조로 大韓國에 滿足호를 與호事

日韓同盟ノ基礎ト

成ルベキ條項

第一 東洋三國ノ保全ヲ

目的トシテ日韓ノ同盟

ヲ要スル事

第二 日韓兩國ノ國防

上ノ目的ヲ以テ同盟ヲ

要スル事

第三 日韓兩國ノ經濟

共通ノ目的ヲ以テ同盟ヲ

要スル事



第四 日本、韓國、獨  
立ヲ扶植シ韓國亭  
室ノ安寧、繁榮ヲ計  
スル事

第五 日本ハ如何ニ場合  
ニ於テモ現今日本ニ流寓  
セル亡命者ヲ使用セリ  
ルヲ批言ヒ進メルニ便法  
ヲ設テ該亡命者ヲ處  
措シテ成ルヲ韓廷ニ滿  
足スル事

第六 日本ニ乘ノ事  
目的  
スルカ爲メ韓廷自ラ陸海

軍ノ軍備ヲ擴張ス  
外必要ノ場合ニ於テハ  
日本ハ其兵力ヲ以テ精  
兵ノ防備ニ任スル事

第七 第三條ノ目的ヲ  
遂行スル為メ日本ハ隨  
時必要ノ資金ヲ<sup>韓國に</sup>借入  
スル事

第八 經濟共通ノ目的ニ  
伴フ交通機關ノ整備  
ハ日韓兩國共同ノ方  
法ヲ設ケ之ヲ<sup>實行スル</sup>定備ス  
ル事

右

# 議定書

第一條 大韓帝國ハ大日本帝國ヲ  
確信シ施政改善ニ関シ大日本  
帝國政府ノ忠告及助カヲ用ユル  
事

第二條 大日本帝國政府ハ大韓國帝  
室ノ安全康寧ナラシムル事

第三條 大日本帝國政府ハ大韓帝國ノ  
獨立及領土ヲ確實ニ保全スル事

第四條 第三國ノ侵害若クハ内亂ニ當リ  
大日本帝國ハ臨機必要ノ措置ヲ取リ  
軍略上必要ノ地點ヲ隨機収用スルヲ  
得ル事

第五條 此條約ニ違反スル協約ヲ第三  
國ト結ハサル事

第六條 未備ノ條項ハ追テ議定スル  
事

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	才一,才二圓外相請求案等

分 類 番 号	
	66-2

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--

十一回ムネ外相訪来衆

廿二回ムネ外相訪来衆

三十三回ムネ外相訪来衆



大政市西區西長振南通平目

女三輪長兵衛



一 政府ヨリ大三輪  
ニ付年々興ツル

一 大三輪ニテ為サレ  
ヘキ事項ヲ書起  
シ以テ指定スル

一 貸付金類ノ取扱  
限度ニ定ム

一 送金費ノ限度  
シテハ限度外支

セラ自由ナリ

一 指定スル事件

中名事項、年知  
毎、之、計、入  
貸付金額、額、

是、元、

之、外、国、指、定、元、  
事項、之、内、容、上、

成、効、元、給、付、元、

之、元、大、三、年、

公、使、之、振、込、元、

時、公、使、之、元、内、

内、之、通、算、元、



の太王親王無きなり

元岩事俱の内意に

成効も上公然

手続ハ公使の手

を往ル

元大三親王が嘱託を

以て事項の成効

を以て協会の政務に

相違の待遇を

を以て



才一 林公使ノ奥

係ヲ隠メ殿

庄ニ置ク

才一 林公使ノ

訓令ヲ懷定

才一

才一 政務局長

才一 令ノ旨トナ訓

才一 令ノ旨シテ仰

才一 置ク

才一 運動費支

才一 出ニ對スル条

左明シク細

大置ク

力込 運動費支

出ニ對スル条

件 の定ム

天五 貸付金

額 シ正ル

亦六 臨時貸

付金ニ對スル

權限及方法

大田若協定し

置し

方七 總理大臣

外務大臣ノ寛

書ヲ徴シ置

ニ

○ 金銭と関する

第一 進物費五万円

一 是、陛下御幸望方格要人、各  
有旨、贈呈、ある

一 買入代價、一、受取証、外務省、送、  
買入物、以上は、所用、中、以上は、  
以上は、

一 物、大、三、種、自、選、擇、購、入、  
物、右、左、各、品、名、を、示、す

第二 運輸費五万円

是、神、山、行、子、事、業、手、進、行、中

必要、生、る、中、大、三、種、一、個、の、權、限、内

に、行、自、由、主、張、し、得、る、為、に、要、す、財

一、部、り、以、て、預、け、主、に、し、る、た、る、五、出

に、以、て、一、に、公、使、に、報、告、す、

第三 買収費三万乃至五万円

五、万、円、以、上、を、要、す、費、用、一、に、公、使、に、協

議、し、公、使、に、既、に、出、す、る、交、り

金貨の国元件

一、運物費五千金

一、是階下、修、白里、を、其、乳

王、而、妃、殿、下、帝、室、名、極、要、

今、各、大、に、等、贈、口、至、り、

一、買、公、價、一、受、領、所、外、幣

者、送、付、せ、り

一、買、物、品、公、使、殿、用、品、と、し、

公、使、殿、に、面、々、送、付、

一、物、品、公、使、殿、自、ら、選、擇

購、入、し、て、依、り、石、金、貨、に、

出、金、を、受、け、取、る、事

一、方、二、運、動、費、五、万、円

是、は、特、に、於、事、業、者、の

運、送、中、に、要、生、じ、る、時

大、に、輸、一、個、に、限、度、に、於、て

自、由、に、出、入、し、得、る、為、に、急、に

之、銀、貨、を、取、引、金、に、し、て

之、を、出、給、付、し、公、使、に

報、告、せ、る、事

一、三、年、の、事、費、三、万、五、千、圓

一、三、年、の、事、費、三、万、五、千、圓

一、公、使、に、協、同、し、公

使、に、御、出、金、の、事

金陵國書件

之進納費五千金

是、陛下白皇太子黃親王及妃  
不名皇后名提要、人等、  
贈呈、のみなり

買入代價、つゝ、受領証外幣  
者、送る

買入、つゝ、使雇用品、  
出使館内、所、生事

物、大、輪、自、選擇、購、  
依、右、店、買、や、食、料、に、受、取、

之運部費五千金

是、據、王、に、於、ラ、事、業、品、の、進  
引、中、要、ラ、生、に、先、中、大、之、輪  
個、権、限、内、に、於、ラ、自、由、に、出  
し、得、ル、る、事、  
分、銀、行、を、以、  
預、金、に、な、す、  
つゝ、出、し、  
つゝ、出、し、  
つゝ、出、し、

之、買、入、費、三、万、金、

万、田、川、五、万、田、  
一、公、使、  
ラ、出、

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	日韓同盟草案 大三輪案 明治三十六年十二月二十七日起草

分 類 番 号	
	66-3

国立国会図書館

登録番号	
------	--



三十五年三月二十七日 東京 於多姆

# 日韓同盟草案

市中 慶上七 生梅 活多 三手  
大三輪 景小 唱フ

三十八年十二月二十日

大坂市西區西長堀南通四丁目

大三輪長兵衛

日韓同盟草案

# 第二案（大韓案）

明治三十七年一月廿七日

日韓同盟ノ基礎ト成ルヘキ條項

第一 大韓帝國ノ獨立ヲ永世ニ保全スルヲ目的トシテ日韓両帝國ノ同盟ヲ要スル事

第二 日韓両帝國防備上ノ目的ヲ以テ同盟ヲ要スル事

第三 日韓両帝國經濟共通ノ目的ヲ以テ同盟ヲ要スル事

第四 大日本帝國ハ大韓帝國ノ獨立ヲ扶植シ大韓帝國皇室ノ永世安寧隆盛ヲ圖謀

## スル事

第五才五条ノ目的ヲ達スル為メ大倭帝國  
自ラ陸海軍備ヲ擴張スルノ外必要ノ  
境遇ニ於テハ大日本帝國ハ其兵力ヲ以テ  
大倭帝國玉ノ防備ニ任スル事

第六才三条ノ目的ヲ遂行スルカ為メ大日本帝  
國ハ必要ノ資金ヲ大倭帝國玉ニ供給  
スル事

第七經濟共通ニ伴フ交通機關ノ完備ハ日  
韓兩帝國共同ノ方法ヲ設ケ是ヲ實現

行スル事

別途條項

一大日本帝國政府、現今其國土内ニ流寓  
スル所ノ大韓王亡命者ニ對シ處分ヲ決  
行スルヲ快諾シ其重キ者ハ之ヲ臺  
灣島僻隅ノ地ニ竄配シテ其自由ヲ束  
縛シ以下其輕重ニ從ヒ大韓帝國政府  
ノ意見ヲ徵シテ之ヲ處分スル事

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	日韓同盟草稿

分 類 番 号	
	66-4

国立国会図書館

登録番号	
------	--

日  
韓  
同  
盟  
基  
礎

大韓文庫

353



韓日保全ノ基礎ト成ルヘキ條項

第一大韓國ノ保全ヲ目的トシテ韓日ノ同盟ヲ要スル事

第二韓日兩國防備上ノ目的ヲ以テ同盟ヲ要スル事  
第三韓日兩國經濟共通ノ目的ヲ以テ同盟ヲ要スル事

第四大日本ハ大韓國ノ獨立ヲ扶植シ大韓國皇室ノ永世安寧繁盛ヲ圖謀スル事

第五大日本ハ如何ナル境遇ニ於テモ現今大日本ニ流寓スル韓國亡命者ヲ任用セサルヲ盟誓シ進ミテハ便法ヲ設ケ亡命者ヲ措處シテ成ルヘシ大韓國ニ満足ヲ與フル事

第六 第二條ノ目的ヲ達スルカ爲メ大韓國自ラ陸海  
軍ノ軍備ヲ擴張スルノ外必要ノ境遇ニ於テハ  
日本ハ其兵力ヲ以テ大韓國ノ防備ニ任ル事  
第七 第三條ノ目的ヲ遂行スルカ爲メ大日本ハ隨時  
必要ノ資金ヲ大韓國ニ供給スル事

第八 經濟共通ニ伴フ交通機關ノ完備ハ韓日兩國  
共同ノ方法ヲ設ケ此ヲ實行スル事

詔曰向日以李容翊事頻煩相持政本之地  
及各部事務之廢閣至於多日極涉未穩亦  
無如是父象矣有姑先處分者語未必究其宜  
有諒悉者而今度會纔過又或有風聞之申提  
云夫以卿老成體國不應乍止旋作汲汲如失  
有若不屬此不足以處置一李容翊朕以為  
萬萬不可卿其更加深諒事遣史官傳諭  
于議政

詔曰纔諭于議政矣初不必至於申復只存事

體而公論自可見矣亦既有荷日虔分其曰  
姑先其意庶有以諒會而又欲以此為煩朕  
未知其可矣卿等其諒之事遣史官傳諭于  
領敦寧議長

名 称	大 三 輪 長 兵 衛 文 書
標 題	大 韓 国 / 永 世 独 立 ヲ 保 全 シ 皇 室 / 安 寧 隆 盛 ヲ 回 謀 ス ル / 基 礎 ト 成 ル 可 キ 條 項

分 類 番 号	
	66-5

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

昭和二十七年一月七日

初文韓文 控

大韓國ノ永世獨立ヲ保全シ

皇室ノ安寧隆盛ヲ圖謀スルノ

基礎ト成ル可キ條項

第一大韓國ノ獨立ヲ永世ニ保全スルヲ目的

トシテ韓日兩國ノ同盟ヲ要スル事

第二大韓日兩國防備上ノ目的ヲ以テ同盟ヲ

要スル事

第三韓日兩國經濟共通ノ目的ヲ以テ同盟ヲ

要スル事

第四大日本ハ大韓國ノ獨立ヲ扶植シ大韓國

皇室ノ永世安寧繁盛ヲ圖謀スル事

第五第二條ノ目的ヲ達スル為メ大韓國自ラ陸

海軍備ヲ擴張スルノ外必要ノ境遇ニ於テハ  
大日本ハ其兵力ヲ以テ大韓國ノ防備ニ  
任スル事

第六第三條ノ目的ヲ遂行スルカ為メ大日本ハ  
必要ノ資金ヲ大韓國ニ供給スル事

第七經濟共通ニ伴フ交通機關ノ完備ハ韓日  
兩國共同ノ方法ヲ設ケ此ヲ實行スル事

### 添附條項

大日本ハ如何ナル境遇ニ於テモ現今大日本ニ  
流寓セル大韓國亡命者ヲ任用セサルヲ盟誓シ  
進ミテハ便法ヲ設ケ談亡命者ヲ措處シテ  
成ル可ク大韓國ニ満足ヲ與フル事

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	南 詠 麟 氏 = 取次 セシメシ 写

分 類 番 号	
	66-6

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--



岡田環氏  
セシナシ  
正  
一

大三輪長兵衛

外臣以三年之前常國時

陛下以聖旨을奉承호야亡命者의

處置事는

**昭律草件을世帶常奉國**

~~內閣~~內閣의獻議호야死刑에處호기  
出不許호는故호

陛下刑外決處호는호는外臣의固  
法호證據호는此件의有호는이리

今番渡來時의外臣의內閣에更爲  
談辦호는호는亡命者는斬刑에處호기호

지리도

陛下聖意에滿足하시도록交涉되기를

十二月一日

受諾하시駐韓公使에게訓令을圖  
得하시外臣이神傳하고

陛下轉稟하시以合하시正掩曠日호

外外人에漏泄된故호는事를他人

이周旋하시云하시事差順成이면

幸莫幸於外臣之周旋이外臣

淺慮則似難必成하시外臣의奏

稟하시되호는元老大臣에게公使에게

命送하시外談辨하시면外臣이

擔當하시周旋하시此事의對面

中書省에서하시周旋하시

洞始水望

○<sup>先</sup>一<sup>次</sup>大<sup>韓</sup>帝<sup>國</sup>法<sup>府</sup>大<sup>臣</sup>官<sup>國</sup>校

府<sup>ノ</sup>確<sup>信</sup>し施<sup>政</sup>改<sup>善</sup>三<sup>國</sup>に

大<sup>韓</sup>帝<sup>國</sup>法<sup>府</sup>一<sup>忠</sup>告<sup>ノ</sup>事<sup>ニ</sup>關<sup>ス</sup>ル

忠<sup>告</sup>及<sup>ハ</sup>助<sup>力</sup>ヲ<sup>用</sup>フ<sup>ル</sup>事<sup>ニ</sup>關<sup>ス</sup>ル

○<sup>先</sup>一<sup>次</sup>大<sup>韓</sup>帝<sup>國</sup>法<sup>府</sup>大<sup>臣</sup>官<sup>國</sup>校

軍<sup>官</sup>上<sup>等</sup>必<sup>要</sup>ノ<sup>地</sup>點<sup>ニ</sup>隨<sup>テ</sup>據<sup>ス</sup>

使<sup>司</sup>事<sup>ノ</sup>一<sup>部</sup>ヲ<sup>用</sup>フ

又<sup>ハ</sup>用<sup>フ</sup>

大韓國山永世獨立之保全之

皇帝陛下之安寧隆盛之權利

之圖謀之條項之臚列之

外臣之冒病渡來之

不得承命陛下之

逐條奏達之皆正時機已迫之

不日蒙召垂聽千萬祈懇之

若不用外臣之獻策則大韓獨

外臣之危急之機

外臣之不忍坐視之皆正時機已

到韓之以待命閣下之皆正若

失今好機則似無東國之日矣

深遠洞燭之望之

筆不痛之皆正時機已迫之

外臣大之皆正時機已迫之

外臣大之皆正時機已迫之

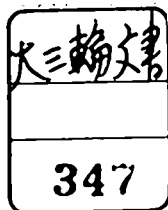
名 称	大 三 輪 長 兵 衛 文 書
標 題	官 内 府 契 約 草 案

分 類 番 号	
	66-7

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

官內有契此蓋





藏山運匠潤筆  
二月五日夜時

茲以

大律因

官內府贊務官山島詩解瀾  
水輪院劉總裁大江卓為高  
等願同官其年限俸給之額左  
用

一年限為兩之箇年但後限更為恨祿  
展限事

一俸給一年以日本債六千元給之

光武七年六月一日

宣海大臣署理尹定求

押印

備考

光武七年八月一日トナリ成リシニ更ニ六月一日トナリ

光武八年二月九日宣海大臣尹定求之御印アリ

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	上 奏 ㄱ 要 求 セ シ 案 文

分 類 番 号	
	66-8

登 録 番 号	
------------------	--

寶曆七年二月十日  
公銀上奏ノ要來セシ  
玉分氏記者  
除

大三翰文書
354

大  
三  
輪  
長  
兵  
衛

長兵衛風

陛下ノ寵眷以若世皇恩ノ優渥尤宵旰  
其勞分一二報也又期スルヤ久シ矣今也  
時局ノ切迫降ニ偶々

陛下ノ召命ヲ奉ニ感泣措ク能ハス倉皇  
病疴ヲ推シ旅装ヲ調ヘ醫員ヲ推乃所ヘ  
馳セテ

闕下ニ伏シ茲ニ龍顏ニ咫尺ナル人  
光榮ヲ得タルハ心竊カニ欣幸トスル所

恭<sup>ニ</sup>シ<sup>テ</sup>惟<sup>ル</sup>ニ時局ノ切迫<sup>ニ</sup>當<sup>リ</sup>大<sup>ニ</sup>

陛下<sup>ニ</sup>震<sup>シ</sup>襟<sup>ヲ</sup>惱<sup>マセ</sup>垂<sup>フ</sup>ヲ知<sup>ル</sup>喪<sup>ハ</sup>兵<sup>衛</sup>不<sup>レ</sup>

肖<sup>ト</sup>雅<sup>氏</sup>嘗<sup>テ</sup>

陛下<sup>ノ</sup>殊<sup>ニ</sup>遇<sup>ヲ</sup>膺<sup>ク</sup>ス豈<sup>ニ</sup>國家多<sup>ク</sup>事<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>

當<sup>ツ</sup>テ

陛下<sup>ヲ</sup>為<sup>メ</sup>鞠躬<sup>努</sup>力<sup>セ</sup>サ<sup>ラ</sup>シヤ

皇室<sup>ノ</sup>為<sup>メ</sup>特<sup>ニ</sup>命<sup>ヲ</sup>玉<sup>士</sup>ノ為<sup>メ</sup>微<sup>力</sup>ヲ揮<sup>フ</sup>テ

恪<sup>ニ</sup>勤<sup>ニ</sup>奉<sup>ル</sup>公<sup>教</sup>ヲ遵<sup>フ</sup>スサ<sup>ラ</sup>シ<sup>コ</sup>ツ<sup>テ</sup>擢<sup>フ</sup>幸<sup>ニ</sup>

陛下<sup>ニ</sup>臣<sup>ノ</sup>微<sup>衷</sup>ヲ察<sup>シ</sup>臣<sup>ノ</sup>進<sup>言</sup>ヲ容<sup>レ</sup>美<sup>ク</sup>

時局<sup>ニ</sup>處<sup>シ</sup>達<sup>ス</sup>策<sup>ナ</sup>ク且<sup>ツ</sup>事<sup>大</sup>小<sup>ト</sup>ナ<sup>ク</sup>



諮詢セラレ終ニ於テハ赤誠ヲ注キ奉答  
ス可シ

一日本政府ハ日韓友誼ノ交情ヲシテ  
進シテ一層密接ナラシムルノ緊切ナルヲ  
起見ニ苟クモ其障礙タルベキ亡命者  
ノ處分ヲ斷行スルニ決ス

一其處分法ハ彼等ノ重ナル者ヲ驅ツテ  
僻輒ノ一隅ニ配竄シ亦多彼等ヲシテ  
其行動ヲ自由ナラシメザル事

一是レ一ニ上聖慮ヲ靖シシ下國民ノ

感情ヲ融和シ永久ニ友帝國ノ和親ヲ  
保持セントノ意ニ外ナラス

一日本政府ハ專ラ韓國 皇室ヲ安全ト  
國土ノ保全トラ企圖シ永久ニ韓王ヲ  
獨立ヲレテ完全ナラシメントノ義舉ニ  
出テ百事右ノ方針ニ倣フテ其行動ヲ  
執リツ、アリ

一韓王ノ内政ハ漸ヲ逐クテ其改良ヲ欲  
スト雖モ其急遽ノ改革ハ却テ物情ヲ  
滋クシ紛擾ヲ醸シ易シ故ニ其方途ハ

充分穩和ノ手段ニ出テ苟クモ權勢ノ  
爭奪若クハ著シク民心ヲ衝動セサル的  
範圍ニ於テ漸次之ヲ遂行セラレシムヲ  
希望ス

一何レノ時何レノ世ヲ論セス權臣互ニ  
内ニ關クハ外侮ヲシテ策セシムルノ虞アリ  
況ンヤ國家多事ノ際ニ於テヲヤ故ニ  
陛下ハ閣臣ヲ督勵シ其一致奉公ノ途ヲ  
講セラレ他ヲシテ策スルノ隙ヲ作ラシメサル  
可ニ傾注ラレシムヲ仰望ス

一 中立問題ノ如キ未タ交戦ノ事實存セ  
ガルニ既ニ早ク其中立ヲ與國ニ通牒  
セラレタルカ如キハ外臣ヨリ見レハ少シク  
輕擧タルヲ免セス且以凝ニ列國之ニ  
回答ヲ轉ルニモヨ實際事変ニ當リ國  
際間何等ノ輕重ヲ爲スモニ非ズ之ヲ要  
スルニ

陛下ノ聰明ナル夙ニ韓國玉土ヲ奉リテ之レヲ  
永久ニ保全シ其獨立ノ基礎ヲ鞏固ナラ  
シムルヲニ深ク憂慮ヲ傾注セラルヲ知ル

是レ洵ニ千歳不易ノ良國是トス歟  
此ノ國是ニ則リ時局如何ニ發展スルモ  
陛下ハ他國ニ信賴スルノ念ヲ割断シ其ノ  
良國是ヲシテ終始一貫セラレンコヲ誠惶  
々々懇望ノ忱ニ比ヘス

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	覚書

分 類 番 号	
	66-9

国立国会図書館

登録番号	
------	--

才一 亡命者處分議定

才二 公使館案議定書之事

才三 同盟契約始末

才四 輔國大官ヲ招フ件

才五 東京之事

才六 上海之事

才七 景福宮之事

名 称	大三輪長兵衛文書
標 題	日韓議定書肉保新南 官報 及び写

分 類 番 号	
	66-103

国立国会図書館

登録 番号	
----------	--



朝鮮銀行設立の必要なるは、半

對清經濟上日清銀行設立の必要なるは、半  
朝鮮の一大經濟問題なりしが政府は、本國  
に急ぎ之が法案を提出するに決したることは  
本紙既報の如し、而して該法案の精意に基  
つては、其前に於ても尙審議中なるが、今又  
提出の次第と其大要とを聞くと、元來、日清  
貿易及び支那内地の該事業と關係するに  
て最も緊要なるは金融機關の設置にして、其  
國の如き風に半官半民制の銀行を設け、  
之に依て盛に北清地方に於ける經濟的開發  
の進歩を圖り、又た英國の如きも香港銀行  
の有力なる金融機關の後援に由て其内地  
の嶺山鐵道を計畫しつゝあるにも所あり、  
本に於ては未だ此種の機關なく、唯が日清  
貿易の爲めには正金銀行のありと雖も、  
是は單に純然たる商業銀行たるものなり、  
支那方面に於て特別の援助と爲るが如き事  
を爲さざるを以て、該國の經濟上我國は不  
不顧の間に他國に先だせらるゝ場合あり、  
されば完全なる金融機關の設置は、  
すべきの時に非ずとなし、切すとも、  
該法案を提出するにありたるが如き、  
而して其資本金は先づ一千五百萬圓とし、  
其營業は正金銀行の如く、  
とせず、支那内地の該事業と關係する  
る爲めに不動産を抵當とする長期の貸付に  
も營業しむるととし、  
就ては單に民間資本家のみの力に任せず、  
し難き事情あれば政府は補助の金を出し、  
し、尤も銀行補助の方針に基いて、  
の手段を採らるゝが、  
は臺灣銀行に於けるが如き、  
分を政府にて引受くるものなり、  
條項に就ては先づ大體、  
法に類似せしめて、  
該機關を設け、  
抗し得べき勢力を供たし、





(下)

對清經營として、自國內に留まる。我國に於ては事情然るれば内地製造業の進歩せざる鐵道金山等に要する機械、銅、鐵、之を海外の供給に俟たざるべからざるを以て、對清資金の全部は是れで之を充てに放出して復た内地に餘澤を蒙らざるを得ず、輕微なる動機にも金融界の波亂を惹起すの虞ある今日、政府は之に對する成竹あるや否や國民も亦之に應ずるの用意あるや否や。

若し露清銀行も、香港上海銀行も一銀行たるに過ぎず、均しく發行たる我日清銀行と雖も彼が如き活動を爲す何の難さの之れやらんと爲さば是れ大なる謬見なり。露清銀行の如きは大蔵大臣直轄の下に在りて其營業の大方針は總て露清の胸底に在り、露清東方經營として國を千年の長計を畫むを議會に諮るの要なく之を國民に問ふも須す、永遠の利益となれば眼前の損失は毫末意に介せざるもの、如く、外債なり、捐税なり異常手段を斷行して、惜業もなく萬千の資を投ずる露清銀行の活動は自由自在奇藝雄大ならざるも、之を有るべからざるも實に東亞金融界の快麗歌と指稱せざるも偶然ならざる大膽にして、巨入を露清會と實力薄弱にして而も目前の利益に汲みたる國民とは大事を爲すに不適當なるもの、理同日に論ずべからず、又吾輩の吾輩の東洋に雄飛する所以は銀行其れ自らの力の方の然らしむるにあらずして、其實は英國の大資本家の控ゆるありて、有利なるべき大事業には直に巨万の資を供給するに外ならず、銀行は是るが媒介に止まるのみ。

對清經營は素より今日の急なり、吾輩も、吾輩は露清社長、前命の見込みも、さる計畫には斷じて賛同する能はず、失れ日清銀行は政府當局者の言ふが如く、果して正金銀行と變化するの弊に陥るや否やに就ては之も他日に論ぶ、吾輩は其創設及び其前途に當る困難を過ぐ取て世の讀者に問ふ。

<p>明治三十五年八月十五日</p> <p>第五千五百廿四號</p> <p>紀元二千五百六十三年 （金曜日） 舊曆壬寅七月十二日 庚午</p>	<p>本紙發刊例目</p> <p>價目隨日大張月及 大隈株式取引所受渡日休刊</p>
<p>本紙 定價 一月 壹圓 三月 貳圓 半年 肆圓 全年 捌圓</p> <p>外埠寄費另加 郵資</p>	<p>廣告料 （五字活字二十 字請一行二回） 金拾伍元</p> <p>發行兼印刷人 野口友七</p> <p>編輯人 野口松松</p>
<p>大阪市東區北堀丁八百十三番屋敷 （西北角六番町西裏入） 發行所 欣報社</p>	

遠距離電話に加入し居るものゝ數なるが米比に於ける總ての電話架設者の數の二百二十に對し、八千七百十七人なりと



# 大 阪 株 式 公 司 公 定 相 場

## 公定相場

昨日  
本場

●日本紡績株  
●合同紡績株  
●尼崎紡績株  
●大阪米穀株  
●大阪三品株  
●北濱銀行株  
●大阪商船株  
●西成鐵道株  
●阪神電氣株  
●京都電氣株  
●同新株  
●伊豫鐵道株  
●阪西鐵道株  
●京都鐵道株  
●中國鐵道株  
●七尾鐵道株  
●參宮鐵道株  
●關西鐵道株  
●山陽鐵道株  
●九州鐵道株  
●九州第二新株  
●九州第三新株

●大阪市築港公債(六分利附)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●長崎市港灣改良公債  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●九月限 出索不申  
●大阪三品取引株 額面五拾圓  
●八月限 八拾五圓九拾錢●五拾錢  
●九月限 八拾六圓四拾錢●參拾錢  
●六圓也大引

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●阪神電氣鐵道株 額面五拾圓  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●德島鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●京都電氣鐵道(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●京都電氣新株(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●紀和鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●南和鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●奈良鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●播但鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●伊豫鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●阪神鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●南海鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●西成鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●中國鐵道會社(廿貳圓拂込)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●七尾鐵道優先株(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●參宮鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 八拾五圓九拾錢●壹圓也八  
●九月限 八拾六圓四拾錢●參拾錢  
●大引

●九州第二新株(廿五圓拂込)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●九州第三新株(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●九州鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 五拾四圓四拾錢●參拾錢  
●九月限 五拾四圓八拾五錢九拾錢  
●大引

## 前場立會之部

●金祿公債(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●舊公債(四拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●整理公債(額面百圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●海軍公債(額面百圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●軍事公債(額面百圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●大藏省證券  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●合同紡績會社(額面貳拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●尼崎紡績會社(額面廿五圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●金市製鐵會社(廿五圓拂込)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●京都織物會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●當取引所株式(額面五拾圓)  
●八月限 百四拾五圓也五拾錢●參  
●九月限 百四拾四圓五拾錢七拾錢  
●大引

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●日本郵船會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●大阪商船會社(額面廿五圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●大阪商船會社(額面廿五圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●播但鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●伊豫鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●阪神鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●南海鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●西成鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●紀和鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●南和鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●奈良鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●播但鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●伊豫鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●阪神鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●南海鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●西成鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●中國鐵道會社(廿貳圓拂込)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●七尾鐵道優先株(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●參宮鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 八拾五圓九拾錢●壹圓也八  
●九月限 八拾六圓四拾錢●參拾錢  
●大引

●九州第二新株(廿五圓拂込)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●九州第三新株(額面五拾圓)  
●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申  
●九州鐵道會社(額面五拾圓)  
●八月限 五拾四圓四拾錢●參拾錢  
●九月限 五拾四圓八拾五錢九拾錢  
●大引

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●八月限 出索不申  
●九月限 出索不申

●直取引（午前）

●關西鐵道會社	●關西鐵道會社
四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢	四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢
四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢	四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢
●京義鐵道會社	●京義鐵道會社
貳拾圓五拾錢五拾錢	貳拾圓五拾錢五拾錢
●山陽鐵道會社	●山陽鐵道會社
●阪神鐵道會社	●阪神鐵道會社
貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢	貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢
●大阪商船會社	●大阪商船會社
●軍部公債	●軍部公債

●現物賣買の紹介

從來株式市場に於て日常營業に資するものは、  
●部類の現物に於て甲の買客も乙の買客も各々  
●買店に於て容易に其取引を結了し得るものと  
●（出合）を以て現物の買取に其相手を求め或は  
●段の折合を附する爲め往々にして仲買店を以て不便  
●を感ずる場合有之に因るが故に今日同社に  
●本紙に現物賣買の紹介欄を設けて仲買店が日々  
●注文を受ける處の各種現物の賣買物と其の  
●市況に於ける取引の明瞭なる一舉一動を仲買  
●店と買客との取引の便に資するべく  
●（注意）本欄に於て廣告的の趣意に  
●非ざれば最も緊急を要する且つ最  
●も出合の整ふに近かるべきものを  
●一日一軒の賣物五種以下  
●仲買店に付 五種以下  
●買物五種以下 一筆竹注  
●文一、断然謝絶可仕候

中央セメント 濱永	南和鐵道株 阪崎
東海鐵道株 梅原	興業銀行株 梅原
記名軍部債 梅原	帝國銀行株 梅原
正金新舊株 梅原	起業銀行株 阪部
大阪紡績株 淺田	天滿織物株 淺田
福徳鐵道株 淺田	臺灣銀行株 小島
七尾鐵道株 小島	大阪紡績株 小島
アルカリ株 小島	大阪セメント 小島
大阪商船株 島德	大阪電燈株 島德
起業銀行株 島德	川崎造船株 島德
日本海上株 上田	酒造火災株 上田
大阪瓦斯株 上田	阪神電氣株 上田
大阪製紙株 島德	大阪製紙株 島德
近江先株 帶谷	大阪水産株 帶谷
大阪製水株 帶谷	大阪水産株 帶谷
京金鐵道株 阪部	南和鐵道株 上田

●關西鐵道會社	●關西鐵道會社
四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢	四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢
四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢	四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢
●京義鐵道會社	●京義鐵道會社
貳拾圓五拾錢五拾錢	貳拾圓五拾錢五拾錢
●山陽鐵道會社	●山陽鐵道會社
●阪神鐵道會社	●阪神鐵道會社
貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢	貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢
●大阪商船會社	●大阪商船會社
●軍部公債	●軍部公債

●關西鐵道會社	●關西鐵道會社
四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢	四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢
四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢	四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢
●京義鐵道會社	●京義鐵道會社
貳拾圓五拾錢五拾錢	貳拾圓五拾錢五拾錢
●山陽鐵道會社	●山陽鐵道會社
●阪神鐵道會社	●阪神鐵道會社
貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢	貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢
●大阪商船會社	●大阪商船會社
●軍部公債	●軍部公債

中央セメント 濱永	南和鐵道株 阪崎
東海鐵道株 梅原	興業銀行株 梅原
記名軍部債 梅原	帝國銀行株 梅原
正金新舊株 梅原	起業銀行株 阪部
大阪紡績株 淺田	天滿織物株 淺田
福徳鐵道株 淺田	臺灣銀行株 小島
七尾鐵道株 小島	大阪紡績株 小島
アルカリ株 小島	大阪セメント 小島
大阪商船株 島德	大阪電燈株 島德
起業銀行株 島德	川崎造船株 島德
日本海上株 上田	酒造火災株 上田
大阪瓦斯株 上田	阪神電氣株 上田
大阪製紙株 島德	大阪製紙株 島德
近江先株 帶谷	大阪水産株 帶谷
大阪製水株 帶谷	大阪水産株 帶谷
京金鐵道株 阪部	南和鐵道株 上田

●關西鐵道會社	●關西鐵道會社
四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢	四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢
四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢	四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢
●京義鐵道會社	●京義鐵道會社
貳拾圓五拾錢五拾錢	貳拾圓五拾錢五拾錢
●山陽鐵道會社	●山陽鐵道會社
●阪神鐵道會社	●阪神鐵道會社
貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢	貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢
●大阪商船會社	●大阪商船會社
●軍部公債	●軍部公債

●關西鐵道會社	●關西鐵道會社
四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢	四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢
四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢	四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢
●京義鐵道會社	●京義鐵道會社
貳拾圓五拾錢五拾錢	貳拾圓五拾錢五拾錢
●山陽鐵道會社	●山陽鐵道會社
●阪神鐵道會社	●阪神鐵道會社
貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢	貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢
●大阪商船會社	●大阪商船會社
●軍部公債	●軍部公債

中央セメント 濱永	南和鐵道株 阪崎
東海鐵道株 梅原	興業銀行株 梅原
記名軍部債 梅原	帝國銀行株 梅原
正金新舊株 梅原	起業銀行株 阪部
大阪紡績株 淺田	天滿織物株 淺田
福徳鐵道株 淺田	臺灣銀行株 小島
七尾鐵道株 小島	大阪紡績株 小島
アルカリ株 小島	大阪セメント 小島
大阪商船株 島德	大阪電燈株 島德
起業銀行株 島德	川崎造船株 島德
日本海上株 上田	酒造火災株 上田
大阪瓦斯株 上田	阪神電氣株 上田
大阪製紙株 島德	大阪製紙株 島德
近江先株 帶谷	大阪水産株 帶谷
大阪製水株 帶谷	大阪水産株 帶谷
京金鐵道株 阪部	南和鐵道株 上田

●關西鐵道會社	●關西鐵道會社
四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢	四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢
四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢	四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢
●京義鐵道會社	●京義鐵道會社
貳拾圓五拾錢五拾錢	貳拾圓五拾錢五拾錢
●山陽鐵道會社	●山陽鐵道會社
●阪神鐵道會社	●阪神鐵道會社
貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢	貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢
●大阪商船會社	●大阪商船會社
●軍部公債	●軍部公債

●關西鐵道會社	●關西鐵道會社
四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢	四拾圓六拾錢四拾五錢參拾錢貳拾錢
四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢	四拾圓五拾錢貳拾錢壹拾錢
●京義鐵道會社	●京義鐵道會社
貳拾圓五拾錢五拾錢	貳拾圓五拾錢五拾錢
●山陽鐵道會社	●山陽鐵道會社
●阪神鐵道會社	●阪神鐵道會社
貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢	貳拾圓貳拾錢拾錢貳拾錢
●大阪商船會社	●大阪商船會社
●軍部公債	●軍部公債

中央セメント 濱永	南和鐵道株 阪崎
東海鐵道株 梅原	興業銀行株 梅原
記名軍部債 梅原	帝國銀行株 梅原
正金新舊株 梅原	起業銀行株 阪部
大阪紡績株 淺田	天滿織物株 淺田
福徳鐵道株 淺田	臺灣銀行株 小島
七尾鐵道株 小島	大阪紡績株 小島
アルカリ株 小島	大阪セメント 小島
大阪商船株 島德	大阪電燈株 島德
起業銀行株 島德	川崎造船株 島德
日本海上株 上田	酒造火災株 上田
大阪瓦斯株 上田	阪神電氣株 上田
大阪製紙株 島德	大阪製紙株 島德
近江先株 帶谷	大阪水産株 帶谷
大阪製水株 帶谷	大阪水産株 帶谷
京金鐵道株 阪部	南和鐵道株 上田

●昨日定期取引帳入直段  
●昨日株式買出高（一方）  
●昨日株式買入高（一方）  
●昨日株式買出高（一方）  
●昨日株式買入高（一方）

廣告

資本金參百萬圓(拂込濟)

北濱銀行

本店 大阪東區北濱二丁目  
電話 特東 四〇五五  
支店 大阪東區北濱二丁目  
電話 特東 四〇五五  
支店 大阪東區北濱二丁目  
電話 特東 四〇五五

●預金利息

定期預金三ヶ月以上

年七步

小口當座日歩

壹錢六厘

當座預金日歩

壹錢貳厘

齒科醫 林田診療院

診察所左ノ處ニ開設ス  
大阪北濱浪花橋南詰東入

電話東五百九十八番

大阪市高麗橋五丁目九番屋敷

島德治郎

長距離電話東五百四拾三番

株式取引所 島德店

電報 才サカシマトク

特電話東七拾五番

大阪市北濱二丁目

株式仲買人 江口彌兵衛

公債株式賣買

大阪株式取引所 北濱二丁目  
仲買人 藤田繁之  
長距離電話東五七番  
同 東三四番

定期現物賣買

諸公債 定期現物賣買  
大阪株式取引所 仲買人  
大阪市東區北濱二丁目

杉山喜右衛門

電話加入 東四百八番

電報 才サカスギキ

長距離電話加入

電話 東三百〇六番

株式取引所 濱崎商店

電話東八百四拾七番

北區堂島渡通二丁目三拾貳番屋敷

濱崎永三郎

金屋商店  
大阪株式取引所 仲買人  
電話東四七番  
目下 濱北

諸公債 賣買所

古株金銀 賣買所  
右特別勉強仕候間多少ニ不限御用向  
大阪市東區南堀江上通四丁目五十八番  
電話 西三三番  
西三三番  
高木又次郎

長距離電話加入

電話東六拾七番

諸公債 定期現物賣買

大阪株式取引所 仲買人

大阪市東區今堀渡通東入

株式取引所 淺田商店

電報 才サカアサタセ

大阪株式取引所 仲買人

大阪市東區北濱二丁目八百八番

木村幸七

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買

長距離加入

東六百八拾貳番

大阪株式取引所 仲買人

大阪市東區今堀渡通東入

株式取引所 小川平助

電報 才サカハシハシ

大阪株式取引所 仲買人

大阪市東區北濱二丁目八百八番

木村幸七

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買

長距離電話加入

電話東八百八十八番

大阪株式取引所 仲買人

大阪市東區今堀渡通東入

株式取引所 北村治助

電報 才サカハシハシ

大阪株式取引所 仲買人

大阪市東區北濱二丁目八百八番

木村幸七

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買

電話東八六四

長距離東二八番

電信登錄番号

才サカハシハシ

橋本半次郎

大阪市東區北濱二丁目

株式仲買



# 官報

第二千四百六十八號 光武七年三月二十四日 火曜

議政府總務局官報課

## 宮廷錄事

詔曰鐵道院監督日本國人大三輪長兵衛勤務多年頗著效勞特叙勳三等賜太極章

光武七年三月十九日

詔曰秘書院丞柳寅哲馳詣受香所奉審摘奸以來

三月二十二日

表勳院總裁 閔泳煥

三月二十三日太醫院日次問 安

杏山知道

明憲太后殿氣候一樣太子宮太子妃宮氣度平順卿等不必入侍矣

宮內府特進官金昇圭辭職疏批旨省疏具悉往事何必爲引卿其勿辭即速登程

三月二十二日

## 叙任及辭令

陞正三品  
陞正三品  
陞正三品  
陞正三品  
陞正三品  
陞正三品  
陞正三品

六品 李容彬  
六品 李圭容  
六品 金亨提  
六品 金起龍  
六品 權台淵  
六品 崔炯建  
六品 鄭基鉉

以上光武六年十月九日

任陸軍步兵止領

中樞院議官 鄭煥樞

中樞院議官 李昇植

中樞院議官 朴庸和

依願免本官

六品 尹澄錫

九品 車得圭

任中樞院議官叙奏任官六等

以上三月二十日

禮式院文書課長 金圭鎮

管理署主事 鄭載喜

管理署主事 李勝會

管理署主事 崔秉俊

中樞院議官 安鵬遠

中樞院議官 金壯熙

中樞院議官 權錫注

依願免本官

禮式院參理官 李錫均

任禮式院文書課長叙奏任官三等

任禮式院參理官叙奏任官三等

金潤相

趙聖允

任管理署主事叙判任官八等

九品 張基夏

九品 朴聖贊

任中樞院議官叙奏任官六等

九品 安仁植

任親衛第一聯隊第二大隊陸軍軍醫補叙判任官六等

從二品 金昇圭

中樞院議官 權泰昊

中樞院議官 趙德元

中樞院議官 黃煥

九品 金永碩

九品 崔命駿

九品 裴炳旭

九品 金鎮孝

管理署主事 吳承周

管理署主事 崔泰熙

管理署主事 金演謙

中樞院議官 劉煥

中樞院議官 閔復鎭

中樞院議官 金昌泰

正三品 金圭鎮

黃致雲

延圭復

九品 李起周

九品 鄭泰源

九品 許均

大韓文庫



鐵道院監督 大二輪長兵衛

警務廳警務局長 劉漢英

正誤

農商工部大臣 関種斌

琨  
通信司電話課主事車載鶴

淳通信司電話課主事 沈軒澤

通信司電話課主事 趙鏞洙

浩通信司電話課主事 孫琪澤

通信司電話課主事 崔震陽

植  
通信司電話課主事 安奎洙

晟  
通信司電話課主事 蔡秉默

柱 通信司電話課主事 崔翰紬

東明王陵叅奉 林元則

金仲烈

鄭東泣

廣  
告

廣  
告

法規類編을續成印刷한것은光武二年一月至光武四年年終

到任

易升堂主人願覽者僉君子每一件價金一元五十錢云

로官報課에請購하십시오

1787

光武六年七月二十一日

議政府總務局

議政府總務局

四

# 官報

第二千七百六十九號

光武八年三月九日 水曜

議政府總務局官報課

## 宮廷錄事

元帥府軍務局總長臨時署理議政府贊政軍部大臣陸軍副將  
臣尹雄烈謹

奏即接鎮衛第三聯隊第二大隊大隊長金學顏報告則該隊小隊長朴柱勉補職兩載尙不赴任云鎮衛第五聯隊第三大隊餉官吳甲善受由上京過限不還已經三載矣屢度申飭終不赴隊揆以軍規不勝駭歎并免官懲戒何如謹  
奏

光武八年三月五日奉

旨依奏

陸軍副將李鍾健辭職疏

批旨省疏具悉方纔特昇豈宜求辭卿其勿辭行公

咸鏡南道觀察使徐正淳辭職疏

批旨省疏具悉政賴紓北顧之憂矧於此時病亦可強卿其勿煩益勉觀察之責

以上三月七日

鐵道院副總裁朴鏞和疏 批中省疏具悉下外所請依施量以所辭中副總裁之任依施呈改書下外시미라

## 叙任及辭令

陞叙判任官四等

一月二十九日

度支部主事 徐丙弼

陞叙判任官四等

二月十七日

度支部主事 嚴惠永

辭駐劄清國公使隨員  
命駐劄清國公使隨員

六品 韓永福

前主事 高永完

以上二月二十九日

陞叙判任官四等

度支部主事 朴鳳遠

三月一日

鎮衛第三聯隊第二大隊附陸軍步兵副尉 朴柱勉

鎮衛第五聯隊第三大隊餉官陸軍一等軍司 吳甲善

免本官

三月六日

依願免本官

醫學校書記 李雲承

任醫學校書記叙判任官六等

李雨承

外國語學校副教官 吳克善

外國語學校副教官 吳圭信

外國語學校副教官 尹榮會

陽川郡公立小學校教員 朴齊賢

東萊郡公立小學校教員 尹弼求

陞叙判任官五等

陞叙判任官四等

禮式院主事 李瑛奎

宮內府主事 崔泓俊  
宮內府主事 金鎮賢  
宮內府主事 金明濟

命 宮內府校正委員

以上三月七日

### 彙報

#### ○官廳事項

受勅及受牒	到任
-------	----

園丘壇祠 鄭在惠	二月廿九日	沃溝監理 鄭恒朝	二月六日
祭署令 李乾夏	三月七日	沃溝監理 鄭寅煥	二月六日
侍從院卿		署主事	

### 正誤

官報第二千六百三十三號叙任及辭令欄內陸一級下에外國語學校副教官禹麟源十一字가報告의漏落을아라

學部主事 柳基泳

同第二千七百六十八號 詔勅中宮內府協辦朴鏞和上에從二品은以特命全權公使로改付票을미라  
度支部主事李稷烈의稷字를以直字로改正事  
陸軍副尉崔光根에根字은休字로改正事

### 廣告

#### 各外國語學校學員募集廣告

今에各外國語學校 俄漢學員을加選을더이니入學을기願하는  
英德學員을加選을더이니入學을기願하는

者는本月十八日 陰曆二月 初二日 內로稟請証을本部로具呈을고伊日  
에本部로來을아入學試驗에應을事

光武八年三月四日 學部

各外國語學校學員試驗科目

一國文讀書 作文

一漢文讀書 作文

一年齡十五歲以上二十三歲以下

稟請証은本部로來을아購用을事

# 官報

號外

光武八年三月八日

## 宮廷錄事

詔曰明日

殯殿誕日別茶禮百官入參

三月七日

詔曰命正一品趙秉式爲議政府參政陸軍副將沈相薰爲議政府贊政忠清南道觀察使李道宰爲內部大臣

光武八年三月七日

議政府贊政 金嘉鎮

議政府參政沈相薰辭職疏

批旨省疏具悉卿懇時方艱虞廟務殷繁何乃求去固請如此依施事遣府郎宣諭

議政府贊政內部大臣閔泳煥辭職疏

批旨省疏具悉卿懇欲令卿矯揉淆濫之弊何遽言辭所請依施事遣部郎宣諭

議政府贊政權重顯辭職疏

批旨省疏具悉迨茲有事之時宜思奮勵何遽言辭所請依施以上三月七日

## 叙任

任議政府參政叙勅任官一等  
任議政府贊政叙勅任官一等

正一品 趙秉式  
陸軍副將 沈相薰

任內部大臣叙勅任官一等

忠清南道觀察使 李道宰

以上三月七日





朝鮮新報

改買 イ印	玄米	石拔 吐印	白米
十四十錢	壹石ニ付	十四圓八十錢	壹石ニ付
九圓八十錢	穀類ハ總テ吹ナシ	十一圓三十錢	
		精白 イ印	
		十三圓二十錢	
		十一圓六十錢	
		十四十錢	
		九圓五十錢	

大豆	味玉	小豆	赤大玉
上			
四圓七十錢	五圓二十錢	三圓四十錢	八圓八十錢
中			
四圓五十錢	五圓五十錢	三圓四十錢	八圓五十錢

兌換金券條例

大豆	味玉	小豆	赤大玉
上			
四圓七十錢	五圓二十錢	三圓四十錢	八圓八十錢
中			
四圓五十錢	五圓五十錢	三圓三十錢	八圓五十錢
下			
三圓三十錢	四圓三十錢	二圓二十錢	七圓三十錢

小麥	壹石二付	六圓九十錢
白粟	壹石二付	六圓六十錢
黍	壹石二付	九圓 錢
牛皮	百斤二付	四圓八十錢

中央銀行の設置  
別項の如く中央銀

伊津 五十三圓 錢 鐘ヶ淵五十一圓五十錢  
 九州 五十一圓四十錢  
 ▲和金巾 壹疋ニ付  
     源藏三ツ 錢  
     銅奢蓋三ツ 圓 錢  
     4虎印 四圓八十三錢 刀虎印 四圓七十三錢  
     虎印 四圓二十五錢 虎印 四圓五十三錢

●獨伊兩公使の來任

暹羅金	壹反二付	四四五十錢
上五兩十錢	中	十七圓
燒寸麒麟印硫黃製膏順		三四七錢
石油米國產松印一函		二十二錢五釐
藥貨相堪膏圓二付		七十二錢五厘
暹羅銅貨打步(日貨壹圓ニ對シ)		





摩擦石拔  
手撰精米

壹舛現金十六錢



奧田商店

京城特約店

(電話四十八番)

梅村商店

今般東京本社員太田鶴吉醫員和田耕一郎兩  
名出張即時御契約可致候ニ付續々御申込被  
下度此段廣告仕候也

尙御契約御希望ノ御方ハ御通知被下候ハ、早速社員參上可仕候  
又本社ニ於テハ近時歐米各國ニ於テ專ラ行ハレ居候利益配當附  
保險ト稱スル嶄新ノ保險法取扱致居候ニ付併テ廣告仕候

東京日本橋區吳服町十六番地

帝國生命保險株式會社

株式十八銀行支店內

仁川代理店

足立瀧二郎

萬民 賞翫之 標商歸登

金壽

大坂知三郎

市場三郎

釀造元東京目黒

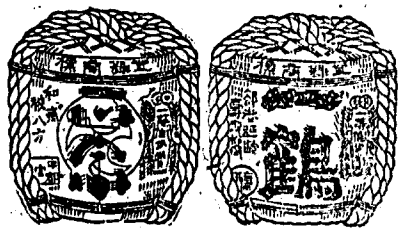
日本麥酒株式會社

先組取替爲

株式第一銀行仁川支店

東京 京都 大阪 名古屋 神戶 横濱 福岡 札幌 仙台 青森 岩手 秋田 山形 宮城 福島 茨城 栃木 群馬 埼玉 千葉 東京 神奈川 新潟 富山 石川 福井 山梨 長野 岐阜 愛知 三重 滋賀 京都 大阪 兵庫 奈良 和歌山 徳島 香川 高松 愛媛 高知 福岡 佐賀 大分 熊本 鹿兒島 沖縄

酒清良醇本日大  
軍海陸省内宮  
酒用御



元造釀  
町島城郡蒲三縣岡福  
正宮都宇

一手販賣元 倉重嘉造

第四回内國勸業博覽會  
第二回五二會全國品評會  
佛國巴里萬國大博覽會

特約代理店

仁川本町通

藤木利右衛門



惠比壽ビールハ東洋優等ノ好飲料ナリ  
惠比壽麥酒 愛飲諸君へ聊カ御禮ノ印トシテ 半打以上御買求  
ノ御方へハビール呑コップ進呈 仕候各販賣店ヨリ御購求アラシクナセ  
釀造元東京目黒 日本麥酒株式會社

石炭委託兼廉價販賣

并に平壤無煙炭及コークス等確實大勉強仕  
候間多少に不拘御用向仰付被下度奉願候也

電話六十二番 八田利三郎

貯蓄預金

一口壹錢以上ハ何程ニテモ御預申候  
預金拂戻共精々御利ニ取扱申候

株式十八銀行支店

賣販造製物刃打并具道工大

なんが なんが

光 下村商店

大阪市南區難波新川二丁目

諸預金 貸附金及割引 荷爲換及送金 貨幣交換

爲換取組先

株式十八銀行支店

發行所 朝鮮新報社

韓國仁川港各國居留地十九號地



# 官報

號外

光武八年三月八日

## 交涉事項

議定書

大韓帝國

皇帝陛下의 外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔及

大日本帝國

皇帝陛下의 特命全權公使林權助는 各相當의 委任을 受호야 左

開條件을 協定호

第一條

韓日兩帝國間에 恒久不易에 親交를 保持호고 東洋和平을 確立호을 爲호야

大韓帝國政府는

大日本帝國政府를 確信호야 施政改善에 關호야 其忠告을 容호事

第二條

大日本帝國政府는

大韓帝國

皇室을 確實호 親誼로 安全康寧케 호事

第三條

大日本帝國政府는

大韓帝國의 獨立及領土保全을 確實히 保證호事

第四條

第三國의 侵害에 由호며 或은 內亂을 爲호야

大韓帝國

皇室에 安寧과 領土의 保全에 危險이 有호境遇에는

大日本帝國政府는 速히 臨機必要호 措置를 行호이 可호然이

大韓帝國政府는 右

大日本帝國에 行動을 容易호을 爲호야 十分便宜를 與호事

大日本帝國政府는 前項의 目的을 成就호을 爲호야 軍署上必要호 地點을 隨機取用호을 得호事

第五條

大韓帝國政府와

大日本帝國政府는 相互間에 承認을 不經호야 後來에 本協定 趣意에 違反호 協約을 第三國間에 訂立호을 得치 못호事

第六條

本協約에 關聯호는 未悉細條는

大日本帝國代表者와

大韓帝國外部大臣間에 臨機協定호事

光武八年二月二十三日

外部大臣臨時署理陸軍參將 李址鎔 印

明治三十七年二月二十三日

特命全權公使 林權助 印

日韓議定書左報外

明治三十七年三月八日  
宣統元年三月八日

大韓政府  
發行

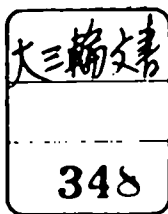
大韓文書

335

和韓文公  
外、詔勅等

大三輪長兵衛

清  
三  
月  
宋  
書  
新  
版



鐵道車表

年改下 萬葉集 七五〇三三  
十正 永登浦 七五〇三三  
一 橋本 八〇六〇六  
二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇  
上 米 砂 石  
一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇  
津、龍山に停車せず

# 漢城新報

刊發日每

定價 二枚 三錢 三個月 圓五錢  
右總て前金を要す 〇郵送  
は別に一枚に付郵税五厘  
印刷人 富士川 雄雄  
編輯人 武田 卓爾  
發行所 漢城新報社  
（番三十活主）

雜報

## ●議定書●

去る二十三日外部に於て日韓兩國代表者か重要な調印をなされたることは其當時聞込みたる次第なるが本日に至り其議定書は我官報によりて公にせられたり其全文は左の如し

大日本帝國皇帝陛下の特命全權公使林權助及大韓帝國皇帝陛下の外部大臣臨時署理陸軍參將李址鎔は各相當の委任を受け左の條款と協定す

### 第一條

日韓兩帝國間恒久不易の親交を保持し東洋の平和を確立するため大韓帝國政府は信し施政の改善に關

其忠告を容るゝこと

### 第二條

大日本帝國政府は大韓帝國の皇室を確實なる信誼を以て安全康寧ならしむること

### 第三條

大日本帝國政府は大韓帝國の獨立及領土保全を確實に保証すること

### 第四條

第三國の侵害により若くは内亂のため大韓帝國は皇室の安全或は領土の保全に危険ある場合は大日本帝國政府は速に臨機必要の措置を取るべし而して大韓帝國

政府は右大日本帝國政府の行動を容易ならしむるため便宜と與ふるものと

協定すること  
明治三十七年二月二十三日  
特命全權公使林權助  
外部大臣臨時署理李址鎔  
（以上號外再録）

## ●韓國と議定書●

本邦に於ては昨日の官報を以て見て發表せられたること別項の通りなるが韓國に於ても同時に公表することとなり昨日の官報號外を以て發行したる等々は今朝は一般に配布せらるゝならんと思はる

### ●亞總督の報告●

（二十四日の海戦に就き）  
同總督は尙旅順にあるものと見へ別項二十四日の海戦に就き同午後二時を以て本國政府に左の如く報告したり無論敗戦のことなれば事實は修飾若くは變更を加へ居ることとは看者の第一に注意すべき所なるべし

二十四日未明日本艦隊は水雷艇隊に援護せしめ旅順口を封鎖するの戦畧を取りたり之を採知したる我艦隊及砲臺は之を防ぐべく發砲したるか其的否は判然せず  
兎に角日本漁船は港口を去る遠からざる所にて自燃沈没し午前十時頃までも煤煙を揚げつゝ居れり  
此封鎖は旅順に於ける我艦隊の出入を禁止せしむるに至らず援護し來りたる水雷艇は夜明け後沖合にある日本の艦隊に向ひ歸り行けり

第六條  
本協約に關聯せる未悉の細條は大日本帝國代表者大韓帝國外部大臣との間臨時

漁船沈没の際は詳かならざるも日本人の傷死多少の溺死を遂けたるものあるか如く尙續て報告すべし云々  
●讀者の聲● 兵士の賄を請ふて「こんな時に儲からねば儲かることがない」と唯だ利慾一途に驅られ不正粗惡のものを供する徒輩が澤山あるを聞くが、儲かるのは各めざれどそれが爲め若しも兵士中に下痢を起させ遂に遠征の出来ざる様になつては何とも不心得の至りで其行爲は寧ろ世に指彈さるゝ「露探」よりも一層憎惡すべき間接の殺人罪だ否耶（直言生）▲巴城館前通路の澤惡なることは殆んど沼ガタの如し聞けば同館は目下〇〇本部と、それから一段のこと該館前丈けでも宜いから速に當局者の御配慮を望む（公共生）▲硝子屋、金物屋、下駄屋果ては煙屋までの店頭には兵士諸君は二割引と筆大く書き立て新聞紙上にも吹聴して居るが煙屋や下駄屋に兵士が何の要ありのか可笑くて堪らぬ（失笑生）▲海軍戰艦の祝賀會は既に催されたから今度陸軍の勝報が到るときは居留民大舉して京城市街を賑なく提灯行列をやつたら如何だらう定めし壯觀ならんと思ふ（建議子）▲錦洞井門樓横の貴社投書筒は先日の火災にて焼失せしため偶々投書するときは前守備隊の所まで足勢せざるを得ず甚だ不都合に付前所在地附近に再設して貰ひたい（筆洞生）追て御意の通りに致しませう（原り）  
●李址鎔氏の辭意● 同氏は此頃辭表を提出し其決心甚だ堅きが如し  
●辭表提出● 軍務局長中條實學部大臣李容植の兩氏は共に辭表を呈したるも批言ありて允諾せられず  
●典國局長署理● 崔錫泰氏は李容植氏後任として其署理を命ぜらる  
●平壤兵士の逃亡● 平壤の兵士等は日韓兩國不安定内に於て開戦せんと風の説を聞き其父母兄弟の困難を考慮し竊かに逃亡し郷土を去る者甚だ多しと云ふ

論 說

議定書と讀む

獨力以て韓國の獨立を扶植するは、大日本帝國の國是たること、日清戦争に於ける宣戰詔勅に依るも炳として夫れ照なり、然れども此の國是や韓國に於て、外に強國の障礙を加ふるあり、内に權臣の紀綱を紊るありて、遺憾ながら久しく貫徹する能はず、隱忍以て今日に及べり。

然るに露國の滿洲占領に關し、日露兩國間に交渉の開かるゝや、帝國政府は之を以て韓國の獨立に危殆を感ぜしむるものと爲し、極端折衝以て其の安全を確保せんことを企圖せしも、不幸にして露國の承諾を得ず是れが爲め已を得ず開戦に至りしことは、帝國政府が公表せし外交始末書に依るも、天皇陛下の宣戰の詔勅によるも大だ分明なるに加へて今や又此の連戦連勝の際に訂結せられたる「林李議定書」なるものを讀むも其第二條第三條に於て、韓國皇室を安全康寧ならしめ、且つ韓國の獨立及び領土保全を保障することを協定しある以上最早帝國の終始一貫せる國是の實行せられ、從て韓國の獨立が遂に確實に擔保せらるゝ時期に達せらるゝは蓋し疑を容るゝ所なけん。

此の如く日清戦争と日露戦争も韓國の爲に開かれたるものにて、日本は二回まで韓國の獨立の爲に他國と戦争するものなり、されば今回は必ず其の戦争の目的を達する可らず、又目下日露兩國は軍務より察すれば、其の目的は必ず達せらるべきを知る、即ち韓國の獨立は確然として此處に固定せらるべし、而て斯くも韓國が前には清國の屬邦より逃れ、後には又露國の併呑より免れて、依然世界の一體たる名實を保つを得るに至れるは、抑も夫れ何の故ぞ。

恭く惟るに、日本天皇陛下允文允武風に東洋の平和を永遠に維持し、以て世界の文化を發達するを以て大御心をなし、給ふよりして、茲に厥の、臣民は先づ韓國の獨立を擁護するを以て、其の國定なりと確信し

十年一日の如く、是か遂行を企圖し、遂に今日の時局を見るに及べり、明治中興の偉業は完成せざる可らず、南洋の平和は永遠に維持せざる可らず、之を要するに、議定書に明記する韓國の獨立は是非とも確實に保証せざる可らざるあり。

旅順第三回の攻撃

(盤露全く顔色なし)

我が艦隊總て豫定通り行動し二月廿三日旅順方面に近き旅順港口閉鎖の任務を有する特別運送船隊併に其乗員收容の任務を有する水雷艇隊を放つ翌廿四日午前十時豫定集合点にて各驅逐隊水雷艇隊に會す港口閉鎖の状況は報國丸は港口左側燈臺下に武州丸は其外方に至り各々自ら破壊沈没天津丸武陽丸は老鐵山の東に至り自ら破壊沈没仁川丸と亦同様自ら沈没す以上五隻の乗員は總

て收容し得て無事あり我驅逐隊水雷艇隊も總て無事よゑて港外にはバヤン、ノーウ井ク及敵の驅逐艦四五隻在るの報告を得たるを以て同夜我驅逐隊水雷艇隊と分て旅順港大連及鳩灣の偵察襲撃を命ぜられ艦隊は迂路を航し二十五日午前七時豫定集合点にて各驅逐隊水雷艇隊に邂逅せし未だ其の戦況を詳にするを得ざりし是れより本隊は旅順港口より向ひし港外左方に當りバヤン、アスコリド、ノーウ井クの三隻徘徊し居るも遠く出す砲臺下と陸岸近く東西するを視る午前十一時四十五分より敵艦及陸上

砲臺より向ひ遠距離より砲撃を始め敵艦及び陸上砲臺應戰せし正午過る五分ノーウ井ク先づ港内より逃れアスコリド、バヤン續て港内より遁走せり此の分にては港口閉鎖は其効少なかりしが如く甚だ遺憾に堪へず爰に於て各艦巨砲を以て港内より向つて砲撃を行ひ盛に火烟を擧るを見る砲撃十五分の後之れを止め引揚たり此の砲戦よて多少敵に損害を與へ且港内を威赫し得たりと信ず此の間我巡洋艦は老鐵山附近にて西方より來れる敵の驅逐艦二隻を認め其一を逸せし他の一隻は之を鳩灣に追及し遂に之を

撃破せり我艦隊總て一の損害死傷なし東郷聯合艦隊司令長官は尙前進地にあり(委狀は同長官より報告あるべきも本艦より不取敢報告す右は二月二十六日午後五時十分上村第二艦隊司令官よりの報告)

(昨日號外再録)

●李址鎔氏彈劾の議 日韓の議定をなしたる外部署理大臣は其名聲殆んど滿朝を壓するの姿にてありしが之を見たる他の所謂政治家は多少嫉妬の焰に捲かれつゝあるが如く切りに内々李址鎔氏を攻撃するもの出づるに至り同氏も其煩はしきに堪へずありと云ふ

●鐘路の街頭演説 此兩三日來毎日鐘路街頭に多數の人集まり大道演説行はれつゝある由なるが其動機は矢張獵官者の使喚に出で外務當局者を攻撃するにありといふ現に其黒幕は李鳳來李寅榮兩氏等とありと云ひ某國公使其議に參しつゝありとも傳へらる

●閔泳吉氏の赴任に就き 清國赴任は同氏の尤も急ぐ所なるも先記の如く便船なきに困居りしが本邦公使の厚意により御用船に便乗を許さるべければ愈近く長崎を経て上海に至り夫より芝罘に向ふべき心算なるも昨今は尙芝罘より秦皇嶼若しくは天津に向ふ能はざるため同氏も大に當惑しつゝありしが昨日出帆の海門丸の好便により秦皇嶼に向ひ赴任の途に就きたり

東洋、平如、確立、元夢  
韓日、金帳、紙、安帖、元  
事



第一条 大日本帝国ト大韓帝国トハ協同  
シテ ~~東洋~~ 防備ヲ国防ノ充實ヲ  
期スル事

第二条 大日本帝国ト大韓帝国トハ <sup>提携シテ</sup>  
經濟ノ共通ヲ期スル事

第三条 大日本帝国ハ大韓帝国ノ獨立  
及領土ヲ確立シ保全シ大韓帝国  
皇室ノ永世安寧隆盛ヲ圖謀スル  
事

第四条 第一条ノ目的ヲ遂行スル為メ  
大韓帝国力陸海軍級ヲ自作擴張  
スル外必要ノ場合ニ於テハ大日本帝国ハ  
其兵力ヲ以テ大韓帝国ノ防備ニ任  
スル事

第五条 第二条ノ目的ヲ遂行スル為メ  
大日本帝国ハ隨時必要ナル資金ヲ  
大韓帝国ニ撥給スル事

第六条 經濟共通ニ伴フ交通機關ノ  
完備ハ日韓西帝国共同ノ方法ヲ  
設ケテ之ヲ實行スル事

明治廿三年十月官報第一八〇号

支那

廣東鑄造新錢使用章程

廣東鑄錢局、於新

造之銅錢ハ大々康熙通宝ニ匹敵シ厚サハ之ニ過ク表面ニ光

緒通宝ノ字ヲ鑄シ裏面ニハ廣庫平重一錢ノ字ヲ鑄シ銅色

形狀共ニ精良ナル新錢ナリ今因右ノ使用ニ章程ヲ廣東布

政使司鑄錢局ヨリ告示セリ即チ如シ

(九月十番海軍林滙報)

今般本省ニ於テ奏明トシ上機鑄メヲ購用シ精銅ヲ以テ制錢

ヲ新鑄セシメ付督撫ノ准可ヲ經テ其使用ニ章程ヲ核定

告示ス

大ニ翰文書

401

之月第...

一新銭價格 新銭ノ制銭ハ每文壹サ庫平一錢トス

其價格ハ一千枚ヲ銀一兩トシ一百枚ヲ銀一錢トシ十枚

ヲ銀一分トシ一枚ヲ銀一釐トス此價格ハ官民ノ收支

出入ノ標準ヲ畫一ニ歸スルモノニシテ永ク増減變更

スルナシ

一計算方法 新銭ハ一百一千乃至十貫万貫皆足

數ヲ以テ計算シ一文ヲモ控別スルヲ准ヤス若シ官公

吏胥ニ於テ控減シテ支出スルハ車惣ヲ行ムレ氏間

ノ使用モ是數ニ據ラシメ控減受授スルヲ准ヤス違フ者

ハ重寃ス

一 支費方法 新銭ハ毎月善後局ヨリ文武員辦俸

給、公費、工事費、采辦費、及一切雜費支拂、際シ

其金額ノ二割ヲ塔加支費スヘシ其計算ハ前項規定

ニ據ルモノトス

一 上納方法 新銭ハ本省現用ノ鄭州捐局（黃河事

費款金取扱所）及賑捐局（豫災民故卹募捐金取扱所）ハ

納金トスル事及城外ニ於ケル釐金稅、巡緝經費、高

人ノ賦課ニ受ケル兵餉金等ニ使用スル事ヲ得新銭

ヲ以テ其金額ノ幾令若干ハ全分リ上納スルヲ其便ニ任ス

トモ二割以下ノ端數ヲ塔加支納スルヲ准サス

一市錢更分

新錢ヲ通用セシムル後、舊錢亦通用

セシ市錢ハ舊ノ如ク取引スルヲ准ス若シ好商輩

於テ新錢、通用ニ固リテ舊錢ノ價格ヲ高低スル

キハ金ヲ辨貸サス

一交換方法

新錢ハ布政使司鹽運使司、准銀

兩換店ニ下渡シ行銷セシメ其他通市兩換店確

實ニ保證ラニツル者ニ下渡シ行銷スル民人ノ銀

ヲ以テ交換ヲ要スル者ハ各兩換店ニ就キ兌換券領

セシメ又錢ヲ以テ交換ヲ要スル者ハ鑄錢局ニ赴キ規定

ノ計算ニ據リ兌換スルヲ准ス

一私鑄禁制 新鑄ヲ偽造スル者ハ律ヲ按ニテ懲

治シ犯罪者ヲ告訴引合手スル者ハ賞金優給ス

一銷燬禁制 新錢ヲ銷燬スル者ハ私鑄ノ例ニ照シ

テ治罪ス犯罪者ヲ告訴引合手スル者ハ一律ニ賞金

ヲ給与ス

光緒十五年八月初七日示

明治三十二年一月十五日官報秘奉

支那

○金銀貨幣條例 昨午十二月十四日刊行上海字林

滬報浙江海關稅務司康費達氏ノ奉勅起草ニ係ル

中國金銀鑄錢條例草案ヲ掲載スリ 右草案

獨逸駐紮公使許景澄氏ノ校閱ヲ經ルモニテ

今回更ニ訂正ヲ加ヘ北京内閣ニ提出スルモノナリト云フ

左ニ其文ヲ訳出ス

中國金銀鑄錢條例

第一條 中國往來使用セム銅錢元寶銀鑄白貨幣

ヲ改鑄シテ一定ノ主銀鑄錢ヲ造ルヘシ其模範ノ標  
準ハ銅ヲ用ヒ其鑄造法ハ條例ヲ特定ニ試弁ノ上戸  
部奏准ヲ經テ三月以内ヲ限リ一律通用ヲ布告ス  
モノトス其通用ノ布告以前ニ民間ニ其使用ヲ便スル場  
合ニハ直ニ之ヲ准許スルコトニシ

## 第二條 銀錢ノ制式

第一項 銀錢各枚ヲ一銅トス

第二項 銀錢一銅ノ十分一ヲ鈔錢トシ鈔錢ノ十分一

ハヲ鈔分トシ鈔分ノ十分一ヲ鈔厘トス

第三條 銀錢ノ種類



市一頂 一銖、五銖錢、二銖錢、五銖分、二種ハ銀ヲ  
以テ鑄造ス

中二項 二銖分、一銖分、二種ハ白銅ヲ以テ鑄造ス

中三項 五銖厘、二銖厘、二種ハ紫銅ヲ以テ鑄造ス以上  
中區以下標則ニ遵ヒ行用ス

中四項 新制銀貨ハ庫秤銀一圓庫ニ出納スル秤式

ニ據ル銀兩ヲ庫秤足色紋銀ト稱ス一兩ヲ以テ新制銀貨

一銖トレハ一枚、五銖錢トレハ二枚、二銖錢トレハ五枚、一銖

錢トレハ十枚、五銖分トレハ二十枚、ヲ鑄造スルモノトス庫秤

純銀十六兩ヲ新ト稱ス一銖ハ西洋ノ金百重五百九十

ハクレインニ相當ス其鍍和鑄造ノ割合ハ一千分ノ九  
百今ハ純銀ヲ用ニ一千分ノ一百分ハ銅ヲ用ニ以テ各種ノ銀  
貨ハ每九十兩ヲ以テ一百兩ノ鑄成重量ヲ成スモトス  
其鑄造法ハ戶部之ヲ規定ス之以上各種ノ貨幣ハ  
其所定ノ純銀配合ノ割合ニ照シ其一千分ノ三以上ノ  
差違ヲ生セシムルモトヲ得ス鑄成重量ハ五匁ノ一  
種ヲ除クノ外總テ一千分ノ十以上ノ差違ヲ生セシムル  
モトヲ得ス鑄造枚數ノ多少ニ拘ハラズ皆此規則ニ  
付スルヲ要ス

才五項 新錢銀貨ハ總テ圖式ニシテ二匁錢、五匁

錢及一鎊ノ三種ハ其表面ニ團龍紋并ニ鑄造年  
号ヲ鑄出シ其裏面ニ鎊數或ハ鈔數ヲ記シ傍邊  
ニ大清宝錢ノ四字并ニ宝錢局ノ記号ヲ鑄出ス

才六項 一鈔錢以下ノ銀貨及各種ノ銅貨ハ均

ニク圓式ニシテ其表面ニ年号及鈔數或ハ分數ヲ鑄

出シ其裏面ニ大清宝錢ノ四字并ニ宝錢局ノ記号

ヲ鑄出ス其他各種ノ銅貨及五鈔分ノ銀貨銘和

單葉形狀大小及邊式等ハ戶部ニテ規定スル

才七項 宝錢局ヲ設テ以上各種ノ貨幣ヲ鑄造

スルニ付キ其鑄造高制限、鑄造場所、鑄造經費

及貨幣材料、爲るべき地金銀蒐集等、戶部所問  
ニ於テ隨時ニ規定スル者トス

第四條 銀貨一兩及五銖、今ノ鑄造ハ全國人口ニ割當  
テ入ニ付五十兩ニ超過セシムルコトヲ得ズ、毎年一詔  
定額中ニ就キ若干宛ヲ新鑄シ、旧貨ト引換フヘシ  
其毎年ノ新鑄額及其辦理手續等ハ戶部  
之ヲ規定シ、年度ヲ逐ニ奏明スル者トス

第五條 二銖錢以下各種貨幣ノ鑄造ハ全國人口  
ニ割當テ一人ニ付五兩ニ超過セシムルコトヲ得ズ、其鑄  
造及旧貨ト引換手續等ハ前條ニ同シ

第六條 新制貨幣ハ漸ク以テ流通シ成績ヲ認め  
場合、至レハ戶部衙門ヨリ差准ヲ經テ爾後民間  
ニ流通セシ銅錢元寶、錠銀等ノ旧式貨幣取リテ  
停止ス、其旧貨ノ引換期限及引換ノ場所ハ戶部  
之ヲ規定ス

第七條 新制銀銅各種貨幣ノ鑄造費及旧貨引換  
ニ關スル經費ハ悉皆政府ヨリ支辨スルモノトス

第八條 旧貨幣ノ通用停止手續ハ戶部衙門ヨリ各省  
總督巡撫ト會同規定シ一月ヲ限リテ新貨幣ト  
兌換ヲ行フモノトス、各省總督巡撫ハ其旨ヲ三月以前

ニ於テ管下一般ニ告示スル

第九條 本條例ニ依リ掲載セル鈐錢以下ノ貨幣ハ乃  
千兩ノ補助ト爲スモノナレハ凡ソ民間ノ取引ニ當リテハ銀  
貨ハ十兩ヲテ銅貨ハ一兩ニテテ程限トシ其以上ヲ受  
取ルトラ肯セサルハキハ之ヲ強フルコトヲ得ヌ唯政府  
ニ收納スル税金ナレハ其多少ニ拘ハラズ補助貨幣  
ヲ用ズルモ妨ナシ其銅ノ鈐錢以下ノ相互ニ交換  
關スル規則ハ戶部ニテテ指定告示スルニ銀貨ノ交換  
ハ少クモ二百兩以上タルハ銅貨ノ兌換ハ少クモ五十兩  
以上タルニシ

第十條 凡ノ故意ニ鑿壞爛燬ヲ行ヒタル補助貨幣  
及贋造ニ係ル銀貨ハ其ノ條ニ照シ兌換スルヲ得ス其通  
用ノ繁久ニ因リ磨刷剝蝕ヲ致セシモノニ限り税金上  
納ノ節其額之ヲ收納スルコトヲ准ス

第十一條 金銀ノ制

第一項 純金庫秤一片ヲ以テ金銀一百六十七枚ヲ鑄  
造ス金銀一枚ノ十分一ヲ銀ト稱ス

第二項 十兩ハ即チ金銀一枚ニシテ一兩ハ凡ソ銀銀  
二銖ニ相當ス一銖ノ百分一ヲ銀令ト稱ス一銖令ハ凡  
銀銀二銖令ニ相當ス

第十三條

前條十鎊新貨幣ノ外更ニ二十鎊金銭一

種ヲ鑄造スル乃チ該貨八十三枚半ヲ以テ純金庫

秤一斤、相當ス而シテ金銭ノ製法及形或ハ左ノ諸

項ニ據ル

第一項 金銭ノ鑄造ノ割合ハ一千今ノ九百今ハ

純金ヲ用ヒ一千今ノ一百今ハ銅ヲ用フ此則ニ照準スル

トキハ十鎊ノ金貨ナレハ一百五十枚零百今ノ三十、二十

鎊ノ金貨ナレハ七十五枚零百今ノ十五ヲ以テ恰モ一斤ノ

重量ヲ成ス者トス

第二項 金銭ハ圓式ニシテ其表面ニ團龍紋并ニ大清



國ノ三字及鑄造年号ヲ鑄出シ其裏面ニ鐫數及花紋并ニ宝錢局ノ記號ヲ鑄出スル其他形狀大小及邊式ハ戶部之ヲ規定ス

中三項 金錢鑄造規則ハ戶部衙門ニ於テ規定頒行スル毎枚純金鑄和ノ割合及鑄錢重量ハ必ス前項所定ニ符合スルヲ要スト庶毛少分ノ差違ハ免カレ難シ乃チ鑄和スル純金ノ割合ハ一千分ノ二以上ノ差違ヲ生スルヲ許サズ鑄成重量ハ二千分ノ五以上ノ差違ヲ生スルヲ得ズ者トス

第十三條 宝錢局ヲ設ケ各種金錢ヲ鑄造スルニ付各

種ノ鑄造ノ場所鑄造經費、及金貨材料トシテ蒐  
集豫備スル地金銀等ハ戸部衙門、於テ隨時ニ規定  
指示スルモノトス

第十四條 凡ソ金錢ノ使用繁久、因リテ剝蝕磨損ヲ致  
シ故意ノ鑿壞爛燬ヲ施シタルハ非ルモノハ本條例第  
十二條所載ノ重量ニ照シ其減少ノ量十分ノ五以下ニ在  
ルハ尚ホ其行用ヲ准スモノトス此堆用重量ニ滿タセ  
者ハ總テ宝錢局ニ送付シ改鑄ヲ行フニ若シ民間ニ  
テ此種ノ貨幣ヲ所持スル者ハ各省ノ支局ニ赴キ新貨ト  
交換ヲ請求スルヲ可シ

第十五條 宝銭爲ハ其餘販賣シテ人民ノ請願ニ因リ貨幣  
ヲ代鑄スルヲ准ス此鑄造ハ二十鎊ノ金貨ト一鎊ノ銀貨  
ト、限ルモノトス其鑄造所ノ經費ハ戶部之ヲ一定ス  
シ但シ貨幣鑄造費ハ純金一斤ニ付キ一鎊、純銀一  
百兩ニ付一鎊、超過スルコトヲ得ス而シテ本條例亦三條ヲ  
上項及第十三条ヲ據リテ規定ニタル經費ニシテ若シ剩  
餘アルトキハ均ニ國庫ニ歸入スルモノトス

第十六條 本條例所定ノ金、銀、銅各種ノ宝銭ヲ除ク外  
一切他ノ貨幣ヲ鑄造スルコトヲ禁止ス

第十七條 本條例カ十一條カ二項、ニ示ス如ク金貨一鎊

ハ二鈔錢ニ相当シ一鎊ハ二鈔重ニ相当スル定則、照  
シ民間取引、降シテ補助銀貨數ニ十鎊以上補助銅貨  
數五鎊以上ハ其領收ヲ拒ムコトヲ得ヘシ各公費ノ受授  
モ亦一律タルシ

第十八條 金銀銅各種貨幣、用スル權衡ハ以上所定  
ノ重量及金貨准用制限重量ヲ按シ戶部衙門、  
於テ製造置シ人民ノ請願ニ應ジ實價ヲ以テ辨下クシ  
民間ノ製造、係ルモノハ戶部ニ届出テ定規ノ手数料  
ヲ納メ其檢閲ヲ請ヒ検査済ノ証印ヲ經テ其使用ヲ  
准スモノトス

第十九條 本條例第六條之照シ戸部之奏准ヲ經テ新制  
貨幣ヲ流通セシ後其成績ヲ認メ旧用ノ銅錢元寶  
錠銀ノ交易取引ヲ停止シ之ルハ左ノ諸項ニ照シ辦理  
スル

第一項 經前氏同ニ於テ旧用ノ銅錢、元寶、錠銀並ニ外  
國貨幣ヲ以テ交易取引セシ貸借ハ再後本條例第九  
條ニ照準シ新制貨幣ヲ以テ勘定ニ交接セシム

第二項 新制貨幣ト旧用ノ銅錢銀錠ト比較核算  
ハ戸部衙門ヨリ關平銀（稅關所定ノ秤ニ依ル銀）庫平  
銀（國庫所定ノ秤ニ依ル銀）漕平銀（漕運衙署所定

ノ秤に依ル銀)上海平銀、江平銀、(南京地方所定ノ秤に依  
ル銀)湘平銀(湖南地方所定ノ秤に依ル銀)等ノ各一百  
兩に對スル比較ヲ公示ス(但シ以上各秤ハ其最ナルモノ  
略舉セシト過キス此外各省ニ於ル秤式ト較準シテ頒告  
スルモノトス若シホタニ部ノ比較核算ヲ經カン者ハ其本  
質ノ實質量ヲ査査ニ新制貨幣ト核算ス(シ

第二十條 凡ソ外國ノ金銀貨幣ハ再後民間ノ取引ヲ制  
限シ或ハ一切之ヲ禁止シ其官衙、收納核算スル方法ハ  
均シク戶部ヨリ規定ス(シ若シ故意、定例ヲ犯シ外國  
貨幣ヲ使用シタル者ハ一百五十兩ノ罰金或ハ三月ノ

監禁之處

第十一條 戸部ノ奏准ヲ經テ新制貨幣通用布告  
ヲ發セラル以前ニ於テ官民間ニ在リテ其受授ヲ企望ス  
ル場合ニハ前條新旧各種貨幣比較換算ノ定例ヲ按  
照シテ般ニ其使用ヲ准許ス

●李容弼氏に對する上疏 其後政府大臣より李容弼氏辭職の上疏を捧げたるに別項の如く詔勅出でたるにつき議政尹容善、元老沈彝澤、趙秉世の三氏より重ねて上疏を捧げたりといふ

●京城々内の警戒 今回の事變以來京城々内の警戒俄かに嚴重となり夜間は各坊山を巡檢兵丁に把守せしめ夜深の通行人は殊に取締を嚴にし居へ由

●林公使謁見に就て 林公使は昨十二日參内謁見の筈なりしも宮廷の都合にて明十四日迄延期となりし由に聞く

●マール氏渡清に就て 佛語教師マール氏玄海九にて渡清の事は既報せしが氏の渡清は駐清韓國公使館事務多端よつき臨時顧問の資格にて氏を招聘せしに由るものと氏不在中佛語教師は郵遞教師佛人クランシー氏之れを兼ねる由

●稷山金鑛事件の要求 稷山郡守劉秉應が我遊澤淺野稷山金鑛に於て使用せる韓人提囚し爲めに工夫離散せる頗末は既報所なるが我が加藤領事は該事件に關し仁監理河相驥氏と目下交渉中にて劉郡守に於て廢礦せし其間の損害金を賠送せんと要求し居れる由なり

●京釜鐵道の試運転 京釜鐵道會社にて昨日京仁間の重立たる官民を招待し永登浦より鳴鶴洞迄十二哩間の試運転轉を爲せり其状況の詳細は次号に記載すべし

●三輪檢査官一行出發 京城及當地に於ける各官衙の會計檢査を終り稻田に滞在中なり三輪檢査官本田檢査官補の一行は一日愛國丸にて出發釜山に向へり

●二遞信屬の歸朝 北清より來韓京仁兩地郵便局の會計檢査を遂げたる遞信屬小島遼、小林勝久二氏は一日愛國丸にて當地出發歸朝の途に上れり

●詔勅出づ 政府大臣より李容弼氏辭職の上疏を捧げたるに陛下は左の詔勅を下し

詔曰、向日以李容弼事、頻煩相持、政本之地、及各部事務之廢闕、至於多日、極涉未穩、亦無如是之憂矣、有姑先處分者語未必究其宜有諒悉者、而今慶會幾過、又或有風聞之申提云、夫以卿老成體國不應、乍止旋作汲汲如失有若不爲、此不足以處置一李容弼、朕以爲萬萬不可、卿其更加深諒事、遣史官傳諭于議政、詔曰、總論於議政矣、初不必至於申復、只存事體、而公論自可見矣、亦既有向日處分、其曰姑先其意庶有以諒會、而又以此爲煩、朕未知其可矣、卿等其諒之事、遣史官傳諭于領敦事議長(十二月十日)

●政變と宮廷 今回の事變以來

屢々報道せし如く表面は李根澤、李容弼、趙秉世三氏の感情の衝突と權勢の軋轢とに過ぎざる中頃附和雷同するものありて竟に非常の混雜を生ぜし次第なれば畏くも陛下には之れが爲め宮中府中に黨與を樹て他日の弊害を遺す如きあらんとを軫念せられ目下頻りに融和の方法を講せられづありと云へば政界も此上左までの波瀾を見せしで靜平に歸するに至るべし

●大麥 壹石二付 二圓二十錢  
●小麥 壹石二付 二圓二十錢  
●大豆 壹石二付 二圓二十錢  
●和豆 壹石二付 二圓二十錢

●大麥 壹石二付 二圓二十錢  
●小麥 壹石二付 二圓二十錢  
●大豆 壹石二付 二圓二十錢  
●和豆 壹石二付 二圓二十錢

●日本 五圓  
●和豆 九圓



會へ出席の爲め、東京中の  
十七日午後二時より帝國  
會を開き、辻、浮田、坪井、  
加藤、菊池等の  
蓄音機の餘興などを催す由  
京釜鐵道の怪事に就て、  
去九日及び昨

日の紙に、  
八郎、石井、  
資するも旅費支出、  
入、證據金五千圓を、  
着服したる事及び區  
無根の旨を發見せしに付、  
改めて茲に記す

# 別報

## 日俄交涉頭末大要

◎日本에서 小村外務大臣이 各國公使及内外新聞記者에게 對하여 日俄交涉의 始末을 發表한 大要가 如左

韓國의 獨立과 疆土保全을 維持하고 併吞半島에서 日本의 第一利益을 擁護함은 日本의 幸事과 安全을 爲함이 甚히 緊要한 者故로 如何한 行爲든지 韓國의 地를 不安케 한 者는 日本 政府가 看過할 不能함이 俄國의 清國과 公約한 바와 並其 清國에 保證을 存存在在히 依然히 滿洲를 占領하고 進하여 韓國 疆域 侵略의 行動을 敢行하기 至하얏스니 萬若 滿洲가 俄國의 併吞에 歸하면 韓國의 獨立을 支保치 못함지다 故로 日本 政府가 速히 俄國과 交涉를 開하고 兩國 利害의 接觸點을 滿韓兩地에서 兩國의 利益을 友誼로 調理하여 東亞의 和局을 永久히 維持하기 爲期待함이 昨年 七月後에 俄國에 向하여 此希望을 披瀝하고 贊同하기 를 要求하얏더니 悅而 同意한 點을 回答한 지 時 故로 日本이 八月十二日에 栗野公使를 差하여 吾協商의 基礎를 如左條件을 提出하얏스니

(一) 清韓兩國의 獨立과 疆土保全을 尊重함 (二) 清韓에 在한 各國商工業을 爲하야 機會均等의 主義를 維持함 (三) 俄國은 韓國에서 日本의 第一利益을 承認하고 日本은 滿洲에 對하여 俄國의 鐵道經營을 就하야 特殊한 利益을 承認하야 併吞第一項의 主義

에 反對한 程度에서 右記利益을 保護하기 爲하야 必要한 處置을 取할 事 (四) 韓國改革의 助言은 日本의 掌權에 屬함 (五) 韓國鐵道를 滿洲에 延長하야 東清山海牛莊線과 連絡을 妨害치 아니할 事 當時 日本이 交涉을 遂히 解決하기 爲期待함이 俄國에서 直接으로 商議하기 를 希望하얏고 俄國이 皇帝의 外遊와 其他理由로 拒絶함의 不得已로 東京에서 商議하기 로 決하얏단 時 俄國의 公約한 十月三日에 其大案을 提出하얏고 俄國이 清國의 主權과 疆土保全을 尊重할 事와 各國商工業을 爲하야 機會均等의 主義를 維持할 事를 拒絕하얏고 滿洲及其沿岸은 日本의 利益範圍外에 置하얏고 韓國에 關한 바는 日本의 自由行動權에 制限을 附하고 利益保護가 必要한 境遇에 出兵할 事를 承認하얏고 單略上의 使用할 事를 不許하얏고 且 北緯三十九度以北의 疆域에서 中立地帶로 成함을 提議하얏스니 俄國은 滿洲를 併吞할 意志가 無면 何故로 此를 拒絕하얏리오 日本이 商業上에 重大한 利益이 已有하얏더니 將來에 益發發達을 希望이 有하고 政事上에 韓國과 關係를 因하야 一層 緊切한 利益이 有함으로 斷然히 拒絕하기 로 決하얏고 其意見及 俄國의 提議案에 對하야 修正意見을 提出하얏고 中立地帶는 滿韓國境兩側에 亘하야 六十歧路米突의 地域으로 成함을 提議하얏고 東京에서 屢屢히 折衝을 結果로 十月三十一日에 日本이 確定修正案을 俄國에 提出하

고 數次其 回答을 催促한 時 十一月十一日에 僅止하야 其 回答을 接하얏스니 俄國이 滿洲에 關한 條項을 刪除하야 協約을 全然히 韓國에 屬함으로 하얏고 且 單略上 制限과 中立地帶에 對하야 主張을 固執하얏다 此一友誼로 衝突의 原因을 除去하랴 然當初 主自에 反함으로 十一月二十一日에 俄國에 再思하기 를 要求하얏고 又 韓國에 對하야 滿洲土 使用上의 制限을 刪除하기 를 要求하얏고 且 滿洲에 不踰하얏고 中立地帶를 設定함에 同意치 아니함으로 此全廢하기 를 提議하얏더니 俄國이 一月六日에 回答하얏고 韓國에 對하야 前日提議를 固執하얏고 滿洲에 對하야 滿洲國條約上의 利權을 阻害치 아니함은 承認하얏고 疆土保全에 對하야 何許한 明言이 無하야 俄國이 滿洲를 併吞할 意가 明白하얏지다 故로 日本도 修正案을 堅持하기 로 決하얏고 一月十三日에 又 再思하기 를 要求하얏고 數次 回答을 催促하얏고 俄國이 回答하얏더니 滿韓에 對하야 此 回答을 時期도 指定하얏지다 要하얏건 日本은 終始溫和와 公平으로 正鵠을 合하야 俄國에 毫髮의 其 敵意를 責지 아니하야 屢히 隨意聲明함은 主義를 承認하기 를 要求함에 不過하얏고 俄國은 永永峻拒하얏고 不當히 回答을 遷延하얏면 一面으로 滿洲水陸의 軍費를 充實하야 大兵이 俄國境을 壓하얏스니 俄國의 行動이 日本으로 하야 再終是 妥協의 望을 絶하야 談辦을 不得已斷絶함에 至하얏다 하얏다

展習工部局

第一千五百八十号

使朴鑄和  
加二月大旨

●巡檢在其家門外接應相砲轟



福

## 宣戰詔勅

天祐を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本國皇帝は忠實勇武なる爾有衆に示す

朕茲に露國に對て戰を宣す朕が陸海軍は宜しく全力を極めて露國と交戰の事に従ふべく朕が百僚有司は宜しく各々其職務に従ひ其權能に應じて國家の目的を達するに努力すべし凡そ國際條規の範圍に於て一切の手段を盡し遺算なからんことを期せよ惟ふに文明を平和に求め列國と友誼を敦くして以て東洋の治安を永遠に維持し各國の權利利益を損傷せずして永く帝國乃安全を將來に保障すべき事態を確立するは朕夙に以て國交の要義となし且暮敢て違はざらんことを期す朕が有司も亦朕が意を体して事に従ひ列國との關係歲を追ふて益々深厚に赴くを見る今不幸にして露國と釁端を開くに至る豈朕が志ならんや

帝國の重きを韓國の保全に措くや一日の故にあらず是れ兩國累世の關係に由るのみならず韓國の存亡は實に帝國安危の繫る所

たればなり然るに露國は其清國との盟約及列國に對する累次の宣言に拘らず依然滿州に占據し益々其地歩を強固にして遂に之を併吞せん若し滿州にして露國の領有に歸せんか韓國の保全は支持するに由なく極東の平和亦固より望むべからず故に朕は此機に際し切に妥協に依りて時局を解決し以て平和を恒久に維持せんことを期し有司をして露國に提議し半歳の久しきに亘り屢次折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を以て之を迎へず曠日彌久徒らに時局の解決を遷延せしめ陽に平和を唱道し陰に海陸軍備を増大し以て我を屈從せしめんを凡そ露國が始めより平和を好愛するの誠意なるもの毫も認むるに由なし露國は既に帝國の提議を容れず韓國の安全は方に危急に瀕し帝國の國利は將に侵迫せられんとす事已に茲に到る帝國が平和の交渉に依り需めんとしたる將來の保障は今日之を旗鼓の間に需むるの外なし朕は爾有衆の忠實勇武なるに依頼し速に平和を永遠に克復し以て帝國の光榮を保全

せんことを期す

# 朝鮮新報

外 號

日十月二年七十三治明

東京電報

## ●交渉始末の發表

(二月九日午後二時廿五分發)  
(二月十日午前六時廿五分發)

昨日小村外相は各國公使及外國新聞記者に對し其決末を報告す

## ●露公使の退去(全時發)

露國公使ローゼン男はニコライ師と共に十一日乃便船にて退去すべし

## ●交渉始末の大要

(二月九日午後二時廿五分發)  
(二月十日午前六時廿五分發)

昨日小村外相が各國公使及内外新聞記者に對し發表したる交渉始末は左の如し

韓國の獨立領土保全を維持し併せて半島に於ける帝國の唯一なる利益を擁護するは帝國の幸寧と安全との爲め緊要缺ぐべからざるものなり故に如何なる行爲たるを問はず苟くも韓國の地を不安あらしむるものは帝國政府に於て之を看過すること能はず然るに露國は其清國との公約並に清國に與へたる保障の存在するに係らず依然滿州を占領し進んで韓國疆域に侵略的行動を敢てするに至れり若し滿州にて露國の併呑に歸せんか韓國の獨立は固より支ふべからず故に帝國政府は速に露國と交渉を開き兩國利害の接觸点たる滿韓兩地に於て相互の利益を友誼的に調理し以て東亞の和局を永久に維持せんことを期し昨年七月過露國に向つて此希望を披瀝し賛同を求めたるに悦んで同意する旨を回答せり帝國は八月十二日栗野公使をえて協商の基礎とし

て左の條件を呈せしむ

- 一、清韓二國の獨立と領土保全を尊重する事
- 二、清韓に於ける各國商工業の爲めに機會均等の主義を維持する事
- 三、露國は韓國に於ける日本の唯一なる利益を承認し日本の滿州に於ける鐵道經營に就き露國の特殊なる利益を承認し併せて一項の主義に反せざる限り前記の利益を保護する爲めに必要の處置を取る事
- 四、韓國の改革助言は日本の掌權に屬する事
- 五、韓國鐵道を滿州に延長し東清山海牛莊線連絡を妨害せざる事

當時帝國は交渉速に解決せんことを期し露國にて直接商議を希望せるも露國は皇帝外遊其他の理由の下に拒み已むを得ず東京に於てするに決せり露國公約十月三日を以て其大案を提出す露國は清國の主權と領土保全の尊重と各國商工業機會均等の主義維持を拒み滿州と其沿岸は日本の利益範圍外に置かんことを求め韓國に關しては日本の自由行動權に制限を附し利益保護必要の場合出兵を認むるも軍器上の目的に使用するを許さず且つ北緯三十九度以北の領域を中立地帯となさんと提議せり

露國滿州併呑の意志なくば何故に之を拒むや帝國は既に商業上重大なる利益を有するのみならず將來益々發達し望あり政事上にては韓國との關係より一層緊

切の利益あるを以て斷然之を拒絶に決し其意見を始め露國の提議案に對する修正意見として提出し中立地帯は滿韓國境兩側に亘り六十キロメートルの地域なるべしと提議し屢々東京にて折衝の結果遂に十月三十日我確定修正案を露國へ提出し數回其回答を催告し漸く十一月十一日に至り之に接する然るに露國は滿州に關する條項を削除し協約を全然韓國に關するものとし而も軍器上制限中立地帯に就き主張を固執せり

之れ友誼的に衝突の原因を除かんとする當初の主旨に反するを以て十一月二十一日露國に再考を求め又韓國に就ては領土使用上の制限刪除を要求し滿州に跨らざる中立地帯設定の不同意を以て全廢を提議す露國は一月六日回答せるも韓國に就ては前提議を固執し滿州に就ては清國と條約上の利權を阻害せざるべきを承認し領土保全に就ては何等言明する所なし

滿州併呑の意明かなり故に帝國も修正案を堅持するに決し一月十三日重ねて再考を求め爾來數回回答を促したるも露國は舊に答へざるのみならず之を與ふべき時期すら指定せず

要するに帝國は終始溫和と公平を以て正鵠とし露國に毫も難きを責めず屢々任意に聲明したる主義を承認せんことを求むるに過ぎざるも露政府は飽くまで之を峻拒し不當にも回答を遷延し乍ら一方には水陸の軍備を充實し大兵は既に韓國境を壓せり露國の行動は帝國をして遂に妥協の望を絶ち談判を斷絶するの已むを得ざるに至らしめたり

發行兼印刷人

小嶋 正 三

發行所

韓國仁川港各國居留地十九号地  
朝鮮新報社  
(電話十九番)



# 朝鮮新報

知通別特

日十月二年七十三治明

東京電報

## ●交渉始末の發表

(二月九日午後二時廿五分發)  
(二月十日午前六時十分發)

昨日小村外相は各國公使及外國新聞記者に對し其決末を報告す

## ●露公使の退去(全時發)

露國公使ローゼン男はニコライ師と共に十一日乃便船にて退去すべし

## ●交渉始末の概要

(二月九日午後七時十分發)  
(二月十日午前六時十分發)

昨日小村外相が各國公使及外國新聞記者に對し發表したる交渉始末は左の如し  
韓國の獨立領土保全を維持し併せて半島に於ける帝國の唯一なる利益を擁護するは帝國の幸寧と安全との爲め緊要缺くべからざるものなり故に如何なる行爲たるを問はず苟くも韓國の地を不安あらむむるものは帝國政府に於て之を着過すること能はず然るに露國は其清國との公約並に清國に與へたる保障の存在するに係はらず依然滿州を占領し進んで韓國疆域に侵略的行動を敢てするに至れり若し滿州に於て露國の併呑に歸せんか韓國の獨立は固より支ふべからず故に帝國政府は速に露國と交渉を開き兩國利害の接觸点たる滿韓兩地に於て相互の利益を友誼的に調理し以て東亞の和局を永久に維持せんことを期し昨年七月過露國に向つて此希望を披瀝し賛同を求めたるに悦んで同意する旨を回答せり帝國は八月十二日栗野公使を以て協商の基礎とし

て左の條件を呈せしむ

- 一、清韓二國の獨立と領土保全を尊重する事
  - 二、清韓に於ける各國商工業の爲めに機會均等の主義を維持する事
  - 三、露國は韓國に於ける日本の唯一なる利益を承認し日本の滿州に於ける鐵道經營に就き露國の特殊なる利益を承認し併せて一項の主義に反せざる限り前記の利益を保護する爲めに必要の處置を取る事
  - 四、韓國の改革助言は日本の掌權に屬する事
  - 五、韓國鐵道を滿州に延長し東清山海牛莊線連絡を妨害せざる事
- 當時帝國は交渉速に解決せんとを期し露國にて直接商議を希望せるも露國は皇帝外遊其他の理由の下に拒み已むを得ず東京に於てするに決せり露國公約十月三日を以て其大案を提出す露國は清國の主權と領土保全の尊重と各國商工業機會均等の主義維持を拒み滿州と其沿岸は日本の利益範圍外に置かんことを求め韓國に關しては日本の自由行動權に制限を附し利益保護必要の場合出兵を認むるも軍器土の目的に使用するを許さず且つ北緯三十九度以北の領域を中立地帯となさんと提議せり
- 露國滿州併呑の意志なくば何故に之を拒むや帝國は既に商業上重大なる利益を有するのみならず將來益々發達し望あり政事上にては韓國との關係より一層緊

切の利益あるを以て斷然之を拒絶に決し其意見を始め露國の提議案に對する修正意見として提出し中立地帯は滿韓國境兩側に亘り六十キロメートルの地域なるべしと提議し屢々東京にて折衝の結果遂に十月三十日我確定修正案を露國へ提出し數回其回答を催告し漸く十一月十一日に至り之に接す然るに露國は滿州に關する條項を削除し協約を全然韓國に關するものとす而も軍器土制限中立地帯に就き主張を固執せり

之れ友誼的に衝突の原因を除かんとする當初の主旨に反するを以て十一月二十一日露國に再考を求め又韓國に就ては領土使用上の制限削除を要求し滿州に跨らざる中立地帯設定の不同意を以て全廢を提議す露國は一月六日回答せるも韓國に就ては前提議を固執し滿州に就ては清國と條約上の利權を阻害せざるべきを承認し領土保全に就ては何等言明する所なし

滿州併呑の意明かなり故に帝國も修正案を堅持するに決し一月十三日重ねて再考を求め爾來數回回答を促したるも露國は皆に答へざるのみならず之を與ふべき時期すら指定せず

要するに帝國は終始溫和と公平を以て正鵠とし露國に毫も堅きを責めず屢々任意に聲明したる主義を承認せんことを求むるに過ぎざるも露政府は飽くまで之を峻拒し不當にも回答を遷延し乍ら一方には水陸の軍備を充實し大兵は既に韓國境を壓せり露國の行動は帝國をして遂に妥協の望を絶ち談判を斷絶するの已むを得ざるに至らしめたり

發行所 朝鮮新報社  
(電話十九番)  
發行所 韓國仁川港各國居留地十九號地  
小島正三

名 称	桂 太 郎 文 書
標 題	伊 藤 博 文 書 翰

分 類 番 号	18
	19

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

250761
10-1(1-2)
昭和6年11月10日

第廿一  
基盤

韓國駐屯軍の件

三十七年二月八日



250761

10-1

昭和6年11月10日

明治三十七年三月

韓國駐劄軍司令部及隸屬部隊  
編成及派遣之件

陸軍大臣 寺内正毅

參謀總長侯爵大山 巖

今ヤ時局ノ進捗ニ伴ヒ韓國駐劄隊ヲシ  
テ帝國公使館領事館及居留民ノ保護ニ  
任セシムルノ外尚之ヲシテ京城ノ治安



ト  
ニ



陸軍部文書

明治三十七年三月

韓國駐劄軍隊編入之件

參謀總長侯爵大山 巖

左ノ諸隊ヲ韓國駐劄軍隊中ニ編入セシ  
メラレ度謹テ奉仰 允裁候也

現制韓國駐劄隊中ノ步兵部隊及増加  
臨時派遣隊

後備步兵募十四聯隊募二大隊後備步



貴春

兵募二十四聯隊後備步兵募四十七聯  
隊募一大隊



ヲ維持シ且ツ作戰軍ノ背後ニ於ケル諸  
般ノ設備ト之カ警戒ニ任セシムルノ必  
要ヲ生スルニ至レリ然ルニ現制韓國駐  
劄隊ノ編制及同服務規定ハ此任務ヲ遂  
行スル爲適實ナラサルモノアリ依テ之  
ヲ改正シ先ツ別冊ノ要領ニ基キ韓國駐  
劄軍ヲ編成シ之ヲ韓國ニ駐劄セシメ大  
本營ニ直隸セシメラレ度謹テ奉仰  
乞裁候也



兵勇二十四聯隊、後備步兵勇四十七聯  
隊勇一大隊

明治三十七年三月

韓國駐劄軍隊編入之件

參謀總長侯爵大山 巖

左ノ諸隊ヲ韓國駐劄軍隊中ニ編入セシ  
メラレ度謹テ奉仰 乞裁候也

現制韓國駐劄隊中ノ步兵部隊及増加  
臨時派遣隊

後備步兵募十四聯隊募二大隊後備步



桂内閣

250761  
10-1(1-2)  
昭和6年11月2日

總理大臣  
蔣中正親筆



佐々木大造

鐵

育  
公  
子

府内各机关  
总务部长  
连署上奏案  
各省各机关  
以上各机关  
一律奉  
准



及外部大臣共各商  
而後之。市以來  
韓國方面傳及各  
浦港均予駐屯  
七ノル軍隊。電  
線乃居留地安否  
維持之目的。是  
韓國之爲之。凡  
以得之。通定  
其。今殺日露

西韓下形勢一書  
仕。得。水。韓。國。京  
城。乃。各。再。港。場。  
公。使。領。事。及。各。局  
民。子。在。各。地。域  
之。心。成。以。限。  
平。和。情。勢。  
總。續。也。之。各。國。  
行。通。之。透。起。也。

凡シ得來ハ予起  
意ハ大目ニ於テモ  
同義ニ及ルハ  
商域増大ニ對  
林上係合類ニ要求  
易ニ得ルニ成ル  
子海神ニ理情  
之傳ニ以維持可  
方得來ナリ云々  
昨夕相傳ヘテ  
思見ニ陳奏仕運

有天下

害禮

以爲魁特以下

且其年卜

閣下於一

謬誤一

失其

記其

陸軍一上

萬古以觀其變  
以直養而如也  
動使下之  
操而之  
下以成其  
諸君行  
得命而  
之今以上  
小亦無健

卜以協福之上昭來  
之國而元老實  
吾之年而得少子  
思是之之張少固  
執之凡之之意  
物底才少之金徽  
一之少之乃

二月八日 焚文

桂香自相聞

名 称	桂 太 郎 文 書
標 題	伊 藤 博 文 書 翰

分 類 番 号	18
	32

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

第廿五號

轉拓

殖國

增會

兵社

關

了件

五  
年  
月  
日

250762
101-1
民國26年11月30日



佳音親相國友

250762

10-1

昭和21年10月



佳音親相國友





未求修德正  
絕音聲聲如  
之在當時  
台侯書詢如  
送加美少年  
持以奉目之  
少祖通特自

法也抑揚擲家  
易之臨定之功難  
奏少乃止臨相性  
復之煥陽兵河  
亦亦生之情家  
有得之事實難  
何後得也同家  
利之得相利

統其全歸於心

然其振殖厚

社之之之之之

年則統其心

承其心

讓其心

其心

桂久乃國

支那國係

北陸新市佐

道水佐王

王梅齊國

立安乃石

水乃國

水乃國

反校部力家

事新部力家

事新部力家

事新部力家

事新部力家

事新部力家

事新部力家

名 称	桂 太 郎 文 書
標 題	伊藤博文書翰

分 類 番 号	18
	33

登 録 番 号	
------------------	--



250762
11-1
昭 6 = 11 = PE

韓國

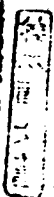
の  
情勢通知

第三  
十一  
期  
第  
一  
冊

四十二年六月十日

250762
11-1
昭和6年11月7日

桂陸軍大將殿親展



宋

竹藤統學

去病初候時、  
暖氣が増え、  
健康増進、  
韓国、  
正午、

一、涉の急を要  
 二、撥入恩倫万  
 三、政の得る根本的  
 四、動搖する許從來  
 五、方針の遂行に  
 六、此市の内部に  
 七、大官の在るに  
 八、要する如く畢  
 九、有る防遏手  
 十、外から其内情

曲々即りうい筆紙ノ

書面之所ヨリ多ク且之ヲ

詳説スル必要之急

府々ヨリ下存ハ特

切傷多ク

本邦政界ノ事情

至リ新以位ナ

承知ナク外要路

之通信一切無ク

外好ニ電報ハ概

新電ニ梯ノ坂ニ  
領事館ニ其  
他國內之事情  
論述國政若更其  
真情ヲ通報スル  
無シ又教ヲ以  
カント王欲セテ  
自國ノ存  
盡平仕ル  
外為其代山

事以爲、音同、絕  
其、故國、音同、本  
以、報、各、不、以、起、  
、劉、統、學、由、靜、近  
、一、及、爲、以、正、年、  
情、中、以、正、年、  
狀、政、治、野、音、見、  
正、格、以、同、或、  
主、外、篇、子、以、熟、種、  
以、物、意、年、一、格、以、



仰之君福子以

夏方定此乃移

高見之同極

王振現存此

家運以富貴

人

暴虎王情況乃

之對元手如

日中佳水

於此以故心  
習福則後也  
事立始少也  
故國中亦大  
言以語之  
讓海明也  
由之而  
定之  
持之

名 称	桂 太 郎 文 書
標 題	伊 藤 博 文 書 翰

分 類 番 号	18
	36

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

長谷川大將越権の事付

第 四 五 号

250763  
12(123)  
昭和26年11月9日

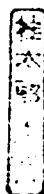
十一月九日

250763

12-3

昭和26年11月9日

桂  
總理大臣閣下  
祝  
展





伊藤筑也

250763  
12-3  
昭和26年11月9日

蕭風少は相風

家日下は後世劇

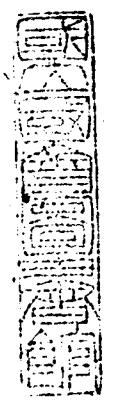
多為沙多年下相集

定つるは一

昨古矣秘工友等

出詳如若若下

上道多若い西一



大雅文庫

古詩下  
古詩下

古詩下

古詩下  
古詩下

古詩下  
古詩下

古詩下  
古詩下

古詩下  
古詩下

古詩下  
古詩下

古詩下  
古詩下

古詩下  
古詩下



ト混淆る御難

得其意を得るは

其例少く故に

意に限り炭香を

三心ふくむ事

寺内陸におぼ

うゝ宋来暖

書中李密九来

東より年々金ノ哀

許三子表此  
居是又閣下筆  
如所符

今明六年

友南超勸學

云、儀尊慮為

但多矣身失

何在元分

在人也

統崇下為時協保

子中  
少生  
奉口

年  
安  
上  
可  
於  
興  
洋

赴  
之  
友  
海  
東  
上

子  
安  
年  
亦  
親  
之

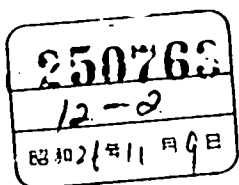
勿  
之  
子

西  
子

月  
中

艾

桂  
虎  
園  
中



公署  
必  
收  
長  
官  
印  
在  
此  
監  
察  
下



桂木卯文書

王

禹城

王

250763  
12-2  
昭和26年11月9日

秋冷少集

関下信

少為稿

如賀

新改

少の

陳本

付

為越

本電



日大物、如所望  
 今輕才重定之靈  
 神智之實、所謂  
 前名入懷之處  
 少、老安、心  
 月實、持、心  
 過中、心、概、持、外  
 過、心、心、心  
 之、心、心、心  
 則、心、心、心  
 受、心、心、心

保つ制4とさう不注  
 意と毎々呉々元謝  
 天変とせは統進下  
 二校と批共カ故意に  
 母と買とと文カ  
 如クとと考、とと集選  
 億とと分とと以互  
 市とと實とと統照下  
 一とと上とと兵とと依頼、  
 一とと上とと一とと少とと此とと以とと  
 一とと上とと一とと力ととと  
 一とと上とと一とと力ととと  
 一とと上とと一とと力ととと



何年寛大

市吏在朝夜、而丁

中子作、出細、天香

細、今、通、郭、江、悦

尾、主、也、務、校、始

才、有、家、を、多、り、終、に

大、皇、新、言、前、後、不、思、に

信、に、と、是、に、入、實、に

周、り、入、る、に、多、く、を、た、り

中、に、余、に、期、後、に、有

多、く、好、む

此、日、に、下、る

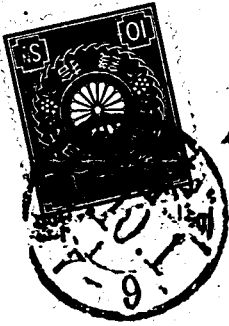
佐、益、関、人

東京大森

伊藤公使閣下

書留

親展



250763

12-1

昭和26年11月9日

番號票

東京大森町四丁目

壹五六

往大森文書





京城南山町

宋秉峻



250768

昭和26年11月9日

謹テ白ス向日鄙墨ヲ呈セシ後内田良平ノ書ヲ  
 獲タリ大要ハ閣下カ木子容九ヲ引見スルニ願末  
 ニシテ實ニ惶悚ニ堪ヘス事ノ茲ニ至リシ所以ハ辨疏セ  
 サルヘカラサルノミナラス拜答スヘキヲ命セラレシヲ以テ粗末實  
 情ヲ左ニ披陳ス

李容九カ閣下ニ呈セル書ハ己ニ内田良平ヨリ回付  
 セラレテ現ニ拙職ノ手中ニ在リ激語ヲ以テ閣下ニ對  
 セル程度ハ猶ホ一進會カ往年敝政府ニ反抗セシ程  
 度ニ異ナラス此レ書記セルモノ、禮ヲ知ラサルナリ李容九  
 ハ閣下ニ對シテ此ノ如ク激語スヘキ人ニ非ス實ニ此ノ如  
 ク激語スルノ人ニ非ス拙職カ李容九ヲ仙瀛ニ送りレハ



唯タ仙瀛ニ遊ヒテ疾ヲ養ヒ以テ煩累ヲ免レシメントス  
ルニ在リシナリ本人モ亦實ニ窮迫セラレテ逃出セシナリ一進  
會カ李完用ニ懷烏タラサルハ閣下ノ知リタマフ所ナリ然  
ルニ閣下在セハ其攻撃閣下ノ威靈ヲ以テ激甚ナ  
ルニ至ラス閣下一タニ拳趾セラレハ會員攻撃ノ衝點  
ハ李容九トナリ甚シキニ至リテハ李容九カ李完用ヨリ十  
萬圓ノ賄賂ヲ受ケ以テ内閣ヲ攻撃スルコトヲ中止セリト  
譏誣スルモノアルニ至ル李容九ノ苦衷見ルニ忍ヒス聞ク  
忍ヒサルモ現内閣ノ直ニ更迭スヘカラサルハ此レ亦タ閣下ノ  
知リタマフ所ノ如シ故ニ遊日養病ニ托シテ其銳鋒ヲ  
避ケシナシナリ彼書中ノ事ノ如キハ決シテ松職カ閣知ス  
所ニ非ス李容九ニ隨行セシ後カ李容九ヲシテ彼書ヲ

呈スルノ念ヲ發セシメヤ明ナリ不愼ノ至リタルコトハ拙職  
李容九ニ代リテ之レヲ謝ス拙職須ラテ書ヲ李容九ニ贈  
リテ其不愼ヲ戒ムヘシ唯願クハ閣下先書ニ反覆セシ  
李容九カ血ヲ吐クニ至リシ真情ヲ哀憐シテ之レヲ寬假  
シタマハレコトヲ

一進會衣食問題ハ

閣下ノ垂憐ヲ以テ幾回カ甞

蘇セリ今亦此問題ヲ以テ哀ヲ

閣下ニ乞フハ

閣下

札

閣下ノ赫怒ヲ蒙フル所以ナリ然レトモ之レヲ提

シ之レヲ擻シ之レヲ懷ミシ之レヲ抱ニシ以テ今日ニ至リテ之

レヲ弃テタマハ唯タ李容九ヲ死地ニ推スノミナラズ又之

レヲ提シ之レヲ擻シ之レヲ懷ミシ之レヲ抱ニセシモノト加ヘサルハ

カテサルノ慘事ヲ見ルニ至ラレ所謂日本黨ナルモノヲ殄滅スル

に至ラレ九百餘人ノ犠牲ハ眞ニ芻狗タルヲモ能ハサシ  
所謂挾雜ナルモノハ敵邦人ノ特有ニ非ス日本人ニ大挾  
雜多シ官人ヲ欺瞞シテ其身目ヲ掩蔽シ新聞紙ヲ利  
用シテ上下ヲ幻惑シ以テ各利スル所アラセト欲ス今ヤ一  
進會ハ譏誣ノ重圍ニ陥リ一進會員ハ激日印ノ極  
度ニ達セリ此間ニ在リテ惑ハサレサルモノハ唯タ  
人アルノミ伏テ願タハ李容九ヲ慰藉シテ淹留月餘ナ  
ラレノ以テ李容九ヲシテ歸國スルヲ得セシメタマヘ此レ甚  
ク恩ニ徂レ恩ヲ叨リニスルニ似タレトモ 閣下ノ深慮ヲ  
請フ所以ノモノハ實ニ此ニ在リ之レヲ抱キタマフカ故ニ之  
レヲ負ヒタマフコトヲ乞フノ心事ニハ非カルナリ

萬事

閣下ノ 回駕ヲ期ス筆紙ノ能ク悉クス所

、非々事急ナルヲ以テ敢テ萬一ヲ披陳ス伏テ請フ  
慈暎ヲ垂レタマハレコトヲ

十月一日

宋東坡再拜

伊藤統監 閣下



名 称	桂 太 郎 文 書
標 題	伊 藤 博文 書 翰

分 類 番 号	18
	37

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

250768
3-1
昭和6年11月9日

第卅六  
冊

進會處分付

甲子年二月一日

第一、這所定之  
事、自是、當、根、到  
統、當、若、協、議、生、及  
其、此、係、必要、之、事  
其、目、之、意、表、示、之、  
其、上、部、分、方、法、  
針、方、法、之、以、措、置  
針、方、法、之、以、措、置

トモ 物一定之方  
針方法ヲ以措運  
スルヲ 不極ツ宋  
内 尸ハ人ニ最  
恩惠手紙ト云  
負ノ重立者ニ 秋之  
旨、徹底ニ極ル  
且各地方幅リ誠業  
ニアリツク極ニ  
海ニ再立依ル心  
起スルニ至リ  
故ノ故年ノ事

海之西  
應依教心

起  
多  
多  
多  
多

故  
之  
故  
斗  
之  
多  
多

月  
今  
片  
秋  
之  
心

以  
約  
未  
之  
想  
之  
心

速  
之  
以  
送  
之  
心

有  
之  
勿  
之  
相  
具  
心

士  
月  
之  
心

其  
心

桂  
首  
自  
相  
心

名 称	桂 太 郎 文 書
標 題	伊 藤 博 文 書 翰

分 類 番 号	18
	38

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

250763	
4-	
昭和6年	月 日

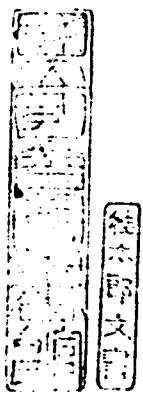
支那對支意見

第七世  
第卅五梯

四十年十二月一日

桂内閣總理大臣閣下  
親展

250768
4-1
昭和26年11月9日





殘

伊藤鏡廸

刺戟神戸港相争  
後金御清促事爰  
國務以鞅事進契  
待陳者日米協商  
公文以竟以表表相  
成中外賞讚之聲



勢一挫之平一畢責  
每時權之投乃為平  
各方面、安心と與、併  
大成功、為國家、  
慶賀不能措、

北東出、後幸、時  
局、續、中、靜、維  
多、改、之、中、以、日、慶  
、之、將、其、自、恩  
考、政、之、得、之、支、那、

於建之宮，杞憂一  
之憂，卜象，今之  
吏之角，御滿州  
朝廷，印政府，權力上  
大，步，釋，之，蒙，り，り，り  
少，信，論，其，上，之，年，者  
人，物，年，之，張，袁，多，一  
時，之，角，縫，結，托，之，程，時  
多，乃，其，之，心，之，重  
帝，之，據，之，四，方，是，令

之勢を盡力以て  
上於一西太后此  
況後日之隨言  
中難解之勢力  
之利之競年之  
之實回必之  
之軋轢之生之  
終其教令之自  
地之波及之況  
來地方民心之  
況之流氣之帶  
來

憲法政治論 利權

回復論 如キニトシテ民

權 偏 其 達 々 アラハルナシ

政 府 部 内 規 範 争 議

止マシ 出 可 止 民 心 胚 胎

シテ 勃 興 々 勢 力 競 争

至テハ 之ヲ 制 御 之 能 フ モ

只 統 御 者 雄 大 々 威 力

ト 識 見 シ ト 々 其 の 所 待 然

今 如 上 々 不 幸 際 々

政府權力之減削衰微  
憲政利權之公  
論之藉以答者、民衆  
之學、動之其勢力達  
之政府之逼迫、自能  
趨於進步、而此秋心  
京大、官多、地方總督  
命之之抑、制是也、  
到底、其希望、達不  
能、論之、  
論之、

地方行政之利権回復  
論、如キハ此ニモ少キハ命  
令ニヨリテ地方官憲  
等ト人民トノ合同働  
キニ出ルモノタルヲ少キ  
愚見ニ於テ是ニ目清  
區タル協議ヲお  
得ルヤ否ニ依リテ其政  
府ノ協定ヲ整  
地方官憲及人民



之道守履ハス  
方ハ少ハ不投疑ト  
存ル且志述、如ク権  
則之、果シテ支那安運  
無事平穩ニ彼岸  
達スルヤ甚ク難同ト  
属セリハ殊ニ其ノ爲ニ  
宜シキハ小村外下  
志子ハ付家能成方  
小生ハ把要ニ能措

有

韓國之車公伯  
韓公日尚淺之熟  
取執事情觀衆  
中亦有之只當  
以內話一區之  
完用宋乘暖共  
首、省識中出  
方之間石平不  
望之收神上結

一時に并者はあるが  
省識して根拠甚  
く薄弱して至るに公  
論を何とも感懐  
無実トテモの申す  
事完用の方大  
不同を申すも且  
傍々懇心と説法  
加へ思ひ留るゝ一  
法は、案の容易し

決心ヲ觀梵經ニ説  
破有破ヲ！

地方暴徒ノ氣焰

大ニ減シテ得ル所

賊類ノ至底絶其

迹。實自今ノ年ニ

於テ現存ノ兵力ノ減

少待テ來ルニ至リ

考テ然ル也

本自ニ要領明瞭



名 称	桂 太 郎 文 書
標 題	伊 藤 博 文 書 翰

分 類 番 号	18
	40

国 立 国 会 図 書 館

登 録 番 号	
------------------	--

250763

6(1~2)

76年11月9日

韓帝巡幸ニ  
関す  
付

第九世  
第其辨

四十二年  
一月五日

桂  
總  
理  
大  
臣  
視  
察

250763
6(1~2)
昭和26年11月9日



桂太郎六書



成

錦城  
興  
文

250763  
昭和26年11月9日



井上千吉九時世に  
新義初巻を  
監理者出泉  
伊原俊監

貴書感謝入今日迄は幸

二同音戸ニ  
鑑定せり  
伊原

心と云

来才小母音

市之市了得

少如小市

市之市了得

市之市了得



為謝中書韓南

此書今口口口口

居、操、之、所

於、心、少

皇帝、氣力一

倍、顏色、紅、足

下、殊、其、超

其實、日、有、信、賴

元氣色龍顏

現<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>金<sub>レ</sub>所

後古名者輩

北地巡狩<sub>レ</sub>途<sub>レ</sub>中

公南<sub>レ</sub>還宮<sub>レ</sub>家

多<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>公<sub>レ</sub>家

多<sub>レ</sub>中<sub>レ</sub>寒<sub>レ</sub>冒<sub>レ</sub>氣

味腸胃<sub>レ</sub>病<sub>レ</sub>惟<sub>レ</sub>現

王得之曰景罕執  
氣

年賜書到全愈

之得之是非昭昭

日之得之隱從醫田

以之得之出也神

以之得之望帝系

以之得之望也

以之得之望也

以之得之望也

効果望尺子道得寸

願之南北韓民

之于一舉我信賴

之外途幸知是

欲之出表卿諒

家之常事

曹根

王凡於之權

至平今卧學也

谷川吉帰途に就  
来月4日新渡戸  
前山に於て  
二月十日前後  
東京に於て  
中絶休息  
中



陳以祿容祖

元先諸公

諸相家書

告歛

誠懼

一月念五

艾

桂族相